ようこそ翡翠学園へ

専学

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ようこそ翡翠学園へ

【Ｎコード】

Ｎ８０４５Ｈ

【作者名】

専学

【あらすじ】

琥牙大河の周りには強い少女たちがいた。ヤンデレの幼馴染？学園最強のお姉さん？修行好きの喧嘩仲間？侍のかぶれの転校生？忍者の末裔の後輩？そんな５人に囲まれた琥牙大河とは一体何者？大河の一言《ただの高校生です》

作《いろんなゲームをやっているため作品がかぶるかもしれないのでそこはご了承ください》

Ｎｏ，０　眼帯の少年《主人公です》（前書き）

ヒロインたちはだんだんと出していくので、最初は主人公を見てやってください。

Ｎｏ，０　眼帯の少年《主人公です》

「ふぁ～」

俺は大きく口を開けてあくびをしながら歩いていた。

俺の名は琥牙大河（こがたいが）。翡翠（ひすい）学園に通う十六歳の少年だ。ちなみに二年だ。特徴は訳合って左目の方に眼帯をしているのと両手首にリストバンドをしている。俺は今、学園から一人で帰宅路を歩いている途中だ。

いつもは、必ず誰かと一緒に帰るところだが、今日はみんなして用事があるということなので一人で下校している。

別に一人で帰っているからって寂しいんじゃないんだからね。・・・・・なんとなくツンデレ風にやってみたけど悲しいだけだな。

「・・・しかし、暇だな。コンビニで立ち読みでもしていくかな？」

俺はさっきのことをなかったことにして、いつもお菓子や飲み物、雑誌などを買っているコンビニに立ち寄った。

「コンチハー」

俺は気軽にコンビニの中に入るとそこには異様な光景があった。

「だ、誰だ、お前は？」

まず、俺に声を掛けてきたのは刃渡り二十センチのサバイバルナイフを小学高学年の女の子の首に押さえつけたマスクを被ったおっさん？《声から勝手に判断しました》だった。

女の子はたぶん買い物に来た子だろう。恐怖で何も言えない状態だ。

「あ、大河君」

次に、このコンビニのアルバイト、壱草奈絵（いちくさなえ）。十七歳。只今恋人募集中。が、レジからお金を出しながら声を出してきた。ちなみに奈絵は少しばかり涙目だった。

俺はこの状況を見て、すぐにこのコンビニに強盗が押し寄せてきたのだと理解した。

へ～、こんなことって漫画や小説のなかだけだと思った。
「あ、ごめんなさい。俺、用事思い出したから帰ります」
俺はそんな状況に関わりたくない為にとっさに思いついた嘘を言葉に出し、コンビニから出ようとした。
「おい、ちょっと待て」
しかし、強盗に呼び止められてしまった。
ちっ、やっぱり、そう簡単に逃げられないか。
俺はとりあえず顔だけを強盗に向けた。
「なんですか？俺、今から用事があって行かないといけないんですけど」
「いいから来い。こいつがどうなってもいいのか？」
強盗は女の子の首にさらに強めに押えつけた。
「わかった。わかったから。それだけは勘弁してくれ」
目の前で女の子を殺されてもしたら目覚めが悪くてたまらん。仕方がない、気が進まないがさっさと終わらすか。
「なら早くこっちに来い」
「へいへい、わかりました・・・よっと！」
俺は振り向いた瞬間、強盗の顔面に向かって鞄を投げた。
「なっ」
強盗は驚きながらも、俺が投げた鞄を女の子の首に押さえつけていたナイフで払い落した。俺はその瞬間を狙った。
「いただき」
俺は鞄を投げすぐにコンビニ強盗に向かって一気に距離を詰めた。そして強盗が鞄を払い落した瞬間、その鞄を払い落した方の手首を掴んだ。
「おっさん。運がなかった」
「え？」
強盗は何が起こったのがわからなかった。
「あのまま、俺を帰しとけばこんなことにはならなかったのになっ！」

俺はまず始めに、強盗の顔面を殴った。
「ぐふっ」
強盗はそのまま、殴り飛ばされそうになった。
しかし、俺が手首を掴んでいる為、飛ばされることはなく、逆に俺が自分の方に引っ張って、もう一度顔面を殴った。
ついでに、強盗が人質にとっていた女の子はというと。俺が強盗の顔面を殴った瞬間、女の子を押さえていた強盗の腕の力が弱まりそのまま床に落とされ、いつの間にかカウンターから出て来ていた奈絵に保護されていた。
「まだまだ、こんな物じゃ終わらないぞ」
俺はそのまま、強盗の顔面を始めとし、腹、鳩尾、脇腹、胸などを殴った。
「これでラスト」
そして、最後に俺は今まで掴んでいた手首を話し、強盗の腹に向かって思いっきり拳を入れてやった。
強盗はそのまま後ろに飛ばされて、商品棚にぶつかり、商品をちらかしながらそのまま気絶した。
「おし、片付いた」
俺は強盗がいつの間にか落としてあった、強盗のナイフを取りカウンターに置き、強盗のベルトを取り、それを使って手首と足首を固定した。
ついでにマスクも取っていくか。
俺はそう思いながら、マスクを剥いでみた。そしたら、なんと声とは違って強盗の素顔は大学生みたいだった。
なんだ想像していたのと違ってつまらないな。まあ、いいや後は警察を呼んでおこう。
「奈絵さん。大丈夫？」
俺は奈絵さんの方を振り返った。
「あ、うん。大丈夫」
奈絵は微笑んで女の子を抱きながら俺に近づいてきた。

「ありがとう。助かったよ。この子も無事みたいだし、やっぱり大河君は強いね」
「いやいや、俺はまだまだ弱いですよ」
俺は照れながら頭を掻いた。
「まあ、それは置いといて。でもさ、私が襲われている光景を見て、すぐに出て行こうとするのは酷くない」
奈絵は微笑みながら俺を威圧してきた。
「サテ、ヨウジモスンダシカエルカナ」
俺は雲行きが怪しくなってきたのを感じて、すぐにここから去ろうとした。
「このこと、あっちゃんに言っちゃおうかな？」
奈絵は怪しい笑みを浮かべていた。
「それだけは勘弁してください」
俺は目にも止まらぬ速さで奈絵に向かって土下座をした。
姉さんに知られたら何をされるかわかったもんじゃない。
「冗談だよ」
奈絵は女の子を降ろして、楽しそうに笑った。
「なんたって、きちんと私を助けてくれたんだから。本当にかっこよかったよ」
あー、やっぱり奈絵さんはあの人違って優しいな。
「いや、そんなに褒めないでくださいよ。見捨てようとしたのは本当なんですし。それじゃあ、俺はそろそろ行きますよ」
俺はコンビニから出ようとした。
「あ、ちょっと待って。大河君」
しかし、奈絵に呼び止められてしまった。
「ん、何？」
「はい。これ、強盗から助けてくれたお礼」
俺は奈絵から袋を渡されてしまった。
「いや、本当にお礼なんていいのに」
俺は袋の中を確認してみた。袋の中には肉まんがいっぱい入ってい

た。
「こんなに貰っていいの？」
俺は驚きながら聞いてみた。
「いいよ。ほとんどが余り物だし、貰ってってよ」
「あ。そうなの。わかった。ありがたく貰っていくよ」
そして、俺は今度こそコンビニから出ようとして。
「あ、そうだ」
あることを思い出した。
「警察ってそっちで電話する？それとも、俺が電話しようか？」
すっかり強盗のことを忘れていたよ。
「あ、そのこと。そのことは私が連絡しとくから」
そう言って、奈絵は携帯電話をコンビニの制服のポケットから出した。
「わかった。それじゃあな」
「うん。ばいばい」
奈絵は手を振りながら、俺を見送り電話をし始めた。
早速、警察に電話するんだな。
「あ、お父さん？実は痛い目に会わせたい奴がいるんだけど、若い人、5，6人こっちに送ってくれない」
・・・・・うん。聞かなかったことにしよう。
俺は今度こそコンビニから出て行った。
そして、袋から肉まんを一つ取り出し、
「いただきます」
かぶりつきながら、歩いて行った。
あ、結局、立ち読みしなかったな。まあ、いいか。

Ｎｏ，０　眼帯の少年《主人公です》（後書き）

次回予告

作《今度は侍ガールだすかな？》

大《適当だなこの作者》

Ｎｏ，１　公園の出会い（前書き）

宣言通りに侍ガール登場させてみました。

No，1　公園の出会い

「うん。うまいな」
俺は奈絵さんから貰った肉まんを頬張りながら公園のベンチに座っていた。
「しかし、これで最後の一つか」
俺はあっという間に肉まんを平らげていた。
こんなことならもう少し貰っとけばよかったな。
と、思いながら最後の一つを口に含んだ。
「だから、断ると言っているだろうが！」
そしたら、遠くの方から怒鳴りつける声が聞こえてきた。
なんだ、ケンカか？
俺は気になりそちらの方を見てみると、そこには木刀を手に持った、漆黒の長い髪を後ろで一つにまとめ、俺が通っている学園の指定ジャージを着た少女とサルと豚とモヤシがみたいな青年三人組がいた。どうやら、状況から察するようにどうやら、ナンパみたいだな。
「私は今、剣の修行で忙しいんだ。だからとっととどこかに行ってくれ」
そう言って、少女は殺気を瞳に込めながら三人組みに向かって木刀を突き付けた。
おー、怖い怖い。
俺はもう、肉まんを頬張りながら観戦モードに入っていた。
「それとも、何か？全員で私の剣の修行相手にでもなってくれるのか？」
その言葉を聞いた瞬間、三人組はゲラゲラと下品な笑い声を上げた。
「ああ、そうだよ。こう見えてかなり強いんだよ。剣の腕前も中々もんだよ」

「でもまあ、剣は剣でも男の剣だけどね」
「だから、君のその大きい胸を鞘代わりにしてさ、僕らの剣を収めてくれないかな？」
三人組はニタニタしながら少女の体を見定めていた。
下種だな。しかし、本当にでかい方だな、Ｃぐらいはあるかもな。
人のことが言えない俺だった。
「げ、下種めが。成敗してくれるぞ」
少女は顔を赤くしながら木刀を構え直そうとした。
しかし、その一瞬が命取りだった。
「おっと、そうはいかないよ」
金髪はいつの間にか手にスプレーを持っており、少女にそれを吹きかけた。
「な、何をふ・き・・・かけ・・・た」
少女は眠るかのようにそのまま倒れてしまった。
「俺特製の睡眠スプレーだよって、もう、聞こえてないか」
「なあ、どこでこの子の修行する？」
「あの人眼がつかない茂みでいいんじゃないか？」
三人組は鼻の下を延ばしながら、これからのことについて話した。
さて、そろそろ行くかな。
俺はそう思いながらベンチから立ち上がり、家に帰ろうとした。
「なあ、お前どこやる？」
「俺は口かな」
「じゃあ、俺、下ね」
「じゃあ、俺は胸な」
三人組が俺には気がつかないでまだ、話し合っていた。
俺は気にしないでそのまま歩き続け。
「お前ら、邪魔」
わざと三人組にぶつかった。
同じ学校の奴だからよしみで助けてやるか。
「な、何すんだよ！」

サルみたいな奴が俺の肩を押し。
「俺達これからいいことするのにテンションがた落ちじゃねーか」
「どうしてくれるんだよ」
今度は豚野朗が俺の顔に迫って来て。
うわ、汗くさ。
「おとしまえとして、金を置いてけ。金を」
そして、最後にモヤシみたいな奴が何故か俺の胸倉を掴んできた。
「うざい」
でも、俺はそのモヤシに対して顔面に裏拳をした。
モヤシはそのまま何が起こったのかわからず倒れ込んでしまい、動かなくなってしまった。
あ～、力加減間違えたかな？まあ、いいかと思いながら。
「お前、汗臭いんだよ」
そのままモヤシを殴った拳で豚野朗の顔面を思いっきり殴り飛ばした。
豚野朗はそのまま後ろに吹っ飛ばされ、鼻血を流しながら気絶をした。
「え？」
サルは何が起こったかわかっていない様子だった。
「うわ～、汗でベトベト。やっぱり、顔面より腹を殴るんだったな」
俺はサルが着ている服にベトベトになった拳を拭いた。
「それで、お前はどうするの？」
「え？」
サルはまだ何が起こったか理解していない。
どんだけ、状況把握ができないんだよこいつは？
「まあいいや、とりあえず気絶しとけ」
俺はサルの喉を殴り、前屈みになったので頭に向かった踵落とし（かかとおとし）をした。
サルはそのまま前のめりに倒れ、地面にキスをすることになった。
「さて、帰るかな？」

俺はすべて片付いたので、帰ることにした。しかし、あることに気がついた。
「あ、やべ、忘れていた」
俺はスプレーを吸って、すやすやと眠っている少女を見下ろした。
「どうしようかな？」
煙を吸ったし、これじゃあ、当分起きようとはしないし、ここに置いていってもいいんだが。
俺は周りを見回した。
そしたら、ブランコに座っていた、リストラにあったと思われるスーツをハゲで肥満体のおっさんと目があった。
おっさんの目には、リストラの気晴らしにその子を襲いたいから置いて行きなさいと言っている感じがしたので。俺は即決断した。
「このまま放置しても何かあったら困るから。仕方がない。連れていくか」
俺は面倒と思いながら、すぐに行動に移った。
俺は少女の背中と膝の後ろに手を通し、持ち上げた。
世間で言う、お姫様抱っこという形だ。
「さて、行くか」
俺は少女が落ちないように気を付けながら歩き出した。
そこで、あることを思ってしまった。
あいつ、絶対怒るだろうな。
俺はたぶんもう、自宅に帰ってきている幼馴染のことを考えながら一歩一歩家に向かって行った。
いや、怒るだけじゃねえな。下手したら殺されるな。
自分の身の危険を感じながら。

Ｎｏ，１　公園の出会い（後書き）

次回予告

作《さて、次は大河にとって二番目に怖い幼馴染が出てくるよ。》

大《つか、さっきの少女の名前って出てないくないか？一応、五人のヒロインの内の一人だろ》

作《あっ。（やべ、忘れてた）。まあ、次回に回すからいいや。次回もよろしく》

大《・・・・・（こんなんでいいのかな？）》

Ｐ，Ｓ

質問や感想などを受け付けています。

どしどし、メールしてください。

Ｎｏ，２　　初登場でいきなり暴走（前書き）

すみません。お待たせしました。

No，2　初登場でいきなり暴走

俺は少女を連れて家に帰宅後、すぐに制服姿の幼馴染に見つかり、リビングで正座をさせられていた。
はっきりいいます。俺はとてもピンチです。
ちなみに俺が連れて帰って来た少女は幼馴染の部屋で寝かされていた。
「ねえ、大河」
俺を見下ろしながら幼馴染の朝瀬優燈（あさせゆうひ）は短く切りそろえた水色の髪を揺らしながら俺の名を呼んできた。
「な、何？優燈」
俺はさっきから背中に冷や汗をかきながら優燈を見上げた。
「なんで？私たちの愛の巣に転校生を連れて帰って来たか教えてくれる？」
優燈はゆっくりとした動作で俺の後ろに回って、俺の背中に胸を押しつけながら抱きついてきて、俺の肩に自分の顔を乗せた。
てか、いつから俺んちは私たちの愛の巣になったんだよ？それに転校生ってどうゆうことだ？
「そうしないと、私。暴走して大河を食べちゃうかも？」
俺が考えごとをしているのを気にしないで、優燈は耳元で囁き、俺の耳たぶをしゃぶり始めた。
「わ、わかったから。俺の耳を口に含むのをやめてくれ。優燈」
俺はあわてて優燈から離れようとした。でも、優燈の腕はしっかりと俺の胸板に回っており離れることができなかった。
「だめ。話してくれるまで離さない」
優燈は胸板に回している腕に力をいれて自分の胸を押しつけてきた。
このさっきから俺の背中に胸を押しつけてきている幼馴染はさっきも紹介したが朝瀬優燈といって。俺をものにしようといつもアプ

ローチをかけてくる女の子。今は俺の家に訳合って住んでいる。いつもは無口で過ごしているが俺や仲間たちの前だとかなり喋る。俺にいままで告白した数はもうすぐで千回に達するそうだ。・・・・・全部断ったけどな。何故こんなに、俺に好意をよせてくるのかというと。話は後で詳しくやるが、俺が優燈を虐めから救ったのが原因らしい。そのおかげもあってこういう事態が起こっている。・・・・・まじでどうにかしないとな。

「じゃあ、話すからしっかりきけよ」

俺は必死に理性を保ちながら、公園のできごとを説明した。

「へー、そうゆうことがあったんだ」

優燈は俺の説明で納得したらしい。

「大河って本当にお人好しだね」

「そうだな。俺もこんな自分に呆れるよ」

「でも、私はそんな大河が大好き」

これで何回目の告白になるのかな？

「ありがとう。でも友達でいような」

「また、振られた。でも、私は諦めない」

「あはは、何度来ても返事は同じだと思うぞ。そんなことより説明したんだから早くこの腕をとってくれないか？」

俺は正座のおかげで足が痺れてきたので優燈に腕を外すのを促した。

「・・・・・」

しかし、優燈は何も答えなかった。それどころか俺の背中にさらに胸を押しつけてくる。

「ゆ、優燈さん？なんで俺の背中に胸を押しつけてくるのかな？」

俺はその時、嫌な予感しか感じていなかった。

「・・・・・大河。ごめん」

優燈はまた俺の耳元で呟いた。

「え？」

なんで謝るの？

「私。もう、我慢の限界」
「何をいっている、うわっ」
俺は最後まで喋ることもできずに後ろに仰向けで倒されてしまった。そして、俺の上に優燈は覆いかぶさるように乗ってきた。
「はあー、はあー、はあー」
優燈は息を荒くして俺を見下ろしていた。
「大河が悪いんだよ。私がこんなにも告白しているのにいつも断るから」
「とはいえ、いきなり不意打ちはないだろ」
俺は冷静になりながら優燈を見上げていた。何故、冷静でいられているのかというと優燈に倒された時、思いっきり床に後頭部をぶつけたからである。
下手したらたんこぶができたかもな。
俺は後頭部にたんこぶができたかどうか確認したかったか、腕を優燈に押さえつけられていたため無理だった。
「それは謝る」
「謝るついでに腕を押さえつけるのもやめてほしいんだけどな」
そうしたら簡単に逃げることができるんだけどな。
「それは無理。腕を自由にしたら、大河は逃げちゃうでしょ」
どうやら、俺が考えていることは優燈には筒抜けのようだ。
「俺の考えはお見通しなのね」
「いつも、大河のことを考えているからできる芸当」
それって、俺にプライバシーが無いって言っているみたいなものじゃないか。
「大河にはもともとプライバシーって言葉はないよ」
酷っ！てか、確実に人の心を読んだろ。
「そんなの気にしない。気にしない」
「気にするわっ！」
「で、まじめな話なんだけど、大河、私と付き合って」
「いきなり話を変えたな」

まあ、いいけどさ。
「それで答えは？」
「すみません。お友達で勘弁してください」
「そう、そうなの」
優燈はがっかりとしている様子だった。
「それなら、本当は大河が嫌がるからやりたくはなかったんだけど、もう、既成事実を作るしかないね」
とんでもないことを言っているよ。この子。
「冗談だろ？」
「私は本気だよ」
優燈は俺の唇に自分の唇を重ねようしてきた。
「・・・・・優燈。悪いがそろそろ我慢の限界だ」
悪いな、優燈。お前は暴走しすぎだ。
「え？」
俺は優燈の唇が自分の唇に重なる瞬間、思いっきり起き上がった。
「きゃあっ！」
そして、逆に優燈を押し倒した。さっきとは逆の体制に入れ替わった。
「大河、いきなり何すんの？」
優燈は悲しそうに俺を見上げてきた。
「そんなに私と付き合うのが嫌なの？それとも、私のことが嫌いなの？」
優燈は今に泣きそうだった。
「どっちでもないよ。俺は優燈のことは好きだよ」
俺は優しい口調で喋りながら、優燈を見下ろした。
「じゃあ、なんで？」
私を拒むのと、優燈の言葉からそんな気持ちが伝わってきそうだった。
「俺は、優燈は好きだけどそれは友達の好きだし。もし、そうゆうことをやるなら優燈をきちんと愛してからやりたいんだよ」

俺は優しく微笑んだ。
「でも、もう私は我慢できない」
そこまで、禁断症状が出ているのか。
「なら、仕方がない」
これも優燈の為だし、覚悟を決めるか。
俺は覚悟を決めて、優燈のおでこに自分の唇をつけ、すぐに離した。まあ、簡単に言ってしまえば、優燈のおでこにキスをした。
「え？」
当の本人の優燈は何が起こったかわかっていなかったようだ。
「今はこれで我慢してくれるか？」
俺は自分の行動に恥ずかしさを感じたのか赤くなっていたのがすぐにわかった。
「ま、まさか、大河。私のおでこに」
「ああ、キスをした」
俺はそっけなく答えた。
「・・・・・」
優燈は嬉しさのあまりか口を開いて何も言えなかった。
「優燈。俺はお前を愛するかもしれないし、別の奴を愛するかもしれない。でも、お前の気持ちにきちんと答えれるようにするから今はこれで我慢できるか？」
こくこくと優燈は頷いた。
「そうか。それじゃあ、俺は着替えもしたいし部屋に戻ってもいいか？」
優燈はまた頷いた。
「わかった。それじゃあ、なんかあったら呼べよ。それと、お前も早く着替えとけ」
俺は立ち上がり優燈を放心状態のまま放置し、リビングから出て行った。
さて、明日は優燈のことだからアプローチが激しくなってくるからな、どうやって切り抜けようかな？しかも、俺がおでこにキスし

た後、たぶん、殆どの言葉を聞いてないから後で必ず話あった方がいいだろうな。
「おい、お前」
俺が考え事をして階段を上がろうとした時に、上の方から声が聞こえてきた。俺はその言葉に釣られて上を見てみるとそこには公園で助けた少女がいた。
「おお、起きた」
俺はこの時、安心しきっていた。
「あいつらの親玉だな。成敗してくれようっ！」
その瞬間、少女が木刀を振り上げながら俺に襲いかかって来た。
俺は油断をしたためそれをかわすことができなかった。

Ｎｏ，２　　初登場でいきなり暴走（後書き）

次回予告
作《やっとで侍ガールの名前が出てくるぞ》
大《やっとかよ！お前いい加減すぎるな！》
作《まあ、そんなの気にしない。気にしない》
大《気にしろよ》
作《ついでに新キャラも出すかな？》
大《本当に適当だなこの作者は！》

Ｎｏ，３　木刀とポニーテイル（前書き）

お待たせしました。遅れてすいません。

No，3　木刀とポニーテイル

バキッ！
何かが折れる音がした。いや、正確には折ったという方が正しいだろ。
「なっ！」
少女はその光景を見て驚きを隠せないようだ。
それもそのはず、なんたって俺に振り下ろした木刀を、俺によっていとも簡単に折られてしまったんだから。
「これってあんまりじゃない？」
俺は右手を振りながら少女を見た。
確かに俺は油断していて、木刀を避けることができなかった。でも、それは逆にいえば、避けることができないなら木刀を折ってしまえばいいという考えに至る。だから俺は、俺に向かって振り下ろされた木刀を自分の拳を使って迎え撃った。その結果木刀は折れ、俺の拳は擦り傷ができ赤く腫れていた。
「せっかく助けてやったのに、恩を仇で返すのは酷くないか？」
おー、いて～。やっぱ、素手で木刀を折るものじゃないな。
「え？お前はあいつらの仲間じゃないのか？」
少女は折れた木刀を構えながら、俺から距離を置いた。
どうやら、俺をまだ警戒しているらしい。
「ああ、そうだ。あいつらとは仲間じゃない」
「証拠はあるのか？」
あー、もう、めんどくさいな。
「じゃあ、聞くがお前は起きた時に手足とか拘束されていたか？」
「いやされていなかった」
「服の乱れは？」
「ない」
「その木刀はどうした？」

「ベット付近の机にたてかけてあった」
「それで、俺があいつらと仲間という根拠は？」
「今の質問からしてないな」
少女は構えを解き、俺に近づいてきた。
「助けてくれてありがとう。私は祈植渚（いのうえなぎさ）という。今日からこの付近にある翡翠学園に転校してきたものだ。以後、お見知り置きを」
俺は相手が名前を教えてきたのでとりあえず安心した。
「あ、自己紹介するんだ。それじゃあ、俺もしないとな。俺の名は琥牙大河。同じく翡翠学園に通っている。あ、それと、俺には敬語使わなくていいし、気軽に大河と呼んでくれ」
「わかった。それと、大河も翡翠学園に通っているのは本当なのか？」
渚は驚いたようだ。
「ああ、そうだ。ちなみに俺のクラスは2年F組だ」
「おお、さらにこれまた偶然か？私も2年F組だ」
ああ、だから、優燈が転校生とか言っていたのか。
「しかし、私は大河をクラス内で見かけていないし、話しかけられてもいない」
渚は残念そうにしていた。
何故残念がっているんだろ？
「そりゃあ、そうだ。俺、今日はずっと寝ていたんだから」
「え？」
「クラスで一人だけ、ずっと寝ていた奴がいただろ」
「ああ、窓際の一番後ろな」
「それが俺だ」
「なっ！」
渚はまたもや驚いた。
「ちょっと訳ありで、2、3日ぶっ続けで徹夜していたら、いつの間にか死んでいた。だから、俺は話しかけないし、うつ伏せして寝ていたから見かけることもできない」

「そうだったのか」
渚はようやく納得したみたいだ。
「まあ、そうゆうわけだから。これからよろしくな。何か困ったことがあったら俺に言え、相談ぐらいなら聞いてやる」
俺は渚の前に手を差しだした。
「ああ、わかった。それと、こちらこそよろしく」
渚もつられて自分の手を差しだし、俺の手を握った。
「何かあったの？」
そこでようやく、木刀の折れる音に気がついたのか優燈がリビングから顔を出した。
「いや、なんでもない」
俺はすぐに握っていた手を離し、右手を隠しながら優燈の方を向いた。
何故、右手を隠したのかというと、このことが優燈にばれると、優燈は渚に何をするかわからないからである。
「そうなの。それより起きたんだ。転校生」
そこでようやく優燈は渚に気がついた。
「ああ、そうみたい。だから、こいつにお茶を淹れてくれないか？」
「うん。わかった。大河の頼みごとなら素直に聞いてあげる」
優燈は承諾し、リビングの中に戻っていった。
「なあ、さっきのは朝瀬さんではないのか？」
渚は不思議そうに質問してきた。
「ああ、そうだよ」
「なんで、ここにいるんだ？」
「なんでって。ここに住んでいるからだよ」
「ということは、ここは朝瀬さんの自宅か？」
「いや、俺の家だよ」
「ん？いったいどういうことなんだ？」
渚は混乱している様子だ。
まあ、最初は誰だって混乱するよな。

「とりあえず、それも含めて説明するから、早くリビングに行こうぜ」
「ああ、わかった」
俺は渚を連れてリビングに入ろうとした。
ピ～ンポ～ン。
そしたら、玄関に取り付けたチャイムが鳴った。
ん、誰だろ？
「大河。私手が離せないから出てちょうだい」
優燈がお茶の用意をしながら言ってきた。
「はいよ。あ、渚はリビングのどこでもいいから座って待っていてくれ」
「色々とすまないな」
「まあ、あんまり気にすんな」
俺は渚をリビングに通して玄関に向かった。
「はい。どなたですか？」
「あーたーしーっ！」
外から元気な声が聞こえてきた。
「なんだ、鈴か。開いているから入ればいいだろ」
「両手ふさがって開けれないから、開けてちょうだい」
「へいへい」
俺は外から聞こえてくる声の指示通りに玄関を開けた。そしたら、野菜が入った段ボールを両手で持った少女、聖純鈴（きよずみりん）がいた。
「どうしたんだ。その荷物は？」
俺は野菜の入った段ボールを見て呆れた。
「えへへ、じーちゃんが大（だい）ちゃんの家に持っていけって」
鈴は嬉しそうに微笑んだ。
「あ～、そうなんだ」
じーさん、気づかいは無用っていたのにな。
「まあ、とりあえずごくろうさま。疲れたろ上がっていってくれ」
「うん。わかった」

鈴は家の中に入って来た。
「あ、それと荷物は俺が持つよ」
俺は鈴から段ボールを受け取った。
「あ、ありがとう」
鈴はまたもや微笑んだ。
突然だが、さっきから微笑んでいるこいつの紹介をしよう。名前は聖純鈴（きよずみりん）といって。幼稚園の頃からの知っている女の子だ。昔は赤く染まっていた髪を短くしていたが、今はポニーテイルにしている。鈴の髪飾りが特徴だ。いつも、俺と共に遊んでいるメンバーの一人だ。
「ん？誰かきているの？」
鈴は自分の靴を脱いだ時に靴の多さに気がついた。
「ああ、今日、俺達のクラスに来た転校生がお邪魔している」
「え？どうして？」
鈴は不思議そうにしていた。
「いろいろと訳ありなんだ」
俺は説明をするのがめんどくさかったので事情を話さなかった。
「ふ～ん。そうなんだ」
鈴はそれで納得したらしい。
「まあ、とりあえず。リビングに行こうぜ」
「うん。そうしよう」
俺と鈴はとりあえずリビングに向かうことにした。

Ｎｏ，３　木刀とポニーテイル（後書き）

次回予告

作《さて次はどんな話にしようかな？》

大《考えていないのかよ！》

Ｎｏ，４　晩飯前のひと時（前書き）

作《お待たせしました。最後まで読んでくれると嬉しいです》

No，4　晩飯前のひと時

鈴が来た後、俺たちはリビングでお茶を飲みながら、話を楽しんでいた。
「へ～、渚って外国から来たんだ」
鈴は感心しながら渚と話し合っていた。
「ああ、そうだ」
渚は楽しそうに頷いた。
「つか、なんで外国から来たのに日本名なんだ？」
俺は疑問に思ったことを質問してみた。
「親がどちらも日本人だからだ」
なんだそりゃ。
「日本に来た理由は？」
優燈がどうでもよさそうに質問した。
「一度でいいから、親が生まれ育った国を見てみたいと思ったからだ」
渚はそんな優燈に対してもきちんと答えてあげた。
「ねえ、ねえ、それじゃあさ」
鈴はまた質問しようとした。
ぐ～。
そしたら、鈴のお腹から音が聞こえてきた。
「・・・あはは。お腹がすいちゃったみたい」
鈴は恥ずかしそうに笑った。
「もぅ、十九時か」
俺は時間を確認した。
話をしていると時間が経つのが早いな。
「そういえば、晩御飯まだ食べてなかったね」
優燈は思いだしながら俺を見てきた。
「何？その俺に作れって視線は？」

「いや、むしろ作ってほしいです」
鈴は素直にお願いしてきた。
「それだったら、お前が作れよ」
「大ちゃんはあたしが作れないのを知っているでしょ」
鈴は苦笑いをした。
あ～、そういえば、こいつキャンプの時、殆どの食材を炭にしたからな。
「なら、私が作ろう」
優燈が自ら名乗り出た。
「さて、がんばっておいしい物でも作るかな？鈴、何か食いたいのはあるか？」
俺は身の危険を感じたので立ち上がり、鈴にリクエストを聞いた。
「大ちゃんの作るものはおいしいし、バランスがとれているからなんでもいいわ」
こいつは嬉しいことを言ってくれるな。
「あ、でも、に」
「肉は必ず入れてね、だろ」
俺は鈴が言い終わる前に言い当てた。
お前が言うことはわかりやすいんだよ。
「うん。お願いね」
「はいよ」
俺はキッチンに向かった。
「せっかく、大河においしいご飯を食べさせて高感度アップのチャンスだったのに。でも、そんなところが好き」
優燈が何かを呟いていたが気にしないことにした。
「では、私はそろそろ帰ろう」
渚は立ち上がった。
「ん、帰るのか？」
俺はエプロンを装着しながら渚を見た。
「ああ、もう、遅いし。ここで、帰らせてもらうよ」

「え～、ご飯も食べていけばいいのに。大ちゃんのご飯っておいしいんだよ」
鈴は残念そうにしていた。
「それは、また今度にするよ。実はこれからお世話になる家に行かないといけないんだ」
「え？親と一緒に住んではいないの？」
優燈は意外そうな顔をしていた。
「ああ、親は外国で働いている。日本には私一人で来た」
これまた意外な事実だな。つか、それならなんで公園にいたんだ？
「へ～、そうなんだ。ところで、お世話になるって言っていたけどこっちに親戚でもいるの？」
鈴は髪飾りの鈴をいじりながら聞いた。
「いや、学校の寮を借りることになっている。名前は確か琥牙寮だったな。ん、そういえば、大河も琥牙だったな。親戚がやっているのか？」
俺は渚に聞かれた瞬間、あることを思い出した。
あ～、そう言えば、じーさんから、新しく人が入ってくる聞かされていたな。しかも、優燈に説教される前に荷物みたいなのが届いていたっけ。すっかり忘れていたな。・・・・・ん、待てよ。どうせだったら、あれでもやるか。
「ああ、そうだ。確か若い人が管理人を務めている寮だったな。しかも、そこの寮って温泉が出るから結構人気があるんだよね」
俺は適当なことを喋った。
「お～、そうなのか。それは楽しみだな」
渚は期待を膨らませたようだ。
「ねえ、大ちゃん。それ」
その時、鈴は余計なことを言いそうになったので。
『テメーは、余計なことを言うな！』
俺は鈴に向かってアイコンタクトをした。
「で、ご飯いつ作るの？」

鈴は無理やり言葉を変えるのに成功した。
「言われなくても、今作るよ。それじゃあ、渚。またな」
俺がそう挨拶すると。
「ああ、またな」
渚も挨拶を返してくれた。
「優燈。玄関まで送ってくれ」
「ん。わかった。それじゃあ、こっちだよ」
「ああ、ありがとう」
優燈がリビングを出て行き、渚もその後に続いていた。
さてと、これから面白くなりそうだし、早く準備するかな？
「ねえ、大ちゃん？」
鈴が俺の名を呼んできた。
「ん。なんだ？」
俺は収納棚から鍋を二つだし、水を入れどっちもコンロにかけた。
「なんで意地悪したの？」
鈴はどうやらさっきのアイコンタクトのことを言っているらしい。
「それは面白いことをやるからさ」
「面白いこと？」
「ああ、そうだ。だから、鈴。みんなを呼んでくれないか？」
「え？なんで？」
「いいから早く呼べ。それとなるべく腹を空かせて早く来いと伝えてくれ」
「ん～？いまいち納得いかないけど、まっ、いっか。ついでにじーちゃんに夕食こっちで食べて行くって伝えよ」
鈴はポケットから携帯を出し、電話をし始めた。
「さてと、俺もとっとと料理するか」
俺は冷蔵庫を開け、何かあるか確認した。
さて、これから忙しくなるな。
俺は自分でも気がつかないうちにうきうきしていた。

Ｎｏ，４　晩飯前のひと時（後書き）

次回予告
作《さて、次回はいきなり新キャラが五人出てきます》
大《本当にいきなりだな》
作《そのうちの二人はヒロインです》
大《あ、三人だけじゃなかったんだ》
作《あたりまえじゃん。ちなみに、そのヒロインは後輩とお姉ちゃんだから、よろしく》
大《うわ、今になって出てくるのかよ。なあ、俺次回の作品休んでいい？》
作《だめに決まっているでしょ》
大《なんで？》
作《誰が晩飯を作るのさ？》

Ｎｏ，５　姉さんとまたもや暴走と後輩（前書き）

作《すみませんお待たせしました。今回は長めなので最後まで読んでくれたらうれしいです》

No，5　姉さんとまたもや暴走と後輩

「ねえ、大河食べてもいい？」
鈴はさっきからこればっかり聞いてきている。
「だめだ。つかお前、そればっかりだな？」
俺は呆れながら皿に料理を盛り付けていた。
「優燈、出来たぞ。これで最後だけだから持って行ってくれ」
「うん」
優燈は俺の指示通りに皿を運んだりしていた。
「だって、こんだけおいしそうな料理を見せられて食べちゃいけないって酷くない？」
鈴はテーブルの上にある料理を見ながらよだれを垂らし文句を言ってきた。
ちなみに、テーブルの上にはおにぎり、オムライス、唐揚げ、ハンバーク、卵焼き、ポテトサラダなどなどの料理が並んでいる。
どうでもいいがよだれ拭けよ。
「酷くない。もう少しでみんな揃うから待っていろ」
「うえ～ん。お腹の皮と背中の皮がくっついちゃうよ～」
お前はどんだけ腹を空かしているんだ？
「わかった。わかったから、これでも喰っていろ」
俺はあまりのご飯をすべて使いでかいおにぎりを作り、鈴に渡した。
「わ～い。大ちゃんありがとう」
鈴はお礼を言いながら一気にそのおにぎりを食べ始めた。
「お礼はいいからゆっくり食べろ」
「もぐもぐもぐ。がつがつがつ。もぐもぐもぐ。がつがつがつ」
鈴は俺の話を聞いてなくて、おにぎりを食べることに集中していた。
人の話ぐらい聞けよ。

俺はエプロンを外して、鈴の前に席に座った。
「大河はやっぱり鈴に甘いね。その甘さを私にもわけてほしい」
優燈は俺の横に座り、体をくっつけながら甘えてくる。でも、俺はいつものことなので無視をした。
「大河のいじわる。せっかく、私も手伝ったんだから私もお礼がほしいのに」
優燈は俺が無視したことによりいじけてしまった。でも、体はくっつけたままだった。
え～と、ものすごく柔らかい感触を感じるんですけど。
「お・れ・い・が・ほ・し・い・な」
優燈は、今度は耳元で呟いてくる。
「はぁー」
俺は諦めて、自分の指を使って優燈の唇に触れた。
「今回だけだぞ」
これ、べたべたするから嫌なんだけどな。
「ありがとう」
優燈は嬉しそうにお礼を言ってきて、俺の指をしゃぶり始めた。
「あむ・・・・んっ・・・・・んふっ・・・・・ぴちゅ」
丹念(たんねん)に何度も何度も俺の指を下で舐めたり、口に含んだりして味わっている。
「れろっ・・・・・ちゅぴ・・・・・んあ」
優燈とてもおいしそうに舐めている。
・・・・・なんか、嫌な予感がしてきたな。
「ん・・・・・ちゅぷ・・・・・はあ、はあ、ねえ、大河」
優燈は口から俺の指を離し、息を荒くしながら俺の名前を呼んできた。
「な、何？」
俺は背中に冷や汗をかいてきた。
「暴走してきちゃった」
「マジ？」

俺の嫌な予感はドンピシャだった。
「マジ」
優燈の瞳は視点があっていなかった。
あ、マジだわ。どうしよう。やっぱ、頭撫でてあげるくらいにしとくんだったな。
「どうすれば収まる？」
聞いても無駄だなと思うけど一応聞いてみた俺だった。
「大河をもっと味わわせて」
無茶な注文だな。
「無理だ」
俺は素直に拒否した。
「だめ。強制」
優燈は、今度は俺の手を舐め始める。
だめだ。このままだと優燈にペースを持っていかれてしまう。
「優燈。少しは自重しろよ」
と、その時、扉から黒髪を腰の高さまで伸ばした少女が現れた。
「ね、姉さん」
俺は現れた少女を見ながら、助かったと思ってしまった。
「それは私の物だ。味わいたいなら私も混ぜろ」
でも、それは間違いで俺はいわゆる袋のネズミになった。
何を言っているんだこの人は？
俺はもう泣きたくなった。
このとんでもない発言をしたこの人は聖純揚羽（きよずみあげは）。聖純鈴の姉にあたり、俺の姉貴分にあたる。なぜ、姉貴分に当たるのかと言うと姉さんいわく、『お前が気にいった。私の弟になれ』だそうだ。姉さんの家は武道の家であり、姉さんはその後取りにあたる。なぜ、俺が姉さんと知り合えたのかというのはまた後日としよう。
「冗談だよね？」
むしろ冗談で合ってくれ。
「冗談に見えるか？」

揚羽は俺が座っている席の開いている方の隣に座った。
とても、見えません。
「わざわざ、私を呼びだしたんだ。これぐらいいたずらしないと割が合わん」
揚羽は不敵な笑みを浮かべ、俺の耳元に顔を近づけた。
「優燈は手を舐めていることだし、私は耳を舐めることにしよう」
「ちょっと、それマジ。あ、だめっ！舐めないでっ！」
揚羽は俺の静止を聞かずに耳を舐め始めた。
「ふふふ、大河は相変わらず耳が敏感なんだな」
「ちょっ、お願いマジ。あ、優燈、そこさすっちゃだめ」
「大河。ものすごくここ元気になってきているよ」
いつの間にか優燈は俺のまたの部分をさすり始めている。
「ちょ、まじ、鈴助けてっ！」
俺はおにぎりをすごい勢いで食べている鈴に助けを求めた。
「スー、スー、スー」
すると、鈴はお腹がいっぱいになったのか気持ちよさそうに腕を枕にして眠っていた。
うわー、すげー使えない奴。
「ふふふ、さあ、もう誰もお前を助けてくれるものはいないぞ」
「大河。一緒に気持ち良くなろっか」
二匹の悪魔（揚羽と優燈）がだんだんと俺に体を摺り寄せてくる。
やばい。この状況、絶対絶命だよ。
俺はもはや、自分の不運を呪うしかなかった。
「ただいま戻りました」
間の悪いのか、良いのか解らないが長い髪を二つに分けてまとめ、丸い眼鏡を掛けた地味な少女がリビングに挨拶しながら入って来た。
「あっ、ちょうどいいところに帰って来てくれたな。音葉」
俺は揚羽と優燈の攻めから自力で抜け出し、音葉に詰め寄った。
「ちっ、邪魔が入ったか」
「後少しだったのに～」

後ろから二人の残念そうな声が聞こえてきたけど、無視することにした。
「え～と、何があったのですか？」
音葉不思議そうに聞いてきた。
「いや、あまり気にしないでくれ」
俺は苦笑いをするしかなかった。
「はあ、そうですか」
音葉まだ不思議そうに俺を見てくる。
頼むからそんな目で見ないでくれ。
この俺を覗きこんでくる少女の名は宇羅夜音葉（うらやおとは）と言って、俺が通っている学園の後輩だ。出身はA県で、あっちで嫌なことがあったのかわからないが、新しくスタートしたいらしくこっちに上京してきたという。なぜ、こいつと知り合いなのかというと、入学式の日にちょっとした手助けをしたからである。それに一緒の寮生活もあって、結構親しい間柄である。
「ところでさ、これから何か用事あるか？」
俺は唐突に話を切り出した。
「え、いえ、何もありませんけど。それがどうかしましたか？」
「あのさ、今から新しい人が入寮するんだ。だから、そいつの歓迎会も含めてお前の歓迎会もやろうと思ってな」
「わ、わざわざ、私なんかのためにありがとうございます」
音葉は照れながらお礼を言ってきた。
「いいってことよ。それじゃあ、着替えたらリビングに集まってくれ。新しい人が来たらすぐに始めるから」
「はい。わかりました」
音葉は嬉しそうに着替えに行った。
「さてと、話も済んだことだし、続きをしようか」
揚羽は俺の背中に自分の体を摺り寄せてきた。
「やめい。姉さん。さっき、音葉に言ったように今から歓迎会をするんだよ」

「ああ、だから。その歓迎会が始まるまでお姉ちゃん達と一緒に楽しもう」
揚羽は往生際が悪かった。
「じゃあ、姉さんには俺が作った料理は食べさせないから」
俺は最後の手段に出た。
「せっかく、姉さんが好きなピーチパイも作ったのにな」
「それは困る。大河の料理はどの店よりもすごくうまいし、大河のピーチパイは私の好物なんだから」
「じゃあ、離して」
「むむむ、仕方がないピーチパイの為だ」
揚羽は俺から離れてくれた。
ふぅ、危機を免れたか。
俺は一安心した。
「さて、それじゃあ、俺はこれから飲み物を買ってくるから。絶対につまみ食いはしないでくれよ。したらピーチパイを食べさないから」
俺は念の為、釘を刺しといた
「ああ、わかった」
揚羽は頷いてくれた。
「大河。私も行く」
優燈が俺に近づいてきた。
「優燈は冷えた料理を温めておいてくれ」
俺は上着をはおった。
「嫌。大河と一緒に行く」
優燈は揚羽見たいにすなおに頷いてくれなかった。
こいつ、さっきのことを根に持っているな。
「お願い。優燈」
俺は下手に出た。
「嫌。付いていく」
優燈は頑固として頷かない。

「お願い」
「嫌」
「お願い」
「嫌だ」
「お「嫌ったら嫌」」
おいおい、最後まで言わせてくれよ。
「おいおい、大河。連れて行ってもいいんじゃないのか？」
揚羽が口を挟んできた。
「だったら、姉さんに料理を温めることをお願いするよ」
「おい、優燈。大河がお前にお願いしているんだから素直に言うことを聞いたらどうだ」
揚羽は機械音痴の為《ゲーム機以外》、料理をどうやって温めればいいのか知らない。
「嫌」
一向に、優燈は頷かない。
「あ、もう、わかった。今日一緒に寝てやるから、料理を温めてくれ」
俺は妥協して提案した。
「・・・・・それって、一緒の布団で寝るってことなの？」
優燈は俺に質問してきた。
「ああ、そうだ」
「腕枕してくれる？」
「してやる」
「抱きしめてもいい？」
「変なことをしてこなければいいぞ」
「じゃあ、わかった。料理を温めてあげる」
やっと、優燈は頷いてくれた。
俺こいつを説得するのにすんげー疲れたんですけど。
「大河」
「大ちゃん」

「何？」
俺は姉さんといつの間にか起きていた鈴に唐突に呼ばれた。
「後で私にもなんかしてくれ」
「あたしにも」
「わかったから。早く飲み物を買いに行かせてくれ」
そうしないと、あいつが来てしまう。
「よし。約束だからな。それじゃあ、早く飲み物を買って来い」
何故か命令されてしまった。
「はいはい。行ってきますよ」
俺はそう言い残し、リビングから出て靴を履き外に出て、近くのスーパーに飲み物を買いに向かった。
俺はこの時、知らなかった。姉さん達と約束したことが大変になるということを。

Ｎｏ，５　姉さんとまたもや暴走と後輩（後書き）

次回予告
作《いや～、やっとで全ヒロイン出せたよ》
大《つ～か、そんなことよりも今回の小説ってやばくないか？》
作《え？どこか。》
大《優燈や姉さんのスキンシップ》
作《ああ、それ。大丈夫。これからもっと出していくから》
大《それってどこが大丈夫なんだっ！！》
作《まあ、そうゆうことだから。次は大河の友達たちが出てくるから》
大《しかも無視しやがった。つ～か、これ一向に学園が出てきてないけど、そこんとこ学園物として大丈夫なのか？》
作《あ、忘れていた》
大《だめだ。この作者》

No，6　宴前（前書き）

作《お待たせしました。今回も最後まで読んでくれたらうれしいです。あと、感想、質問などのお便りがあればもっと嬉しいです》

No，6　宴前

俺はスーパーで大量に買ったペットボトルを買いながら家に向かっていた。
少し買いすぎたな。
俺は両手にペットボトルを詰め込んだ袋を持ちながらそう思っていた。
やっぱり、優燈を連れてくるべきだったな。
ここまで来て、今頃後悔している馬鹿（おれ）がいる。
「そこの君。ちょっと聞きたいことがあるんだが止まってくれないか？」
そしたら、後ろから声が聞こえてきた。
「ん？」
俺は何だろうと思い後ろを振り返ってみるとそこには、折れた木刀を持った渚がいた。
「なんだ大河だったか」
渚はすぐに俺と解り、近づいてきた。
いや、つ～か、その折れた木刀持っていると不審者に見えるぞ。
「なんで、お前がここにいるんだ？自分の家にいた筈だろ」
渚は不思議そうに俺に聞いてきた。
「いや～、実はじゃんけんで負けてジュースを買いに行っているところなんだ」
まあ、嘘だけど。
俺は両手に持っているジュースが入った袋を見せた。
「それで、お前はなんでこんな場所にいるんだ？普通なら寮に着いてもいい筈なんだが」
「あ、えっと、それはだな」
渚は口ごもりながら、俺から視線を外した。
「それは？」

「・・・・・道に」
「ん？」
道がどうした？
「道に迷ってしまったのだ」
俺はそれを聞いてあっけにとられた。
おいおい、その年で道に迷うはどうなのさ？
「悪かったな。この年で道に迷って」
「お前はエスパーか？」
人の思考を読めるなんて姉さんでもできないのに。
「お前の顔を見れば考えていることぐらいわかる」
さいですか。
「それで、俺の所を出た後、お前はずっと道に迷っていたということか」
「ああ、そうなるな。教えられた住所に向かっていたんだがどこをどう間違えてか、必ずお前の家に戻ってしまう。住所でも間違っているのかもな」
いや、その住所で合っていると思うよ。
「その寮に電話をしようと思ったんだが、電話番号も知らない為、とりあえず通行人に聞こうとしたんだが、何故かみんなして私を見たとたん怖い顔をして逃げてしまうんだ」
それは折れた木刀を持っているからじゃないのか？
「何故かは知らないが、私はとても悲しかったぞ」
しかも、こいつは無自覚ときやがった。天然か？
「それでだが、大河。寮にはどうやって行けばいいんだ？」
しかも、切り返し早いな。
「ああ、寮の場所か？そうだな、なんだったら俺が案内しようか？」
「いいのか？」
「ああ、どうせ、これから寮に行く予定だったし」
まあ、はっきり言えば、自分の所に帰るんだがな。

「でも、いいのか？お前、罰ゲームでその大量の飲み物を買ってきて運んでいる途中じゃないのか？」
「これは、寮に届けるものだから。あんま気にしなくていい」
「そうなのか。それじゃあ頼むとしよう」
「わかった。それじゃあ、ついてきてくれ」
「ああ、それじゃよろしく頼む」
「あいよ」
あ、ついでに優燈に今から渚を連れて行くとメールしとくか。
俺は優燈にメールをして渚を連れて寮＝俺の家に連れて行った。
「さて、着いた。ここが翡翠学園に貸している建物。琥牙寮だ」
俺は自分の家の門の前で堂々と立った。
「おい」
渚は体を震わせていた。
「ん？」
これは確実に怒っているだろうな。
「ここはお前の家ではないのか？」
「ああ、そうだよ。琥牙寮は寮兼俺の家だよ」
「若い管理人というのは？」
「俺のこと。まだ十七歳だから十分若いだろ」
「つまりお前は私に嘘をついたことになるのか？」
「まあ、簡単に言えばそうなるな」
俺は悪気も無くあっさり認めた。
「大河、覚えておくといい。私はな、嘘と言うのが一番、大嫌いなんだっ！」
渚は折れた木刀で俺に殴りかかって来た。
俺は予想がついていたのでそれをいとも簡単に避けた。
「嘘をついたのは謝る。でも、それにはきちんとした理由があるんだ」
「理由とはなんだ？」
渚は俺を思いっきり睨みつけている。

「ま、そんなに睨まないでよきちんと話すから。とりあえず、中に入ろうよ」
「わかった」
渚も了承してくれたみたいなのでとりあえず、俺は渚と共に中に入った。そして、靴を脱ぎ、折れた木刀を玄関に置かせ、先に渚をリビングに通そうとして、リビングに繋がる扉を開けた。
パンっ！パパンっ！
その瞬間、クラッカーがリビングに内に鳴り響き紙飾りが渚の頭の上に落ちた。
「な、なんだ？敵襲か？」
このご時世どこにいんだよ？
渚はクラッカーの音を何かと間違えたらしい。
「ハハハ。敵襲って面白いことをいうもんだな。転校生」
渚が驚いているとバンダナをした青年がクラッカーを持ちながら近づいてきた。
「ほら、今日は転校生と後輩の歓迎会なんだから、早くこっちに来いよ」
「歓迎会だと？」
渚はいまいち、状況を掴めていない様子だ。
「あれ？大河。まだ転校生に言ってなかったのか？」
「ああ、そうだよ。渚を驚かせようと思ってあえて何も言っていなかったんだよ」
「どういうことだ？」
渚は俺を見てきた。
「どうもこうもないよ。渚が今日からお世話になるって知った時、『それじゃあ、せっかくだし。歓迎会でもするかな』って思いついただけ」
まあ、渚が言うまで忘れていたんだけどな。
俺は正直に渚に伝えた。
「なるほど。だから、嘘をついたのか。ん、その理由なら大河を許

すことにしよう」
「それはどうも」
「ん？嘘？いったい何の話だ？」
バンダナの少年は不思議そうにしていた。
「いや、なんでもない。とりあえず役者も揃ったことだし歓迎会を始めようぜ」
「ああ、そうだな。さっさと宴（うたげ）を始めるか」
宴ってお前はいつの時代だよ？
バンダナの少年はそう言って、リビングの中に戻ろうとした。
「ああ、そうそう」
そしたら、いきんなり何かを思い出してこちらを見てきた。
「俺の名は伊瀧龍（いせりゅう）だ。これから、寮生仲間だし、よろしくな」
「ああ、よろしく」
龍はそう言って戻っていた。
「それじゃあ、俺らも入るか」
「ああ、そうだな」
俺と渚はリビングの中に入っていた。

No，6　宴前（後書き）

次回予告
作《次回はいよいよ、歓迎会の始まりです》
大《やっとで、始まるのか》
作《ヒロインたちが全員集合。それとおまけ三人》
大《え？龍の他にあと誰かいるのか》
作《はい。今回出そうと思っていた男友達がいます。でも、どちらも普通なのであまり気にしないでください》
大《へ～、それは楽しみだ》
作《ちなみに、次の次くらいに大河がやばい状況になります》
大《なんだそりゃっ！》
作《そして、どんどん学校に入っていこうと思っていますので。みなさんなにとぞよろしくお願いします》
大《しかも、無視して。きれいにまとめちゃったよこの人》

Ｎｏ，７歓迎会とみんなが集まった理由（前書き）

作《すみません。今回は長めです。最後まで読んでくれると嬉しいです》

No，7歓迎会とみんなが集まった理由

お～し、みんな。ジュースは行き渡ったか？」
龍は片手にジュースが入った紙コップを持ち、周りを見回した。
「全員に渡ったみたいだよ」
少しやせ気味の少年が確認した。
「おし、それじゃあ。これから、新一年生、宇羅夜音葉（うらやおとは）と転校生の井上渚の歓迎会を始める。それじゃあ、乾杯の音頭を大河がやってくれ」
「あいよ」
俺は龍に指名され立ち上がった。
「それじゃあ、いきなりの歓迎会だけど乾杯っ！」
「「「「「「「「乾杯っ！」」」」」」」」」
みんなは一気にジュースを飲みほした。
「それじゃあ、とりあえず大河が作った料理を食べ始めてくれ」
「「「待ってましたっ！」」」
龍の合図のを元に、揚羽と鈴と筋肉質の少年が一気に料理を食べ始めた。
「優燈。音葉に料理を取ってやってくれ。それと、龍は渚に取ってくれ」
俺は座りながら、優燈と龍に支持をし、自分も食べ始めた。
「わかった」
「まかされた」
優燈と龍はそれぞれの皿に料理を運び、渚と音葉に渡した。
「ありがとう」
「あ、ありがとうございます」
渚と音葉は皿を受け取り、お礼を言ってきた。
「お礼はいいから早く食べろって」
龍は二人に促した。

「大河の料理はとてもおいしいよ」
優燈もそれに便乗する。
「そういえば、帰る時も鈴がそう言うことを言っていたな。それでは早速、頂くとしよう」
渚は早速、一口食べ始めた。
「む、これは。おいしいな」
渚は気にいってくれたらしい。
「素材の味をきちんと出しているし、塩加減もちょうどいい。すごいぞ。大河。こんなにおいしいのは初めてだ」
「そりゃあ、どうも」
俺は料理をつまみながら食べていた。
「大河さん。このピザみたいなものはジャガイモですか？」
音葉は正しい姿勢で料理を食べながら聞いてきた。
「お、よくわかったな。今日、鈴が野菜を持ってきてくれた時に、ジャガイモが大量にあったから作ってみたんだ」
初めての挑戦だから味は保証しないけどな。
「おもしろい料理ですね。後で作り方を教えてくれませんか？」
「ああ、いいぜ」
どうやら、味は問題なさそうだな。
そして、みんなして料理を食べることに集中し始めた。

それからしばらく時間が経ち、みんなは大量にあった料理を食べきったので、デザートのピーチパイを食べ始めていた。
「しかし、相変わらず。大河の料理はうまいな」
筋肉質の少年がピーチパイを食べながら言ってきた。
「男が褒めても何も出ないよ。剛」
俺は筋肉質の少年に残っているピーチパイを渡した。
「出てるじゃねーかよっ！」
筋肉質の少年は見事にツッコミを入れてくれた。
この筋肉質の少年は江川剛（えがわつよし）と言って、説明するのがめんどくさい

ので、ただの筋肉バカといっておこう。
「しかし、本当によくこんなに作れるよね。もう本格的に始めたらどうなの？」
痩せ気味の少年も言ってくる。
そして、この痩せ気味の少年は瀬詩透（せしとおる）と言って、いたって普通の少年。
「めんどくさいから却下」
俺はコップにジュースを注ぎ飲み始めた。
「そうだよ。大河は私の主夫になるんだから、そんなしている暇はないんだよ」
優燈は話に混じりながら俺に後ろから抱きついてきた。
「いや、主夫にもなる気もないし」
つか、まだ喰っている最中なんだから抱きついてくるなよ。
「じゃあ、私が大河の主婦になって作ってあげるよ」
優燈は俺の首に頬刷りをしてくる。
「全力でお断りさせていただきます」
俺はすぐに断った。
「あはは、相変わらずお前らは仲がいいな」
龍は面白がって見物をしていた。
「ん？相変わらずって、お前らって昔から一緒にいたのか？」
渚は頬にクリームを付けながら聞いてくる。
クリーム拭けよ。
でも、あえて俺は何も言わなかった。
「うん。そうだよ。私と龍と大ちゃんは幼稚園から遊んでいて」
鈴がピーチパイを頬張りながら俺の代わりに答えてくれた。
「おい、鈴。行儀が悪いぞ」
俺は鈴に注意をした。
「それで、私と優燈が小学校からだな。つか、大河。お前のピーチパイを貰うぞ」
次に揚羽が俺のピーチパイを奪いながら言葉を繋ぎ。

いや、とんなよ。
「そんで、俺と透が中学の一年の頃からだな」
最後に剛が締めてくれた。
「先輩たちは仲がよろしいんですね。ところで先輩たちはどういった感じで出会ったんですか？」
音葉は興味深々で聞いてきた。
「いや、僕らは出会ったというよりは大河のもとに集まったって言った方がいいのかな？」
透は苦笑いをしながら反してきた。
「ん？それはどういことだ？」
渚は不思議そうに聞いてきた。
「ここにいるメンバーは全員が大ちゃんに助けて貰っているの」
鈴は丸々一個あったピーチパイを食べ終わり話に加わってきた。
「？？？」
渚と音葉はますます不思議そうな顔をした。
「まあ、簡単に言ってしまえば、ここにいる奴らは、一回は必ず大河に助けられている奴らが集まっているんだ」
揚羽は簡単に話をまとめてくれた。
「引きこもっていた者。リンチされていた者。クラスメイトから苛められていた者。親に暴力をふるわれていた者。家族がいなくなった者。ここにはいる奴らは全員そういう事情があったのが集まっているんだ。あ、ちなみに私は、本気でやられる相手がいなくなった時だったな」
揚羽はしみじみと言った。
「でも、そんな時にこの大河（ばか）が現れたんだよな」
龍が笑いながら俺の頭を叩いてきた。
バカって言うなよ。つか、頭を叩くな。
「え、琥牙先輩がですか？」
「ああ、そうだったな。こいつときたら、俺と敵対していたのにも関わらず、俺が他校の奴らに殺されかけた時に助けにきたしな」

剛は懐かしそうに笑っていた。
「剛はまだいいよ。僕の時なんて、いきなり部屋に来て無理やり外に連れ出されたんだよだったけどね」
透はまたもや苦笑いをした。
「私の時は虐めが原因で飛び降りをしようとした時に声をかけられた」
優燈は抱きつくのを止め俺の隣に座り、俺の肩に顔を寄りかけてきた。
「私はね、私が落ち込んでいる時にずっと側にいてくれたよ」
鈴は髪留めを鳴らしながら嬉しそうだった。
「俺の時なんて、俺が家族に殴られそうになった時に、逆に親を殴っていたぞ。そん時、こいつ、親の権力使って『そんなに力を余しているなら僕の親の会社で雇ってやるよ』って言ったんだぜ」
龍は面白そうに言ってきた。
どんなガキだったんだよ。俺は？
「俺と同じぐらいの少年が俺の親父どもを殴ったんだから、俺は思わずバカらしくなったよ」
「すごい子供時代を過ごしていたんだな。お前は」
渚は尊敬するように俺を見てきた。
ああ、そんな目で俺を見ないでくれ。
「それで、揚羽先輩はどうやって出会ったんですか？」
音葉は揚羽の方を見て聞いてきた。
ん？ていうか。いつ自己紹介したんだろう？
「ん？私か？私は本気で戦えるものがいなくなったので、飢えを満たす為に手当たり次第、いろんな奴にケンカをふっかけていたんだ」
「え？」
揚羽の思いがけない一言に、音葉は思わず固まってしまった。
「でも、何十人何百人倒した所で飢えは満たされることはなかった。それで、そうゆうことにも飽きてきたし次に戦った奴で最後にしようと思っていたんだが、そん時、現れていたのが」

「大河だったということか」
渚は納得しながら俺の名を出した。
「そうゆうこと。いや～、あの時は楽しかった。久々に本気を出した戦いができたんだから」
「俺は全然楽しくなかったけどね」
殺されかけたし。俺って、よく姉さんと戦って生きているよね。っていたっ！
俺がそんなことを思っていると揚羽に殴られた。
「それで、どっちが勝ったんですか？」
音葉は興味を持ちながら聞いてくる。
「う～ん、そこら辺は興奮しすぎて覚えていないんだが。聞いた話じゃ、どちらとも公園に倒れていたそうだ」
揚羽は俺をチラチラと悪戯（いたずら）をしていそうな目線で見てきた。
嘘だ。あの目は絶対に覚えている時の目だ。
「う～んと、先輩たちと琥牙先輩たちの事情は解りましたが、なんで皆さんは琥牙先輩のところに集まろうとしたんですか？」
音葉は本題を口に出した。
「そ、そういえばその部分をきちんと話していないぞ」
渚も同意してきた。
「集まった理由ね～。大河。お前自身が説明したら？」
龍が俺に話を振ってきた。
「え？俺はお前らがいいなら話してもいいけど」
説明するの簡単だし。
「俺はいいぞ」
龍がいうとみんなも頷いた。
「それじゃあ話すか」
「ああ、頼む」
「お願いします」
渚と音葉は真剣に聞いてきた。
「俺はただ単に仲間にならないかもしくは友達になろうって誘った

だけだぞ」
俺はさらりと真実を二人に告げた。
「え？」
「たったそれだけ」
二人は呆気にとられた。
「うん。たったそれだけ」
あ、でも、姉さんの場合は自分からだったし、鈴は家族、優燈は守ってやるっていったんだっけな。
「「「「「あはははははははは」」」」」
俺がそう答えると二人以外のみんなが突如、笑いだした。
「そういえば、俺らってそんな大河の他愛もない一言で集まったんだよな」
「でも、その大ちゃんの一言があったからこそ私たちが集まることができたんだよ」
「鈴に同意見。大河がいなかったら私はもうここにはいない筈だった」
「そのところは大河に感謝だな」
みんなして面白がっていた。
「さて、料理も食べたことだし、意味がないと思うけど、そろそろ自己紹介をしていくか」
龍が背伸びをしながら提案してきた。
「そんで、その後にゲームをしよう」
「「「「「賛成っ！」」」」」
みんなが頷いた。
「それじゃあ、とりあえず音葉からしていってくれ」
「はい。わかりました」
音葉は立ち上がり自分の自己紹介をし始めた。
それから、音葉に続いて渚も自己紹介していき、その次にみんなも渚と音葉に自己紹介をしていった。そして、その後、時間が許す限りみんなでゲームを楽しんでいた。

Ｎｏ，７歓迎会とみんなが集まった理由（後書き）

次回予告

作《次回は歓迎会も終わり。いよいよ、優燈との睡眠があるよ》

大《うわ～、嫌な予感がしてきた》

作

大《よくね～よ！！。前から思っていたんだがこの小説って俺にすんげ～厳しいじゃん》

作《キノセイジャナイ？》

大《うわー、その棒読みすんげームカツク》

作《うるさいな。そんだったら優燈と寝るとき揚羽も乱入されるぞ》

大《すみません。俺が悪かったです》

作《それじゃあ、次回もお楽しみに》

Ｎｏ，８片付けと睡眠前（前書き）

作《これからは一週間ごとに投稿していきたいと思います》

Ｎｏ，８片付けと睡眠前

歓迎会も終わり、この日はみんな解散した。
それで、今、俺は寮の管理人として渚に、寮の案内と説明をしていた。
「え～と、ここが渚の部屋だ」
俺はそう言って、扉を開け中に入った。
「お～、意外と広いもんだな」
渚も俺に続き部屋に入り、今日から自分が住む部屋を見回した。
「意外は余計だ。それで、さっき話通りに朝食はみんなでとることになっているから、必ず遅れないこと。それと、夕食は作る前までにいるかいらないか何かの手段を使って俺に伝えること」
そうしないと食材がもったいない。
「ああ、わかった」
「今日はもう遅いから詳しい話は後にして、他に質問は？」
俺は大体のことを話、渚に尋ねてみた。
「お風呂を見せて貰ったが、この家で風呂はあれ一つだけなのか？」
「ああ、そうだ」
湯船が二つあるなんて贅沢すぎる。
「それじゃあ、もし、お前が入っているのを知らずに私たちが入ってしまう場合どうするんだ？また、その逆もしかりだな」
「風呂場には鍵を掛けることができるし、きちんと入り口の脇には男と女の札があるからそれを扉付近にかければいいだけの話だ。それで掛け忘れて見られた場合は自分の責任ということだ。それと風呂は自由にいつでも入っていいから」
あと、何かいうことあったかな？
「他に質問は？」
「ない」
「そう、なら俺は行くから」

「ああ、これからお世話になるな」
「あいよ」
俺は渚の部屋から出た。そして、そのままリビングに向かった。
リビングでは、歓迎会の料理で使い終わった皿や飲みほしたジュースのペットボトルや紙コップが放置していた。
「さて、面倒だけどやりますか」
俺は紙コップなどの容器はすべて分別し捨てた。そして、その後、皿を台所に持っていき水に浸け、スポンジに洗剤を含ませ食器を洗いだした。
本当の所、明日の朝にみんなで早く集まって片づけることになっていたのだが、今の内に食器を洗っておかないと汚れが落ちにくくなるから、勝手に一人でやっているのである。ゴミの分別はそのついでだ。
明日、またみんなに怒られるな。
俺は苦笑いしながらも食器を洗うのをやめない。
そして、食器に浸いた泡を洗い流し、後は拭くだけなので近くに干しておいた食器用の布きんを手に取った。
「大河。また一人で片づけをしたの？」
そしたら後ろから声が聞こえてきた。
俺は振り向かずとも誰だがわかっている。
「ああ、そうだよ。優燈」
そして、そのまま食器を拭き始めた。
「明日の朝、みんなで集まってやろうという約束だったんじゃないの？」
優燈は呆れている様子だった。
「ああ、そういえばそうだったな」
「また、みんな怒るよ」
優燈は静かな口調で言ってくる。
「みんなは怒るより呆れると思うけどな。よし、拭き作業終わり」
俺はすべての皿を拭き終わり、それを戸棚の中にすべて片付けた。

「さてと、片付けも終わったし今度は」
「米とぎと夜食作りでしょ？」
優燈は俺がいう言葉を言い当てた。
「正解。お前も待っているしさっさとやってしまおう」
「できるだけ、早くね」
「わかっているよ」
俺はみんなが明日食べる分の米を取りだし、炊飯器の釜の中に入れ水で研いだ。そして、一通りその作業をやり、釜を炊飯器の中に戻した。
そしてそれが終わると、今度は夜遅くまで頑張って働いている奴の為の夜食づくりだ。
冷蔵庫で冷凍していたご飯を取りだし、電子レンジで解凍した。そして、解凍し終わったら、適度な大きさのおにぎりを作り、味噌を塗って焼いた。そして、お焦げがついて皿によそえば味噌焼きおにぎりの完成。それにラップをかけテーブルに置いておきメモを添えておく。
「終わった？」
優燈は俺が作業を終えるのを邪魔しないで静かに待っていたようだ。
今、気がついたか優燈は薄い水色のパジャマ姿で肩にタオルを掛けていた。
まあ、これはいつものことなので俺は優燈の行動にあえて何も言わない。
「終わったよ」
「それじゃあ、寝るの？」
優燈は何かを期待している様子だ。
「う～ん。まあ、そうなるな。今日は宿題ないし、後は風呂入って寝るだけだな」
「じゃあ、先に部屋に行って布団温めておくから」
「ああ、頼むな」

「うん。頼まれた」
・・・・・ん？ちょっと待て。なんか流れ的に頼んじゃったけどまさか、俺、優燈にとんでもないことを頼んじゃった？
「お、おい、優燈」
俺は優燈を俺の部屋に行かせるのを止めようとしたが、もう、そこには誰もいなかった。
「いなくなるの早っ！」
俺は驚きを隠せなかった。
あいつは、本当に俺に関しての出来事になると行動が早いな。しかも、俺自ら頼んだから絶対張り切っているだろうな。
「・・・・・マジどうしよう？」
俺はこれから起こることに対して自分の身を案じた。
「・・・・・まあ、いいや。どうせ約束していたことだし。とりあえず風呂に入るか」
俺はそのまま脱衣所に向かった。
そして、脱衣所に入ると男と書かれた札を扉付近に掛け、とりあえず鍵を掛けた。それから、服を脱ぎさっさと風呂場に入った。
俺は先に体を洗うタイプなので頭、顔、体の順にさっさと洗い、湯船に浸かって体が温まったので上がる。
体を近くの大河と書かれた収納棚から取り出したバスタオルで拭き、服を着た。
そして、適当にバスタオルで頭を拭きながら部屋に戻ると、部屋の中央にいつもは部屋の隅に畳まさっている布団が置いてあった。
それに付け加えて、掛け布団が異様に膨らんでいて、きちんと枕が並んでいる。
うわ～、本当に一緒に寝る気満々だよ。こいつ。
「・・・はぁ・・・・・はぁ・・・・大河の匂いがする。・・・・はぁ・・・とても・・・はぁ・・・・・落ち着く」
しかも、中から優燈の声が荒い息使いと共に聞こえてくる。
今日は、リビングで寝ようかな？

俺は真面目に自分の身の危険を感じてしまった。
「はぁ～、仕方がない覚悟を決めるか」
とりあえずため息をつきバスタオルを適当に放り投げ、布団に近づいた。
優燈のことだから、さっきの扉を開ける音とバスタオルの音で気がついたかもな。
俺はゆっくりと布団の中に片手を入れてみた。
「うわっ！」
その瞬間、待っていたかのように手を思いっきり引っ張られ布団の中に無理やり入れやれてしまった。
「大河、待ってたよ」
優燈は俺の頭に抱きつき自分の胸に抱き寄せた。
や、柔らかい。って、んなことやっている場合か？
「おい、優燈」
「すー、はー、すー、はー・・・・・何？」
優燈は俺の頭を嗅いで深呼吸していた。
「俺は普通に寝たいんだ。だから早くこの腕をほどけ」
「嫌。今日はずっとこのまま」
優燈は腕を強くしてさらに自分の胸を俺の顔に押し付けてくる。
「なんで？」
やばい、息ができなくなってきた。
「一緒に寝るてくれる約束した時、抱きしめてもいいって言ったから」
ああ、確かに言ったな。でも、まさかこうなるとは思っていなかったぞ。しかも、これをなんとかしないと俺は窒息してしまうな。
「じゃ、じゃあ、俺が優燈を抱きしめるっていうのはどうだ？」
「大河が私を抱きしめる？」
「ああ」
「・・・・・いいかも」
優燈が何を想像したのかはわからないけど、ＯＫみたいだ。

「そ、それじゃあ、は、早くこの腕を離してくれ」
や、やばい、息がもう続かない。
「うん」
優燈が手を離した瞬間、俺はとりあえず布団から起き上がり、息を思いっきり吸った。
危ね～、寝るだけで窒息死するところだった。
「ねえ～、大河～。早く寝ようよ～」
優燈は抱きしめて貰うのがそんなに嬉しいのか長袖の裾を引っ張ってきながら甘えてきた。
「へいへい。わかったよ」
でも、俺はどうせいつものことだったので慣れてしまい普通に対応していた。もし、これが普通の男だったら押し倒していたかもしれない。
俺はとりあえず腕を思いっきり広げた。
「よし、来い」
「大河～！」
優燈は俺の胸の中に飛び込んできた。
「大河～、大河～、大河～」
優燈は嬉しそうに俺の胸に頬ずりをしてくる。
「うるさい」
俺はもう遅い時間もあって注意をした。
「ごめん。でも、嬉しくてつい」
優燈は落ち込んだ。でも、俺の胸に頬ずりをするのは止めない。
いや、止めろよ。つか、俺から抱きしめるのがそんなに嬉しいのか？
「とりあえず、そろそろ寝ようぜ」
俺は欠伸をしながら目をつぶった。
「わかった。・・・・・ねぇ～、大河」
「ん～？」
俺はもう半分寝掛けていた。

「頭撫でてほしいな」
優燈の甘えてくる声が聞こえてきた。
「あいよ～」
俺は寝惚けているため状況把握ができず、すぐに了承した。
俺は片方の手でゆっくりと優燈の頭を撫で始めた。
手に感じる優燈の髪はサラサラとし気持ちよかった。
そのためか、俺はすぐに意識がなくなった。
「・・・・・大河。大好き」
最後に優燈からそんな一言が聞こえてきた。
そして、唇にぬくもりを感じた。
たぶん、気のせいだろう。

Ｎｏ，８片付けと睡眠前（後書き）

次回予告
作《次回やっとで学校編に突入だ》
大《いや～、長かったな。ここまで来るの》
作《そうですね。あ、言っとくけど、大河の日常はこれからもっと大変になるから》
大《へ？なにそれ》
作《しかも、学校編入る前に大河が寝た後の優燈の行動みたいな話をするからよろしく》
大《おいっ！俺はそんな話聞いていないぞっ！》
作《あたりまえじゃん。今、言ったんだら。とゆう訳で次回もよろしく》
大《うわ～、すんげー納得いかね～》

no，8．5　優燈の気持ち（前書き）

優燈の視点です。

no，8．5　優燈の気持ち

私の頭を撫でる大河の手が止まった。
私はゆっくりと顔をあげると大河から寝息が聞こえてきた。
疲れて寝たのだろう。今日も相変わらずがんばっていたんだもん。
当然か。
それでも、いつも大河は私のわがままを聞いてくれる。だから、
私は
「・・・・・大河。大好き」
私はゆっくりと大河に近づき、ゆっくりと唇を重ねた。
これで何回目だろうか？
私はたまにこうやって、大河が寝ている時に唇を重ねている。
大河にこのことを知られたらなんて言うだろうか？
照れるだろうか？それとも、怒るだろうか？・・・・・それとも、
拒絶するのか？
私はそれが一番怖い。
いつ、このことがバレテ、大河が私を拒絶するのが。
・・・・・そんなの。
「そんなの嫌だ」
私は大河に抱きついた。
大河は相変わらず寝息を立てて眠っている。
「大河。好き。だから、私と付き合って」
告白した所で何も返ってこない。大河は寝ているのだから。
でも、起きていても決まって返ってくる言葉は決まっている。
〈お友達でお願いします〉
大河は私のことを大事にしてくれているのはわかっている。だか
ら、中途半端な気持ちで私の告白を受け止めたくないのもわかる。
もしくは、他に気になる子がいるのかもしれない。
それならそれでもいい。

「でも、そろそろきちんと答えてくれないと我慢できないよ」
私は大河の胸に顔を埋めて眠りについた。
どうか。
どうか、大河きちんと答えて、私を選びますように。

no，8．5　優燈の気持ち（後書き）

次回予告
作《今回は優燈の視点からやってみました。あんまり、本編とは関係ないのかな？まあ、とりあえずこれからもよろしくお願いします》

Ｎｏ，９　朝の日常（前書き）

作《え～と、いよいよ学園編が始まります。これからも読んでくれたら嬉しいです。それと、今回の話は朝の日常だから、学園とは関係ないかも》

No，9　朝の日常

ピピピ、ピピピ、ピピピ。
朝、いつもの時間帯に目覚ましが鳴り、俺は目を覚ました。
もう、朝か。起きないとな。
俺はゆっくりと目を開けると、目の前に優燈の顔があった。
「なんで、こいつがここにいんの？」
俺は疑問に思いつつ、昨日の出来事を思い出してみた。
あ、そっか、昨日は優燈と一緒に寝たんだっけ。すっかり忘れていた。
俺は優燈の寝顔を眺めてみた。
優燈は目覚ましがなっているのにも、関わらずまだ寝息をたてて眠っていた。
「こいつ、静かにしているとかわいいのにな」
俺は呟いておいて、いきなり恥ずかしくなった。
「さ、さて、早く起きて。いろいろやらないとな」
俺はわざと気を紛らわせようと布団から起き上がろうとした。
しかし、その時あることに気がついた。
昨日、俺は優燈を抱いて寝てしまった。その為、必然的に腕は優燈の下にくる。よって、この腕を取るには優燈を起こさないといけない。しかも、極めつけに優燈も俺を抱きしめている為、動くことが困難な状況に至る。
さて、どうしよう？
俺はそんなことをかんがえつつも、優燈を起こすことにした。
自由な方の手を使ってとりあえず優燈を揺すってみた。
「優燈。朝だ。起きろ」
「ん～」
優燈は起きるどころか、さらに腕に力を入れて抱きしめてきた。
「たく。これじゃあ、時間がなくなるよ。優燈、起きろって」

俺は揺するのを止め、優燈の頬をつっついてみる。
頬は柔らかくプニプニしていた。
やばい、すげ～柔らかい。
俺は五分ぐらい夢中になってしまった。
「はっ、いけない早く起きないと」
そうしないと朝ご飯が遅くなる。
琥牙寮では朝と夜のご飯は管理人の俺が作ることになっている。
だから、必然的に俺が寝坊などしてしまった場合、寮に住んでいる者たちは朝食抜きになってしまう。
それは絶対に寮の管理人として避けなければいけない。
「優燈。お願いだから。起きてくれよ」
俺は必死になりながら優燈を揺らした。
「ん～、大河～、だめ～」
優燈は一向に起きる気配がなく、寝言を言っていた。
つか、どんな夢を見ているんだよ。こいつは？
「しょうがない。最後の手段を使うか」
これはあまり使いたくないんだけどな。
俺は優燈の耳元に口元を近づけで囁いた。
「優燈。今、起きたら俺からキスを」
「してくれるのっ！」
優燈はすごい勢いで目を覚ました。
「しね～よ」
「あっ」
俺は一瞬だけ力が抜けた優燈の腕から脱出した。
優燈は俺が抜け出したことによりなんだか寂しそうな顔をした。
「たく、やっぱりタヌキ寝入りをしていたか」
俺は呆れつつカーテンを開けた。
窓からは太陽の日差しが入って来て、今日も良い天気になりそうだ。
「だって、もう少し大河を感じていたかったんだもん」

優燈は起き上がりながら俺を見てくる。
「お前の言い分はわかったから、早くここから出て行け」
俺はパジャマ代わりのTシャツを脱ぎながら優燈に言った。
「大河。私のことを嫌いになっちゃったの？それとも怒った？」
「どっちでもね～よ。着替えるから出てけっていう意味だ」
そもそも、こんぐらいで怒っていたら今頃、お前はここにいねーよ。
「そう、よかった」
優燈は何故か安心していた。
こいつは何をそんなに安心しているんだろ？
「だから、早く部屋を出ろ」
俺はタンスから別のTシャツを取りだした。
「なんだったら手伝う？いや、むしろ手伝わせて」
優燈は俺に近づいてきた。
「丁重（ていちょう）にお断りする」
俺は優燈の顔を押さえて、部屋から追い出した。
「もう、照れなくてもいいのに」
「照れてね～よっ！」
「それじゃあ、私の着替えを手伝ってくれる？」
優燈はパジャマのボタンを一つ開けた。
「いいから、早く部屋に戻れっ！」
俺は勢いよく部屋の扉を閉めた。
なんで、あいつは俺にこんなにも積極的にアプローチをかけてくるんだ？
「たく。なんで、朝からこんなに疲れないといけないんだよ？」
俺はとっとと部屋で制服に着替え、リビングに向かった。
部屋を出る時、優燈はもうそこにはいなかった。俺に言われたとおりに部屋に戻ったのだろう。
リビングではまだ誰もいなくて、俺はとっとと朝食を作り始めた。
しばらくして、あと少しで朝食が完成する頃に龍がリビングにや

ってきた。
「おはよう、大河。相変わらず早いな」
「おう、おはよう」
俺は味噌汁に味噌を溶きながら挨拶を返した。
「・・・・いつものことだけどさ。お前、また昨日の内に片付けしたろ」
龍はリビングを見回しながら聞いてくる。
「食器はな。ゴミなどはまとめて一つにしているから後は捨てるだけだ」
「じゃあ、俺はそれを捨ててくるよ」
「ああ、よろしく頼む」
龍はゴミ袋を持って外に行った。
「おはよう。大河」
「おはようございます。琥牙先輩」
次に現れたのは、渚と音葉だった。
「はい。おはよう」
俺も挨拶を返した。
「琥牙先輩。何か手伝うことはありますか？」
音葉は俺に近づいてきた。
「それじゃあ、魚を盛り付ける食器を出してくれないか？それと、ご飯をよそってくれ」
「はい。わかりました」
音葉は俺に指示をされ、早速、動き出した。
「大河。リビングの片づけが終わっているようだが、お前が一人でやったのか？」
渚は辺りを見回しながら聞いてきた。
「正確には俺と龍でやった」
たぶん、嘘は言っていない筈。俺が片づけて龍がゴミ捨てをしているんだから。
「そうなのか。すまんな手伝うことができなくて」

「いや、気にすんな」
どうせ、昨日のうちにやってしまったんだから。
「そんなことより、そろそろ朝食にするから席についててくれ」
「ああ、わかった」
渚はテーブルについた。
「琥牙先輩。ご飯の準備盛り付け終わりました。他にやることはありませんか？」
音葉はお盆を持ってくる。
「それじゃあ、魚を運んでくれ」
「はい。わかりました」
音葉は皿に盛りつけた魚を運び出す。
「なあ、大河。私も何か手伝うことはないか？」
渚は音葉の手伝う姿をみながら聞いてきた。
「それじゃあ、味噌汁を運んでくれ」
俺は味噌汁をお茶碗に注いでいた。
「ああ、任された」
渚は手伝うのがそんなに嬉しいのか、お盆を持って張り切っていた。
「熱いから気を付けろよ」
「ああ、わかっている」
渚はお盆に全員分の味噌汁を乗せ運んだ。
「さて、これで準備は終わったな」
俺は朝食の準備を終え、エプロンを外した。
「戻ったぞ」
そしたら、タイミング良く龍が帰ってきた。
「邪魔するぞ」
「おっはよーっ！」
何故か聖純姉妹を連れて。
「なんでいるの？」
俺は少々、呆れながら聞いてみた。

「いや、何、昨日の歓迎会の片づけをしにきただけさ。でも、大河のことだから昨日の内に片づけていると思うから、ぶっちゃけ言って朝食を喰いにきた」
さすが姉さん。俺のことをよくわかっていらっしゃる。
「つか、それだったら。わざわざ朝食を喰いに来なくてもいいじゃん」
「いや、だって大ちゃんのご飯って家のよりおいしいだもん」
鈴はそう答えていつの間にか席に着いていた。
「それにな、お前のことだからどうせ私達の分も作っているのだろ」
どうやら、俺が考えていたことは揚羽にすべてお見通し見たいだ。
「はー、食べていいから。早く席に着いて」
「そうこなくちゃ」
揚羽も嬉しそうに席に着いた。
「龍。後、来ていないのは誰？」
俺は揚羽と鈴の分のご飯とみそ汁、魚を用意した。
「え～と、優燈と直斗だな。あと、剛と透は大河が片づけるから来ないとメールが来た」
「いないのが優燈と」
「私ならここにいるよ」
「え？」
俺が間の抜けた声を出すと、と同時に背中から柔らかい感触がした。俺が顔だけを後ろに向けるとそこには優燈が俺に抱きついていた。
「何しているの？」
どうせ、いつものことだろうけど。
「大好きな大河を充電中」
優燈はさらに腕に力を入れ、自分の体を俺の背中に押し付けてきた。
「・・・・・みんな、先に食べていいよ」
俺はもう慣れてしまっているので、優燈のことは無視してみんな

の方を向いた。
「何をやっているんだあれは？」
渚は味噌汁を手に持ちながら見てくる。
「ああ、あれか。あれはマーキングみたいなものだ」
龍はご飯を口に含みながら親切に答えた。
「マーキングって、あの動物などがやるやつか？」
「ああ、そうだ。優燈はああやって大河に自分以外の女性が近づかないようにしているんだ」
揚羽は面白がって説明をする。
「私も最初の頃は驚きましたけど、もう、慣れました。たぶん、渚さんもすぐに慣れますよ」
音葉は魚をほぐしながら苦笑いをする。
いや、慣れなくていいから。
「がつがつがつがつがつがつがつ」
鈴はひたすら朝食を食べていた。
お前も食べてないでないで何か言えよ。つか、小柄のくせによくそんなに食えるよな。
「ふぁ～、あー、寝み～」
そんなところに、肌が少し黒く、目は細く、髪を適当に短く切りそろえた少年がリビングに入ってきた。
「大河～。いちゃついていないで、飯～」
そして、眠そうにしながら俺に朝食の要求をしてきた。
「直斗。飯はわかったから、その前に顔を洗って来い。それと、優燈いい加減離せ。早く朝食を食べないと学校に遅刻する」
「は～い」
細目の少年は足元をふらつかせながら洗面所に向い。
「私が食べさせてあげようか？」
優燈はすんなりと俺のゆうことを聞いてくれなかった。
さて、どうしようかな？
俺はとりあえず、優燈を引きずりながら細目の少年の朝食を用意

した。
「おい、優燈。そろそろ大河が困ってきているから離してやれ」
龍が俺の困っている様子を見て、助け舟を出してくれた。
「大河、困っている？」
優燈は俺を見上げてきた。
「困っていないが、俺もそろそろ自分で朝食を食べたい」
俺は優燈に気を使いながら言葉を選んだ。
「それじゃあ、食べよっか」
優燈は俺から離れ、自分の席に座った。
あ～、なんでこんなに朝から疲れるかな？
そう思いながら、俺は自分の席に座って食べ始めた。
「大河～、俺の飯どこだ～？」
そうしていると、細目の少年がリビングに戻ってきて、自分の飯を要求して席に着いた。
「え、用意したはずだけど？」
俺は味噌汁を飲みながら答えた。
「でもないぞ～？」
「おかしいな。きちんと用意したはずだけど」
「あ、ごめん」
そこで、鈴が口に物を含みながら喋ってきた。
「鈴。喋る前に口に入っている物を飲み込め」
行儀が悪いから俺はとりあえず注意した。
「あ、うん」
鈴は口に一気に飲み干す。
「それで、何がごめんなんだ？」
まあ、だいたい予想はつくけどな。
「私が直斗の食べちゃった」
「なんだと？」
直斗はショックを受けた。
「ニャハハハ、ごめん」

鈴はもう苦笑いをするしかなかった。
「ごめんで済むならお代官様はいらないんだよっ！」
何それ？普通は警察じゃないのか？
「よくも、よくも俺の飯を喰ってくれたなっ！」
「だからごめんって言っているでしょ」
「うるさい。ぜってー、許さね。覚悟しろ」
細目の少年はテーブルを飛び越え、鈴に襲いかかった。
「うるさいっ！」
俺は行儀が悪いが茶碗を持ちながら、とりあえず細目の少年の脇腹に蹴りを入れて、とりあえず被害が少ない所に吹き飛ばした。
「でも、俺の飯が～」
細目は俺の蹴りをくらいながらもピンピンしていた。
「ご飯とみそ汁はまだたくさんあるから、自分でよそえ」
「おかずは？」
「焼き魚が一つ残っているからそれでも喰え」
「うお～、大河に感謝～」
細目は騒がしくしながら台所に向かう。
「は～、本当に朝から騒がしいな」
今頃だけど、あの細目の名は亥灯直斗（いとうなおと）と言って、説明がめんどくさいので簡潔にいうと、寮に住んでいる最後の寮生で、同学年の馬鹿である。
「大ちゃん。おかわり。もちろん得盛りで」
「あ、私のも頼む」
聖純姉妹は俺の事情とはお構いなしに空になった茶碗を突き出してきた。
はあ～、なんで俺、朝からこんなに疲れないといけないんだろう？つか、少しは遠慮しろよ。
俺は二人に渡された茶碗にご飯を盛りながらそんなことを考えていた。

Ｎｏ，９　朝の日常（後書き）

次回予告
作《次回、登校風景になります》
大《やっとで学園らしくなってきたな》
作《ここまでくるのが長かった》
大《お疲れ様》
作《ありがとう。お礼に》
大《何？俺に楽してくれるの？》
作《まさか、鈴とのイベントを入れてあげるよ》
大《はい？どういうこと？》
作《それでは次回は鈴の話にするのでよろしくお願いします》
大《おい。だから説明しろって。お～い》

ｎｏ，１０　登校と巻き込まれて（前書き）

作《すみません。寝ていておくれました》

no，10　登校と巻き込まれて

No10

「あ～、だり～」
時間は流れ、俺は欠伸をしながら学校に行く途中だ。
「にゃはは、今日は一段と朝から疲れているね」
その隣で鈴が俺を見ながら笑っていた。
「誰のせいだと思っている？」
「う～んと、直斗？」
「それもそうだけど、ほとんどお前のせいだよっ！」
「え、あたし何かしたっけ？」
鈴はほとんど自覚がないみたいだ。
「・・・もういい。それを説明するとよけい疲れる」
「ん？そうなの？」
「ああ」
「ならいっか」
鈴は結構マイペースだった。
俺は今、鈴と二人っきりでいた。
なんで、寮にいたみんなと登校しないで鈴と二人っきりで登校しているのかというと、揚羽はじーさんに朝から呼び出しがあると言って先にいき、渚は学校に行く途中、街を探検していきたいと言って音葉を連れて先に行き、優燈と龍は日直だからって行き。まあ、優燈の首根っこを龍が無理やり連れて行ったんだけどな。そして、直斗は仕事があるからと言って先に行った。
だから、必然的に鈴と一緒に行くことになった。
でも、もともと鈴も揚羽と一緒に行けばよかったのでは？と思ったんだが、鈴が『あたし、大ちゃんに用事があるから、大ちゃんと一緒に行くから』と俺に言って、俺が食器を洗い終わるのを待って

いてくれた。
「それで、俺に何の用だ？」
俺は話を切り出した。
「え、用？なんかあったけ？」
鈴は朝に言ったことを忘れているらしい。
「お前な～、姉さんがお前に『鈴。お前も一緒に行くか？』と誘った時に、俺に用事があるとかと言って断っただろうが」
「あ～、そういえば。そうだったね」
鈴はどうやら思い出した。
「それで用事はなんだ？」
「う～んとね。大ちゃん、確かあたしとお姉様に何かしてくれるんだよね？」
「ん？俺、そんなこと言ったけ？」
「うん。言ったよ。詳細はＮｏ、５の最後で確認してね」
「誰に言っているんだ？」
とうとう、バカになったか？あ、違う。もともとバカか。
「ん～、気にしないで。それでしてくれるんだよね」
「んま、覚えていないけど。お前が覚えているということはそうゆうことなんだよな」
「やったー」
鈴はとても喜んだ。
俺もその笑顔を見て、思わず微笑んでしまう。
こいつも、あの頃より笑うようになったな。
「ただし、一回だけだからな」
「わかっているって」
「それで、お前は俺に何をしてほしいんだ？」
「う～とね、今日の放課後、私に稽古をつけてほしいんだ」
「断る」
俺はすぐに鈴のお願いを断った。
「なんでよっ！」

当然のことながら、鈴はすぐに怒りだした。
「放課後は寮の仕事があるから無理。ただそれだけ」
「じゃあさ、寮のみんながいいよっていったら、やってもいいんでしょ」
「まあ、そうなるな」
「よし、学校に着いたら寮生全員に許可をもらおう」
「ん、がんばれ」
たぶん、みんながＯＫすると思うがな。
「しかし、なんで俺と稽古をしたいんだ？稽古なら門下生もいいだろ」
鈴と揚羽の家は聖純院と言って、武を極める者が集まる場所である。まあ、今は面倒くさいので聖純院のことについては、またあとで説明しよう。
「門下生は私に遠慮して本気で、やってくれないんだよね」
「おっちゃんは？」
「隼先生は、あれはあれで忙しくて稽古をつけてくれない」
「じぃさんは当然、つけてくれないとして、姉さんは？」
「お姉様はじぃちゃんがやるのを禁止してる。だから、大ちゃんが私の稽古の相手になってよ」
「だから、みんながＯＫしたらやってやるよ。それに俺も本気出すかどうかわからないだろ」
「大丈夫。大ちゃんはきちんとやってくれるから」
どっから、くんだその自信は？
俺は呆れるしかなかった。
「ん、なんだあれ？」
俺と鈴が学校の近くにある公園にさしかかった所で、鈴が突然何かを見つけ走り出した。
「おい、どこ行くんだ！」
俺が声を掛けたのにも関わらず、鈴は公園の中に走っていく。
俺は腕時計を確認する。

八時十五分。
まだ少しだけ間に合う時間帯だ。
「たく、遅刻したら。お前のせいにするからな」
俺は鈴の後を追うように公園の中に入っていた。
「あんた達、いい加減にしなさいよ」
「はあ、なんだこの女！」
「いきなり、入って来やがって。俺らはなお前の後ろにいる奴に用があるんだよ」
そしたら、噴水の近くで鈴が後ろに同じ学校の制服をきた少女を庇いながら、他校の金髪と茶髪の二人組の生徒と睨みあっていた。
また、あいつは自ら面倒臭いことに巻き込まれやがって。
俺は巻き込まれるのは嫌なので、その様子を鈴たちから噴水で死角になっているところから見学することにした。
「うるさい！この子が何をしたかわからないけど、二人で脅すなんて卑怯じゃないっ！」
鈴は怒りを面（おもて）にだしていた。
「うるせー！そいつはこいつにぶつかったんだよ」
「しかも、そいつぶつかったのにも関わらず謝らないんだよ」
「そうなの？」
鈴が後ろに庇っている少女に確認を取ると
「わ、私はきちんと謝りました」
少女は震えながらもきちんと話してくれた。
「この子は謝ったって言ってるんだから、それでいいじゃない」
そして、また二人組を睨みつける。
「誠意が足りないんだよ」
金髪の少年が鈴を見下ろしながら言ってくる。
「じゃあ、どうしたらいいの？」
「そうだな。これを払ってくれたらいいぞ」
茶髪の少年は右手の親指と人指し指で輪っかを作った。
「最低ね。あんた達」

鈴の怒りは頂点に達したかもな？
「なんだったら、お前ら二人の体でもいいぞ」
「いいねー。むしろそっちの方がいい」
二人組はニタニタ笑いながら、鈴と少女の体を見定めた。
俺はそこで時間を確認した。
八時二五分。
もう、限界だな。
俺はこれ以上待つと遅刻が確定するので見学を止め
「おい、鈴。そこまでだ」
そして、鈴たちの前に姿を現した。
「あ、大ちゃん。来るの遅い。また、巻き込まれるのが嫌で隠れていたでしょ」
「う、うるさい。それより、早く行かないと遅刻するぞ」
俺は図星をつかれたので、話を変えた。
「でもこの子を助けなきゃ」
「だったら、そいつも一緒に連れて行け」
「でもでも」
「でもでも、じゃない。後は俺がやっておくから早く行け。それとも何かその子も遅刻させてもいいのか？」
俺は鈴に何も言わせなかった。
「んも～、大ちゃんの頑固者」
鈴は納得がいかない顔をして、俺を睨みつけてくる。
「お互い様だろ」
俺は苦笑いをした。
「わかったよ。遅刻しちゃいけないし先に行くよ」
「ああ、そうしろ」
俺は鈴を邪魔者扱いするように手を払った。
「ほら、君も行くよ」
「え？あ、ちょっ、待、って、きゃあああああ」
鈴は少女の手を掴み、無理やり引きずりながら俺の横を通り走っ

て行った。ついでに、俺の荷物も持って行ってくれた。
「大ちゃん。ありがとう」
鈴は俺の横を通り過ぎる瞬間、小声でお礼を言ってくる。
「どういたしまして」
俺も礼を返す。
さて、遅刻は確定だし、諦めて俺は自分の仕事をしないとな。
「おい、ちょい待てよっ！」
二人組は鈴たちを追いかけようとした。
「ちょい待つのはお前らだ」
しかし、その二人の前に俺は立ちはだかる。
「おい、お前どけよ。あの二人が逃げちまうだろ」
「つ～か、お前さえ出てこなければあの二人を喰えたのに、どうしてくれるんだよ？」
二人組は俺に敵意を向けながら睨みつけてきた。
「いやー、俺に文句を言われても困るよ。もともと、お前らが変にカツアゲみたいなことをやっていなければ、こうならなかったんだし。つ～か、むしろお前らがこんなことをやったおかげで、俺が遅刻をするはめになったじゃん」
それを考えるとなんだか無償に腹が起ってきたな。うん。決めた。こいつらで日頃の鬱憤（うっぷん）を晴らそう。
「だったら、ちょっかいを出して来なければいいだろ」
「そうだ、そうだ」
二人組は俺に向かって文句を言ってくる。
「・・・・・・・」
しかし、俺は何も答えなかった。
「何？しかとこいつムカつく」
「おい、やっちまおうぜ」
「おう」
二人組は俺が無視したことが気に喰わないのか、襲いかかってきた。

たぶん、他にも理由はあると思うけどね。
「死ねええええええっ！」
まず始めに、金髪の男が俺から見て左側から俺の顔面を殴りにかかってきた。
「遅い」
俺はそれを左手で受け止める。
「おりゃあああああ」
今度は、茶髪が俺から見て右側から俺の脇腹に向かって蹴りを入れてくる。
「あらよっと」
「ぐふっ」
俺は左手で受け止めた金髪の拳を掴んだまま体を回転させた為、金髪がそのまま引っ張られ、そのまま俺の代わりに蹴りを受け止めてくれた。
そしてその後、金髪の拳を離して、そのまま脇腹に膝を入れ横に飛ばした。
金髪はそのまま木に当たり動かなくなった。
「まずは一人」
「お前は鬼かっ！」
茶髪は俺に向かって文句を言ってくる。
「鬼は酷いな。俺はれっきとした人間だよ」
俺は笑いを堪えながら答えた。
「ところでさ、お仲間がやられちゃったけどまだやるの？逃げるなら今の内だけど？」
「当たり前だ。俺は仲間がやられたのに逃げる男じゃねー！」
「おー、俺はそういう人間は大好きだよ」
まあ、逃がす気は元からないんだけどね。
「ところでさ、お前って冷たいの平気か？」
「はあ？なんでそんなこと聞くんだ？」
茶髪は俺のことを警戒している。

「いやだってね。今からお前を噴水に投げ飛ばす予定だから」
「はあ、何言っている、ぎゃあああ、冷たい！」
茶髪はいつの間にか噴水の中に投げ込まれていた。
「琥牙流奥義（こがりゅうおうぎ）、終影（しゅうえい）」
何故なら、俺が、茶髪が気がつかないほどの速さで近づき、そのまま噴水に投げ込んだからだ。
しかし、久々にこれをやったからすげー疲れたな。
「いや～、冷たいのは当たり前じゃん。なんだってまだ春だよ。しかし、よく噴水に飛び込む勇気があるね。俺、ある意味ですごいと思うよ」
俺は茶髪をバカにしながら目の前まで近づき、
「ふ、ふざ、け、け、る、る、なああ。ぐふっ！」
噴水から出ようとした茶髪の顔面に拳を入れた。
「これで、二人目」
そして、そのまま茶髪は気絶したので、噴水で溺れては大変なので俺は茶髪の髪を引っ張りながら、茶髪を地面の上に上げた。
「さて、終わったし学校に行くかな」
俺は体をほぐしながら服装を整えた。その瞬間が命取りだった。
「まだだっ！」
「え？」
俺は声をした方を振り向くと、いきなりパンっという音と共に金髪が俺に体当たりしてきた。
そして、俺の脇腹には固い物が当たっている感じがした。
「へへへ、俺を舐めるんじゃねーぞ」
金髪は不敵な笑みを浮かべながら俺から離れた。
そして、その手にはナイフが握られており、ナイフの先端には赤い物がベットリと・・・・・ベットリと・・・・・付いていなかった。むしろ、先端部分が綺麗に無くなっていた。
「な、なんじゃこりゃあああ！」
金髪はそれを見て驚いていた。俺も同じで驚く。

一体、どうなっているんだ？まあ、でもとりあえず。
「くたばれやっ！」
俺はこの隙を好機とし、金髪の顔と腹に五、六発ずつ拳を入れ、ふっ飛ばし気絶させた。
「しかし、一体どうなっているんだ？」
俺は周りを見回すと近くにナイフの先端部分とその近くに地面にめり込んでいる銃の弾も見つけた。
まさかな？
俺は嫌な予感がして学校の方を向き、二階の一番左側にある窓が開いている教室を見た。
そしたら、そこにはスナイパーライフルを抱いた優燈が手を振って俺を見ていた。
「やっぱりな」
俺も手を振り返してやる。
しかし、この時の俺は心情穏やかではなかった。
何故なら、一番、貸しを作ってはいけない奴に貸しを作ってしまったんだから。
さて、この後、俺は大丈夫なのかな？
俺は手を振り終え、今後の自分の身をあんじながら学校に向かった。

ｎｏ，１０　登校と巻き込まれて（後書き）

次回予告
作《次回は授業前の十分休みの話です》
大《どういった内容？》
作《それは秘密です》
大《それって次回予告の意味無くない？》
作《あ、でも、新キャラがでるかもね》
大《うお、まじか》
作《まじです。では次回を楽しみに》

No，11　授業前の一時

「さて、遅刻した言い訳をどうしようかな？」
俺は学校の中に入り、教室に向かっている途中だった。
「言い訳って、寝坊をした訳ではないだろ」
そして、俺の隣には何故か作業着を着たお爺さんが歩いていた。
お爺さん立派な髭を撫でながら窓を見て俺に話しかけてくる。
「まあ、それもそうだけどさ。でも、遅刻は遅刻だろ」
「だったら、ワシがお主の担任に言っておくか？」
「いや、いいよ」
「何故じゃ？」
「俺、権力使うのってあんまいい気分がしないんだよね」
「まあ、それもそうか。ワシもあまりこういうことで使いたくないからの」
「だったら言うなよ」
「お前だから言っているんだぞ？」
「その気持ちだけ受け取っておくよ」
「あああ、そうしとけ。まあ、後でまた何かお礼するかもしれんから楽しみにしとけ」
お爺さんはカッカッカッと笑った。
「野菜以外で頼むよ。ああ、それと、今頃になったけど野菜ありがとう。すごく助かるよ」
「うむ、どうじゃ？美味かったか」
「もちろん」
俺はそこで、自分の教室に着いた。
「それじゃあ、これで」
「うむ。勉強を頑張るのじゃぞ」
「わかっているよ。じーさん」
そうして、俺は自分の教室の扉を開けて、中に入った。

中に入ったらやはりクラスのみんながこちらに視線を送ってくる。
「主席番号一二番琥牙大河。遅刻しました」
俺は教卓にいる適度に髪を切り揃えた何故か上着代わりに胴着を着た先生の方を見て言った。
「琥牙が遅刻なんて珍しいこともあるんだな。それで、理由は？」
教卓にいる先生は、日誌を見ながら聞いてくる。
「不良どもとケンカしていました」
俺は遅刻の理由を考えるのが面倒だったので素直に答えた。
「勝ったのか？」
「一応、勝ちました」
最後の最後に優燈に助けられたしね。あれがなかったら俺は今頃、病院送りだ。
「まあ、今の状態のお前が負けるとしたら師範か俺や揚羽ぐらいだからな」
先生は笑いながら具体例を出してくる。
「そうなりますね」
俺もその事を本当に思っているので頷いておく。
この先生は、隼剣（はやぶさつるぎ）と言って、俺らの担任であって、聖純院の師範代をやっている人だ。科目はもちろん体育でみんなから剣（けん）さんと呼ばれている。
ちなみに、さっきの作業着のお爺さんは聖純煉磨（きよずみれんま）と言って、この学園の理事長であり、聖純院の師範。そして、揚羽と鈴の祖父だ。でも何故そう言う人が、作業着を着ているのかというと、答えは簡単で単に事務員も兼ねているからである。しかし、この学園の大抵の生徒は煉磨が理事長だということを知らない。
「それじゃあ、琥牙は座れ。あ、それとお前は遅刻扱いにはしないから」
隼先生は名簿表に書き込みながら言ってくる。
「え、どうしてですか？」
俺は席に座りながら。

「どうせ、お前のことだから巻き込まれたんだろ」
先生。よくわかったね。
「それに、鈴が『大ちゃんは私の代わりになってくれたんだから遅刻にしないで』って頼んでくるわ。優燈がいきなりロッカーからスナイパーライフルを出して外に射撃した後、『大河を遅刻させたら、一人でいる時、気を付けた方がいいよ』って脅してくるし大変だったんだぞ」
「あははは」
俺は優燈の話を聞いて笑うしかなかった。
《真面目な話で。お前、後でちゃんと優燈に注意しとけよ》
隼先生が俺にアイコンタクト送ってくる。
《わかってますよ》
俺も隼先生にアイコンタクトで返した。
無いと思うけど、俺の仲間に人殺しを出したくないもん。
「ああ、悪い。琥牙の件でホームルームが長引いてしまったな。それじゃあ、今日も一日勉学に励むこと。日直挨拶」
「起立。礼」
龍が挨拶をすると隼先生は教室から出ていった。
「大ちゃん大丈夫だった？」
鈴が心配そうな顔をしながら俺に近づいてきた。
「ああ、大丈夫だよ」
俺は鞄から荷物を出して机の中にしまう。
「でも、最後は危なかったけどね」
優燈は俺にゆっくりと後ろから抱きついてきてくる。
俺はいつものことなのであまり気にしない。
「優燈。それは言わない約束だ」
「貸し一つだからね」
優燈は耳元でぼそっと呟いた。
「その話はまたあとでな」
たぶん、優燈のことだから無茶なことをお願いしてきそうだな。

「ところで、鈴。みんなにＯＫ貰ったのか？」
俺は話題を変える為、鈴に今日の朝に言われたことを聞いてみた。
「あ、そういえばまだだった」
「ん？それって何の話？」
優燈が興味ありげに聞いてきた。
「今日の放課後、大ちゃんを私に貸してくれないかって話？」
鈴は微笑みながら優燈に説明した。
「だめ、大河は私の物っ！」
優燈は何かを勘違いしたらしく俺を引き寄せる。
「鈴、ややこしい言い方をするな。それと優燈、いつから俺はお前の物になったんだ。つか、いい加減、離せ」
頭にすごく柔らかい物が当たっているんだよ。
「お、なんか面白いことをやっているじゃん」
「くそ～、大河～、相変わらず優燈といちゃつきやがって。羨ましいな」
俺の声を聞きつけたのか、龍と直斗が近づいてきた。
「あ、ちょうどいいや。龍達にも聞きたいことがあるんだけど」
「お、何何？好きな人のタイプ？それなら、鈴のそんな膨らみのない胸じゃ俺のタイプにはならないぞ」
「・・・・・とりあえず、くたばれ」
「え、ちょ、待っ、ぎゃー」
鈴は青筋を立てて直斗に襲いかかった。
直斗、お前は少し黙っていた方がいいぞ。
「それで、一体何の話だ？」
龍は鈴達の様子を見て苦笑いをしながら俺に聞いてくる。
「大河は胸が大きい方か小さい方どっちが好きかって話」
優燈は頬を赤くしながら龍に教えた。
「おい、勝手に話を捏造（ねつぞう）すんな」
「大河はどっちかというと、揚羽姉ぐらいがいいんじゃないのか？」
「そうそう、あの柔らかさがって、おい、勝手に俺の好みを決める

な」
俺は龍を睨みつけた。
そして、何故だか優燈が俺の頭にしつこく胸を当ててくる。
「・・・・・優燈。頼むから、頭に胸を押しつけてこないでくれ」
「大河は私とお姉ちゃん。どっちの胸が好き？」
・・・・・あ～、もう頭が痛くなってきた。
そんな、授業前の休み時間だった。

Ｎｏ，１１　授業前の一時（後書き）

次回予告
作《次回はちょっとした授業風景になります》
大《やっと、学園物になってきたな》
作《大河はいつもどおり被害者になります》
大《あ、それは変わらないのね。そろそろ、主人公に優しくしようって思わないの？》
作《次回もお楽しみに》
大《うわ～、無視された》
作《感想などお待ちしております》

No，12　授業風景（前書き）

作《お待たせしました。感想とかあったら嬉しいです》

No，12　授業風景

時は流れ、今は2時間目の体育の授業中。
そこで、俺らはグランドで体力測定をやっていた。
今、やっている種目は男子が５０Ｍ走、女子が遠投だ。
「おい、大河」
剛が俺に話しかけてきた。
「何？」
俺は体をほぐして、怪我をしないように整える。
「５０Ｍ勝負しないか？」
「嫌だ。だるい」
俺はすぐに断った。
「なんだ、俺に負けるのが怖いのか」
「いや、全然」
「なら、やろうぜ」
「・・・・・わかったよ。やればいいんだろ」
やれやれ、面倒だな。
俺と剛はスタート地点に立った。
「龍。合図頼む」
「あいよ。それじゃあ、位置に着いて、用意、ドンっ！」
龍の合図と共に剛がスタートダッシュをした。
「おお～、これで俺の勝ちだあああ！」
しかし、そんな強気の剛に対して、俺は
「爆流脚っ！」
気をまとった足を一気に爆発させ、剛を一瞬で追い抜きゴールした。
「ゴール。俺の勝ち」
俺は足に急ブレーキをかけた。
これって、止めるのにコツがいるんだよね。

「て、おい、ちょっと待て。それ反則だろ」
剛も俺の後に続いてゴールをし、文句を言ってきた。
「だって、お前。技の使用は禁止とか言ってないじゃん」
「でもなぁ、普通、測定には技は使わないだろっ！」
「大丈夫。きちんと測定してあるから、痛っ！」
「誰があんなのを測定するんだよ。大河、お前だけもう一回、走れ。今度は技を使うなよ」
隼先生が呆れながら俺を軽く小突いてくる。
「え～、だり～」
「え～、じゃない自業自得だ」
「わはは、大河、だっせー。ぐはっ！」
剛がバカ笑いしたのにムカついたのでとりあえず殴っておいた。
「ほら、後はお前だけなんだから早く走れ」
「解りましたよ」
俺は結局、隼先生に言われたとおりにもう一度５０Ｍ走をやらされた。
「よ～し、全員終わったことだし、後は時間まで各自で自由にやってよし」
隼先生の言葉と共にみんなして解散した。
「先生。稽古をつけてもらってもいいですか？」
鈴が体をうずうずさせながら隼先生に聞いた。
「あほ。お前は今日の朝の稽古でいつものノルマより多めにやっているんだから少し休め」
「先生は稽古とはどういうことですか？」
渚が鈴達に近づきながら聞いてくる不思議そうに聞いてくる。
「ああ、そうか、井上は転校生だから知らなくて当然か。実はな、俺は先生の他に聖純院つまり鈴の実家で師範代もやらせてもらっているんだ」
「なるほど。だから、鈴が稽古をつけてほしいと言ったのですね」
「まあ、そうなるな。でも、さっきも言ったとおりに、鈴は動きす

ぎだから少し休ませないといけない」
「だったら、私に稽古をつけてくれませんか？」
「面倒だから嫌だ」
隼先生は結構面倒くさがり屋である。
「なっ！」
渚はそれを聞いて驚いた。
「あ、でも、来たばっかりだから井上の実力を見てみたいしな。誰かに相手をしてもらおうかな」
隼先生が周りを見回すと俺と眼があった。
なんか、話の流れ的に嫌な予感だする。
「おし、大河。渚と手合わせしてくれ」
やっぱりか。
「先生っ！大ちゃんは私と先に稽古をつける予約をしています」
鈴は口を挿んでくる。
「ん？そうなのか、大河？」
「はい。今日の放課後に稽古をつけてくれと頼まれました。でも、俺には琥牙寮の仕事もありますし。みんながＯＫしてくれたらの話ですけどね」
「俺はいいぞ」
「俺も」
「私もだ。あ、でもその代わりに今、私と手合わせをしてくれ」
「私は大河に付いていくよ」
琥牙寮の皆さんは意見をそれぞれの言ってくれた。
「やったー。これで大ちゃんに稽古をつけてもらえう」
鈴は喜んでいた。
「だ、そうだが。どうするんだ？」
「いや、でも、まだ音葉が良いと言うかどうか」
「音葉は『夕食は自分が作りますから琥牙先輩はがんばってきてください』とメールが来ていたよ」
鈴は俺に自分の携帯のディスプレイを見せてきた。

「うわ。本当だ」
俺。もう、逃げ道ないじゃん。
「まあ、そういことだから。早く手合わせをしてくれ」
渚はいつの間にかどこからか出した木刀を手に持って、俺に突き付けてきた。
「まあ、そういうことだから。がんばってくれ」
隼先生は俺の肩に手を置いた。
「人事のようですね。先生？」
「だって、人事だもん」
うん。あとで殴ろう。
「わかりましたよ。やればいいんでしょ。やれば」
俺はそういって拳を構えた。
「お、やっとでやる気になってくれたか」
「おかげさまでね」
俺は渚を睨みつけた。
「さ、張った、張った。まだ実力がわからない転校生の井上渚と我がクラスのなんでも屋琥牙大河。勝つのはどっちだ」
龍がクラスのみんなに向かって賭けごとを始めた。
先生。止めなくていいのか？
「もちろん大ちゃんに一つ」
「私も大河に一つ」
「じゃあ、俺は渚に賭けるかな？」
「じゃあ、俺も井上にだ。たまには大河が負けるとこを見てみたい」
優燈達に混じって先生も賭けごとをやっていた。
おいおい、大丈夫かこの先生？
ちなみに、賭けの結果。クラスの大半の男子は渚に賭け、女子は俺に賭けてきた。
「よし、先生も賭けに回ったから審判は俺がやるぞ」
龍がレフリーとして名乗りを上げた。
「時間はこの２時間目が終わるまで。ルールは・・・・・どうしま

す？」
龍は先生に聞いた。
「そうだな。どちらかがギブアップをするか気絶をするまで。それと、やばいと思ったらそこで終了。あとはなんでもありということで」
「ということだ。それじゃあ、二人とも準備はいいか？」
龍が確認をしてくる
「いつでも」
「だるいけど。いいぞ」
「それじゃあ、はじめっ！」
龍の合図と共に手合わせが始まった。

No，12　授業風景（後書き）

次回予告
作《大河、負ければいいな》
大《うわ、この作者、酷》
作《だって、お前ちゃんとやんないじゃん》
大《そうゆう風に書いているのはお前だろ》
作《あれ？作者にたいしてそうゆう態度をとっちゃう？いいのかな〜、そんな態度とって？》
大（すいませんでした）
作《よろしい。でも、謝ったところで大河は虐められるんだよね》
大《結局そうなるのかよ！》

Ｎｏ，１３　勝負と結果（前書き）

感想お待ちしております

No，13　勝負と結果

「うおおおおおおおおおおおっ！」
渚は怒堂の勢いで木刀を使って色々な角度から俺に向かって攻めてくる。
「甘い」
俺はその木刀をすべて気でコーティングした足で全て蹴り返した。
「なっ！」
渚は驚きながら距離を置く。
「もらった。爆流脚！」
俺はその隙を狙った渚に蹴りを繰り出す。もともと、爆流脚は足に溜めた気を爆発させ相手に突進を喰らわせたり、その勢いに乗せて技を繰り出す技なので、移動手段にあまり使ってはいけないのである。
「見切った！」
渚は俺の蹴りが当たるギリギリの所で避けた。
「次は私の番だ。井上剣術、壱の太刀、風花（かざはな）」
そして、そのまま俺に避ける暇を与えずに、技を繰り出す。
「風砂（ふうさ）っ！」
俺はまずいと思い、体を回転させ砂嵐を作り防御する。
「なんの、弐の太刀、陽炎（かげろう）」
渚は木刀に熱風を纏わせそのまま砂嵐を一刀両断した。
「なっ！」
「まだだ、参の太刀、氷柱突き」
そして、そのまま俺に追い打ちを掛けてくる。
「あ、無理」
俺は避けることもできずに、そのまま木刀の剣先を頭に受け、そのまま吹っ飛ばされてしまった。
「勝負ありだな。審判、早く判定をしろ」

渚は龍に指示をだした。
「え？なんで？」
龍は不思議そうな顔をする。
「なんでって、どう見ても私の勝ちだろ」
「だって、まだ大河はギブアップもしくは気絶をしていないぞ」
「でも、私の氷柱突きをまともに頭に喰らったんだぞ」
「あ～、そうか～。お前、大河のウザさ知らないもんな」
「はあ？それってどうゆう意味だ？」
「え～とな、説明しにくいんだけど。大河は」
龍が渚に解説をしようとした。
「なあ、先生。リストバンド外していいですか？」
その時、渚の後ろから声が聞こえてきた。
「外さないと駄目な相手なのか？」
「いんや、そうゆう訳ではないんだけど。相手も本気出してやっているんだしこっちもちょっとは本気を出してあげないと可哀想かなと思ってね」
渚が驚きながら振り向くとそこには、隼先生とさっきまともに技を喰らった俺が話していた。
「それじゃあ、足の奴だけ外せ。それなら、いいだろ」
「あんがと」
俺は隼先生に許可をもらい、足に巻いてあったリストバンドを外した。
「ななななななな」
渚は俺に向けて指を刺し驚いていた。
「よし、続きをやるか。って、何をそんなに驚いているんだ？」
俺は近くにリストバンドを置き、戦闘態勢に入った。
「だって、お前。私の氷柱突きを喰らっておきながらそんなに元気でいられるんだ」
「さっきのって氷柱突きって言うんだ」
「あの突きを喰らった者は大抵、気絶か病院行きの筈なのに」

渚はすごく悔しそうだった。
「手合わせなんだからそんなに危ない技は使うなよ」
つか、悔しがるなよ。
「そんなことより。早く構えた方がいいぞ。俺も少し本気を出してやるから」
「じゃあ、今までのは本気ではなかったということか」
「まあ、そうなるな」
「殺す。絶対に殺す」
渚は俺に殺意を向けながら木刀を構えた。
「そんじゃあ、いくぞ、爆流脚！」
俺は足に溜めた気を一気に爆発させた。
「お前はバカか？その攻撃はもう見切っている」
渚はまた俺の蹴りを避けようとした。
「くっ！」
しかし、俺の攻撃を避けきれず木刀で受け止めてしまった。
「さっきよりもスピードが上がっているだと」
「ごめいとう。でも、俺の攻撃はまだ終わらないんだよね。摩天楼（まてんろう）！」
俺はそのまま、木刀ごと渚を空中に蹴り飛ばす。そして、そのまま俺も続いて、渚に向かってジャンプする。
「ギロチン」
それから、また、渚を踵落としで木刀で受けさせながら地面に叩きつける。
「ぐっ！」
「風玉（かざだま）！」
今度は蹴りで風の塊を何回も渚に蹴って、追い打ちを掛ける。
「くそっ！」
渚は木刀ですべて撃ち落とす。
ちなみに、渚は俺の技をすべて、木刀で受け止めていた。
「隕石（いんせき）落とし！」

最後に俺は渚に向け、落下しながら蹴りを放つ。
「喰らってたまるか。四の太刀、地雷壁！」
渚は体制を立て直し、木刀を打ち上げてきた。
そして、渚の技と俺の技が交差する瞬間、そこには地響きと共に砂埃が起こった。
「試合はどうなった？」
「お～い、大河。何がなんでもやりすぎだぞ」
視界が悪い為、手合わせの結果がどうなったかわからない。
「あ、視界が晴れてきた」
そして、段々と砂埃が治まるって、視界が見えやすくなってきた。
「おい、手合わせはどうなった？」
クラスのみんなが結果に注目するため、地響きが起こったところを見た。
そして、そこには。
「な～、我が弟よ～。ずいぶんと楽しいことをやっているではないか～」
俺の蹴りを片手でいとも簡単に受け止め、渚の木刀を足で踏みつけて止めて、二人の間に割って入る揚羽がいた。
「えっ！なんで、姉さんがここにいるんだ？」
俺は驚きながら地面に着地した。
「そうだぞ。今はまだ、３年生は授業中のはずじゃ？」
渚も構えを解き、驚いていた。
「そんなもん、もう終わっている。現に見てみろ、周りにはギャラリーが多くいるんだぞ」
揚羽に言われてから気がついたが、俺たちの周りには騒ぎを聞きつけた生徒たちでいっぱいだった。
「つ～、ことは時間切れか」
くそ、もう少しで勝負が着くはずだったのにな。
「おい、審判。判定はどっちだ？」
渚が龍を睨みつけながら聞く。

そんなに勝敗を決めたいのかな？
「そんなもん。わからねーよ」
龍は両手をあげながら首を振った。
「なっ！」
「だって、勝負がつく瞬間、砂埃が起きたんだぜ。しかも晴れたら晴れたで揚羽姉が割って入っているし勝敗の付けようがないさ」
「あ、でも、私はどっちが勝ったかわかるぞ」
「どっちだ？」
「当然、勝利は大河だ」
揚羽はきっぱりと言い切った。
「・・・・理由を教えて貰おうか？」
渚は納得がいかないようで、木刀を構えた。
渚の今の様子だと、納得がいかなければ斬るということがわかる。
「理由かいいぞ」
揚羽は何故か嬉しそうに答える。
「渚。確かにお前の剣術の技術はすごいが大河の格闘技術の方がより優れているんだよ」
「どういうことだ？」
「お前、一発でも体に攻撃を喰らったか？」
「いや？しかし、それがどうかしたか？」
「気付かないのか？大河はすべて木刀に蹴りを入れていたんだぞ」
「なっ！で、でも、それは私が木刀ですべて受け止めたかもしれないだろ」
「まあ、2回目の爆流脚の時は反射的にそうかもしれないが、摩天楼やギロチンの時はどうだった？お前は体制がくずれて隙だらけなのにも関わらず。大河はずっと木刀越し技を放っていたんだぞ」
「そ、そんな」
渚は自分が負けたのが信じられないようだ。
「まあ、そういうことだ。渚は剣の才能があるようだから努力次第では上位の方に入れるかもしれないな。つ～ことで、勝者は大河。

異論はないな」
揚羽は俺の腕を取り、高々と挙げた。
「「「「「「「わああああああああっ！」」」」」」」
周りの生徒達は歓声をあげた。
「そんじゃあ、お前ら。そろそろ授業をするから教室に戻れ～」
引率の先生方が生徒を学校に誘導し始めた。
俺もやっと終わったと思いながら学校に戻ろうとした。
「おい、待て」
しかし、揚羽に首根っこを掴まれてしまった。
「な、何、姉さん？」
すんげ～、嫌な予感がするんですけど。
「実はな最近、私に決闘を申し込む奴らがいないんだ？」
「そう、それは良かったね」
「良くないぞ。私は闘いたくてすごく体が疼いているんだぞ。しかも、さっきの手合わせを見ていて、更に体が疼いてしまった。だから」
「だから？」
「今度は私と手合わせをしてもらおう」
やっぱりか。
「断る。今日はもう疲れた」
「だめだ。それは私が許さない。つか、むしろお前に拒否権はない」
そんな理不尽な。
「なに、すぐに終わるよ。ほら、先生に見つかる前に移動するぞ」
「い～や～だ～！」
俺はそのまま、揚羽に無理やり引きずられて、人眼がつかない場所に連れて行かれた。

Ｎｏ，１３　勝負と結果（後書き）

次回予告

作《今思ったけどこの小説一日一日が長いな》

大《本当に今頃だな》

作《だから、そろそろ時間を飛ばしながらやって行くよ》

大《大丈夫だろうな》

作

大《たぶんかよ！》

作《とりあえず、予定では２０話過ぎからだと思うから》

大

作《あ、それとこれからの投降は、作者の都合により不定期になっていくのでそこらへんご了承ください。できれば一週間内に一話ずつ投降していきたいと思います》

Ｎｏ，１４　手合わせ後の昼休み（前書き）

お待たせしました。

Ｎｏ，１４　手合わせ後の昼休み

キ～ン、コ～ン、カ～ン、コ～ン。
四時間目が終了の鐘が鳴る。
「もう、だめ」
俺はその音と同時にうつ伏せに倒れ込んだ。
「大河だらしないぞ。まだ、２時間しか手合わせをしていないんだぞ」
揚羽は腕組をしながら俺を見下ろしてきた。
「いや、休憩なしで二戦はきついから」
俺はうつ伏せから仰向けになり揚羽を見上げる。
今日は黒とピンクのチェック柄か。
「私にはそんなの関係ない」
「でも、俺には関係あるんだよ」
俺は揚羽に二時間目が終了後、旧校舎の屋上に連れてこらえて、手合わせの相手をさせられていた。
え？三、四時間目はどうしたかって？
そりゃあ、もちろん。さぼるしかないだろ。
「まあ、どちらも本気では無かったが、おかげで少しばかり体の疼きは止まったよ」
「それは良かったね」
おかげで俺は身心共にボロボロだけどな。
「・・・そういえば、奈絵がお礼を言っていたぞ。昨日はどうもってな」
ああ、昨日の強盗に関してのことかな？
「お前、何かしたのか？」
「あ、うん、実は」
俺は揚羽に昨日の出来事について説明した。忘れた人はＮｏ，０を見てください。

「なるほど。そういうことか。しかし、お前って不幸の出来事に遭遇しやすいよな」
「そうだね。俺にとって一番の不幸は姉さんに出会えたことだよ。ふぐっ！」
俺は揚羽に顔面を思いっきり踏みつけられた。
「そんな変なことを言うのはこの顔かな？」
「いひゃい、いひゃい、みゃじ、にゃめて」
「謝るか？」
「あやみゃる。あやみゃる」
「なら止めてやる」
揚羽は俺の顔から足をどけてくれた。
「ふぅ、もう少しで顔が整形されるところだった」
俺は起き上がり、顔を整えた。
グ～。
俺の腹から音が鳴った。
「そういえば、もう、そんな時間か。私は弁当があるからいいとして、お前はどうするんだ？」
「俺は購買なんだけど、今日はもう無理かな」
たぶん売り切れになっているし。
「なんだ飯はないのか？なら、ちょうどいいな。五分ほど待っていてくれ」
「なんで？」
「いいから、待っていろ」
揚羽そういってその場からいなくなった。そして、自分の弁当箱とラッピングされた袋を持って五分きっかりに戻ってきた。
「ほら、これをお前にやるよ」
俺は揚羽からラッピングされた袋を手渡された。
「なにこれ？」
「今日の料理実習で作ったクッキーだ」
「珍しいね。姉さんが俺に食べ物を渡すなんて。何かあったの？」

袋の中を開けてみると、星型のクッキーが入っていた。
お、うまそう。
「まあ、今日は私の機嫌もいいし、たまにはこういうこともあっていいと思ってな」
揚羽は俺の隣に座り、弁当を広げ、食べ始めた。
「それじゃあ、とりあえず一枚」
俺は袋から一枚クッキーを取り、口に含んだ。
「どうだ？」
「うん。ちょうどいい甘さだし、サクサク感もあっておいしいよ」
俺は素直に褒めた。
「そ、そうか。それはよかった」
揚羽はどことなくホッとしていた。その顔は異様に赤くなっていた。
・・・・姉さん。風邪でも引いたのかな？
その後、俺は腹が減っていたのもあって、すぐにクッキーを食べつくした。
「ごちそうさま」
俺は袋を握りつぶし、ポケットに入れすぐに寝ころんだ。
「おい、食べてすぐに横になったら豚になるぞ」
「疲れているんだからそれぐらい見逃してよ」
あ～、風が気持ちいいな
俺は空を見上げながらそんなことを思っていた。
「なあ、大河」
揚羽が俺の名を呼んできた。
「ん？」
「お前、昨日の約束を覚えているか？」
「一応」
今朝、鈴に言われて思い出したけどね。
「それで私達に何をしてくれるんだ。お前は？」
私達の中にはたぶん鈴も入っているんだな。

「ん～、そう言われてもいまいち何をすればわからないから、姉さんの意見を聞かせてよ」
「意見？」
「そう、俺に何をしてほしいのか。ちなみに鈴は俺に稽古相手を頼んできたな」
「それで、お前はＯＫを出したのか？」
「寮の仕事もあるし、みんながＯＫ出したらやってもいいって言ったよ」
「みんなはＯＫ出したのか？」
「ああ、おかげで今日の放課後やることになったよ」
なんで、あんな条件だしたかな？
「それで、姉さんは何をしてほしいんだ？できれば手合わせ意外だと嬉しいんだけど」
「そうだな、キスしたいな」
「え？」
揚羽はそう言って俺に覆いかぶさってきた。
「じょ、冗談だよね？」
俺は手足をバタつかせて逃げようとしたが揚羽にうまく押さえられている為、できなかった。
「これが冗談にみえるか？」
揚羽は怪しい笑みを浮かべた。
とてもじゃないけど、冗談には見えない。
「キスするって言っても俺なんかでいいの？」
「お前だからだよ。大河」
揚羽そう言って、だんだんと俺に顔を近づけてきた。
これはもう、覚悟を決めるしかないな。
俺はそう思い、目を閉じた。
「ぷ、あはははは」
そしたら、いきなり笑い声が聞こえてきた。
眼を開けてみると、揚羽が俺をまたぎながら笑っていた。

「いや～、こんなに本気にするとは思わなかったぞ」
「あ～、やっぱり。冗談だったんだ」
俺はホッとしたような残念だったような気持ちが混ざり合っていた。
「いや～、悪い悪い。」
「それで真面目な話で、本当に俺に何をしてほしいの？」
「そうだな、お前、明日は何か予定あるか？」
「え？明日？明日は確か土曜日だから暇だけど」
「じゃあ、明日一日だけ私に付き合え」
「なんで？」
「それは明日になったら教える」
それはある意味で嫌な予感がするんですけど。
「わかったよ。それじゃあ、明日そっちにいけばいいの？」
「ああ、そうしてくれ。時間はそうだな。一〇時頃になったら来てくれると嬉しい」
「わかった」
「それじゃあ、私は戻るけど。お前はどうする？」
揚羽は立ち上がり俺を見下ろしてくる。
だから、スカートの中見えているよ。教えないけど。
「いつも通り。昼休みが終わるまで寝ているよ」
「わかった。授業には遅れるなよ」
「わかっているよ」
揚羽は俺に挨拶をして、行ってしまった。
「さて、俺も寝るかな」
俺は眼をつぶり昼寝を始めた。

Ｎｏ，１４　手合わせ後の昼休み（後書き）

次回予告
作《次回は揚羽視点でやらせてもらいます》
大《え？なんで？》
作《なんか、書いていたらそうなった》
大《そうなんだ？》
作《ちなみに、お前の番はあまりないから》
大《え、ちょっと待て。俺主人公だろう？》
作《一応な》
大《一応かよ》

Ｎｏ，１５　揚羽の思いと優燈の気持ち（前書き）

今回は揚羽視点でお楽しみください。

Ｎｏ，１５　揚羽の思いと優燈の気持ち

私はゆっくりと顔を近づいていく。
大河は覚悟を決めて眼を閉じた。
相変わらず可愛い奴だ。
私はこの時は本気で大河にキスをしようと思っていた。
しかしこの時、私はある気配を感じた。
気配からしてこれは優燈だな。
たぶん、優燈のことだから大河の昼食を持って来たんだろうな。
そして、偶然この場所に居合わせてしまった所か。優燈の為にもこれ以上は止めとくか。
「ぷ、あはははは」
私はとりあえず起き上がり、笑い声をあげといた。
「いや～、こんなに本気にするとは思わなかったぞ」
大河は驚きながら目を開ける。
「あ～、やっぱり。冗談だったんだ」
大河は冗談とわかった所で、複雑な顔をしていた。
「いや～、悪い悪い。」
「それで真面目な話で、本当に俺に何をしてほしいの？」
う～ん、明日は確か面倒なパーティがあったからそれに付き合ってもらうかな？
「そうだな、お前、明日は何か予定あるか？」
「え？明日？明日は確か土曜日だから暇だけど」
「じゃあ、明日一日だけ私に付き合え」
「なんで？」
「それは明日になったら教える」
今、教えるとつまらないからな。
「わかったよ。それじゃあ、明日そっちにいけばいいの？」
「ああ、そうしてくれ。時間はそうだな。一〇時頃になったら来て

くれると嬉しい」
そんで、来たら服を着替えさせて、パーティ会場に行こう。
「わかった」
「それじゃあ、私は戻るけど。お前はどうする？」
私は立ち上がり、大河を見下ろす。ついでにパンツもわざと見せてみた。
大河はこれでどういった反応をするのが楽しみだ。
「いつも通り。昼休みが終わるまで寝ているよ」
大河はただスカートの中を意識しないようにしているようだった。うぶな奴だな。そこがまたからがいがあって楽しい。
「わかった。授業には遅れるなよ」
私はそう言って、屋上を後にする。
「わかっているよ」
後ろからそんな声が聞こえてきた。
私は屋上を後にし、旧校舎の中に入り、階段の踊り場で止まった。
「私に対してのかくれんぼは意味がないんだから、そろそろ出てきたらどうだ？」
私がそうゆうと物陰から、サンドイッチやカツサンドが入っている袋を持った優燈が出てきた。
予想通り、大河に飯を持ってきたんだな。相変わらずこいつは健気だな。
「お姉ちゃん」
優燈は深刻そうな顔をしながら、揚羽を睨みつけてきた。
「ん？」
「単刀直入に言うけど、大河と付き合ってんの？」
う～ん、どうやらさっきの状況を見られたようだな。まあ、私はあまり気にはしないがな。
「付き合っているっていったらどうする？」
「もちろん、大河のことを諦めるよ」
優燈は静かに言った。

嘘だな。
なんせ、現にホルスターに片手が伸びているし。たぶん、私が答えた瞬間、銃で撃ってくるつもりだな。じじい共が来るのも厄介だし、ここは優燈の為にも正直に話すのが賢明だな。
「・・・・・いや、付き合ってはいないぞ」
「じゃあ、なんでキスをしたの？」
キス？ああ、優燈から見ればそう見えたんだな。
「キスなんてしてないぞ」
「嘘だ！」
優燈は大声で言ってくる。
おいおい、そんな大声出すと大河に聞こえるぞ。
「嘘なんかじゃない、本当だ。私は少しばかり大河に悪戯(いたずら)をしただけだ」
「でも、私は見たんだよ。お姉ちゃんが大河にキスするところ」
「あれはお前の方から見てそう見えただけだ。それになんだったら大河に聞いてみればいいさ。私とキスをしたのかどうか」
私は威嚇するように優燈を睨みつけた。
「そ、それは」
優燈は眼をそらしながら口を濁らす。
やはり、まだまだ精神は弱いな。
「だったら、この話は終わりだ。私は戻るぞ」
私は優燈にそう言い聞かせまた階段を降りはじめた。
「ねえ、お姉ちゃん一つだけ聞かせて」
私が優燈の隣をすれ違う習慣、優燈が私に話しかけてくる。
「なんだ？」
私は足を止め、振り向かずに話を聞いた。
「お姉ちゃんは大河のことを男として好き？」
「ああ、好きさ」
私は正直に告白した。
「私は大河を男として好きだ」

「告白はしないの？」
「告白？私が？はっ、そんなのやっても意味ないさ」
「そんなのやってみないとわかんないよ？それとも私に気をつかっているの？」
「いや、気を使っているわけではない」
「なら！」
優燈が振り向いて話しかけてくるのがわかった。
「『告白すればいいじゃない！』って言いたいのか？それは無理だよ。私にはそんな資格なんてないんだから」
私もゆっくりと振り返った。
優燈はどこかとても悲しそうな顔をしていた。
「資格？それってどういうこと？」
「いずれ話すよ。まあ、そういうことだから優燈はがんばって大河を自分の物にしろよ。なんせ、私というライバルが辞退しているんだから」
私は苦笑いしながらゆっくりと大河の頭を撫でてあげた。
「うん。がんばる。でも」
「でも？」
「大河がお姉ちゃんに告白したら受け入れてほしい」
「なっ」
優燈の思いがけない一言に私は驚いた。
「何？その驚がくな表情は？」
「いや、優燈が意外なことを言ったからつい」
「失敬な。私はいつも大河の気持ちを第一に優先しているんだよ」
いや、確実にしてないから。
「わかった。約束しよう」
「うん。約束」
「じゃあ、約束ついでに一つ、大河についてのおもしろい情報を教えてあげよう」
私はこの時、仕返しとばかりにある事を思いついた。

仕返し？誰にだろ？まあいい、大河辺りにしとこう。
「面白い情報？何？」
優燈は見事に喰いついてきた。
「じゃあ、ちょっと耳を貸してくれ」
私はそう言って、優燈に耳を傾けさせた。
「ごにょごにょごにょ」
私は優燈の耳元で囁いた。
「え？それ本当？」
「ああ、本当さ。なんだったらすぐに大河のところに行って確かめればいいさ」
「うん。わかった」
優燈は急いで大河の所に向かった。
私はそれを静かに見送った。
「さて、私も戻らないとな」
私は再び歩き出した。
『大河がお姉ちゃんに告白したらそれを受け入れてほしい』か。
優燈それは無理な話しだよ。だって私は・・・・・本当は生れてはいけなかった人間なんだよ。
でも・・・・・。
それでも、大河がの事を好きでいさせてくれ。

Ｎｏ，１５　揚羽の思いと優燈の気持ち（後書き）

次回予告
作《今回は特別ゲストとして聖純揚羽に来てもらいました》
揚《ども～、聖純揚羽です》
作《いや～、今回は大胆な行動に出ましたね》
揚《いや、あれは私にとってまだ序の口の方だ》
作《あれで序の口なんですか？》
揚《ああ、そうだ》
作《それじゃあ、本気でやるとしたらどうゆう風になるんですか？》
揚《そうだな～。とりあえず、あのまま連れて帰って私の部屋に監禁するだろ。んで、大河か感じやすいところを攻め、精神が折れる寸前まで我慢させる。そして》
作《すみません。もう、結構です》
揚《お、そうか？これからがいいところなのに》
作《いや、マジで勘弁してください。これ以上言ったら大河が可哀想になってきます》
揚《そうか。なら仕方がない》
作《それでは、そろそろ次回予告をしましょう》
揚《そうだな。次回は私のアドバイスにより、また優燈が暴走するから。よろしく》
作《結局はあんたのせいなのね》

感想などをお待ちしております。また、訳合って今週の土曜日には投降ができないので一週間後の木曜日に投稿いたします。

Ｎｏ，１６　またまた優燈の暴走（前書き）

お待たせしました。

Ｎｏ，１６　またまた優燈の暴走

キ～ン、コ～ン、カ～ン、コ～ン。
遠くからチャイムの音が聞こえてくる。
チャイムが鳴ったし、戻らないとな。
俺はそう思いながらゆっくりと眼を開いた。
そうしたら、何故か優燈が俺に覆いかぶさってずっと俺の顔を眺めていた。
「・・・・・何しているの？」
俺は思わず聞いてみた。
「大河を眺めている」
優燈は真顔でよだれを垂れ流しながら言ってくる。
そんなの見ればわかるよ。
「なんで？」
「大河の寝顔がとてもかわいかったから」
「可愛い言うな。つか、よだれ拭けよ」
後少しで俺に垂れてきそうなんだよ。
「これは失敬」
優燈はよだれを拭きとった。
「それで、なんでお前がここにいるんだ？」
「大河に購買で買った昼食を届けにきた」
それはありがたいな。さすがにクッキーじゃ足りないからな。
「ありがとう。それじゃあ、時間も時間だし教室に戻りながらそれを食べようぜ」
「うん。わかった」
「それじゃあ、俺の上からどいてくれ」
「・・・・・・・・嫌だ」
優燈は何故か拒否した。
「え？」

わかったって言っておきながら嫌だって、矛盾していないか？
「嫌だってどういうことだ？」
早くしないと授業に遅れちまうぞ。
「・・・・・姉さんが教えてくれたんだけど、大河、今すごく疲れているんだよね」
なんか嫌な予感がしてきたな。
「だから、このまま気持ちいいことしよ」
やっぱり。
「断る」
俺は優燈をどけながら逃げようとした。
「だめ。逃がさない」
しかし、優燈に手首を押さえられ逃げることができない。
「ふふふ、いつもなら私が本気を出しても大河に力負けして逃げられちゃうけど、今は疲れているから逃げられないもんね」
「くそ、姉さん優燈に余計なことを教えやがって」
戻った時に優燈に教えたんだな。
「私にとっては嬉しいことを教えてくれたよ」
優燈はどんどんと顔を近づいてきて、その気になれはすぐにでも俺の唇に重ねる距離までくる。
「大河、昨日もいったけど好き。私と付き合って」
「俺も昨日言ったが、友達でお願いします」
俺は優燈の告白を断る。
でも、優燈はそれを聞いて微笑んだ。しかも瞳に光が宿っていない。
あ、やばい、暴走している。
「言うと思った。でも、今の状況じゃあ、断って意味ないよ」
「やっぱり」
「うん。それじゃあ、いただきます」
「ちょっ、待っ、むぐ」
優燈は俺が最後まで言わないうちに、自分の唇を使い俺の口を塞

いできた。
「ん・・・・・ちゅ・・・・・」
これは、完璧にキスをされているよな。
俺がそんなことを思っていると、口内に優燈の舌が侵入してきた。
やばいっ！
俺はそれだけされまいと思っていたがもう遅い。
「んぅ、んぁ、あ、ん。・・・じゅる・・・あ、はぁ、・・ぺちゃ、んふ」
優燈は器用に舌を使い、俺の舌に絡んでくる。
「ん、ぺちゅ、・・・ちゅ、ん、ぬちゅ・・・・ちゅぱ。・・・・・ぷは」
優燈は息が続かなくなってきたのか俺から口を離し呼吸を整えた。
「大河とキスしちゃった」
「それはよかったね」
口の周りがベトベトして気持ち悪いな。
俺は人ごとのように気持ちが冷めていた。
「大河も気持ちよかったでしょ」
「いや、全然」
「なら、もっと気持ちいいことしてあげる」
優燈は俺の腕を器用に片手で押えこみ、自由になった方の手で俺の股間を触ってくる。
「い、いや、遠慮する」
俺は素直に断った。
「なんで？ここは素直に喜んでいるよ」
「頼むからそんなところを触んないでくれ」
そろそろ危ない状況になってきたな。
「んふふ。心は拒否しているけど体は正直みたいだね」
優燈はもう止まらなくなってきていた。
仕方がない覚悟を決めるか。これはあまり使いたくなかったんだけどな。

「優燈」
「何？とうとう、私としてくれるの？」
優燈は素直に嬉しがっていた。
ごめんな。
「ああ、いいよ。お前の気が済むまでしてやるよ。でも、その代わりに俺はお前のことを嫌いになるからな」
「え？」
俺がその言葉を言った瞬間、優燈は動きが止まり、喜んでいた表情がすぐに悲しみに満ちた。
「い、今なんて言った？」
「聞こえなかった？なら、もう一度言ってやるよ。俺はこれが終わったらお前のことを嫌いになる」
俺は嫌いという部分を強調、優燈に向かっていた。
「う、嘘だよね」
「本当だ」
「で、でも、大河は優しいからそう簡単に私を嫌いにならないでしょ」
さすが、長年一緒にいるだけあって俺の気持ちをわかっていらっしゃる。
「そうかもな。今の所は俺はお前のことを嫌いになれないな」
「じゃあ、」
「でもな」
優燈が嘘だと言う前に、俺は先に言葉を繋いだ。
「それは今のままの状態でいう意味であって、この後の出来事のことは含まれていない」
俺は優燈を睨みつけながら言った。
「だから、俺はお前を嫌いになることだってできる」
そして最後の止めの一言を優燈に向けた。
う～ん、言っといて思うが、良心が痛いな。
「・・・・・・・・いやだよ」

「え？」
俺が呆気にとられた声を出すと、水滴が俺の頬に付いた。
雨か？いや、それにしても空は晴れているしな。
「嫌だよ」
よく見れば、優燈はいつの間にか涙を流していた。
なるほど、水滴の正体は優燈の涙か。って、は～、やっぱり泣いたか。だから、これ使いたくないんだよな。
「大河、嫌だよ。私のことを嫌いにならないでよ」
優燈は俺の手を押さえるのを止め、俺の胸に顔を埋めて本格的に泣き始めた。
「お願い。もう、こんなこともしないし。大河のいうこと聞くからな。嫌いにならないで」
これではどちらが悪いか分からなくなってきた。
「わかった。わかった」
俺はゆっくり優燈の頭を撫でてあげた。
「優燈を嫌いにならないよ」
「本当？」
優燈は顔をあげ、涙目で俺を覗いてくる。
「ああ、本当だ。俺の意思に反して、もぅこんなことをやらなければ嫌いにならないよ」
「わかった。もう、大河の意思に反してやらない」
「うん。そうしてくれ」
俺は優燈の涙を袖で拭いてあげた。
「さて、それじゃあ教室に戻るか。だから、上からどいてくれないか？」
「その前に、一回やらない？」
こいつ、俺が嫌いにならないって解った瞬間、そうゆうことを聞いてきやがった。げんきんな奴だな。
「いや、遠慮する」
俺は素直に断った。

「ちぇ」
優燈は残念そうに俺の上からどいてくれた。
「いや、残念がるなよ」
俺は起き上がり立ち上がった。
「まあ、いい早く行こうぜ。もう授業が始まっているぞ」
「うん、そうだね」
優燈も俺に続いて立ち上がった。
「あ、そうだ。これ」
優燈はいつの間にか忘れ去られていた菓子パンを渡してきた。
「お、サンキュー」
俺はそれを受け取り、早速、食べ始めた。
「それじゃあ、行くか」
「うん」
俺と優燈は旧校舎の屋上を後にした。

Ｎｏ，１６　またまた優燈の暴走（後書き）

次回予告
作《久々の投降になりました》
大《本当に久々だな。何してたの？》
作《いや～、学校の行事に参加していて、パソコンができない状況にあったんだ》
大《ふ～ん。それは大変だな》
作《ま～ね。さすがに一週間もパソコンできないのは地獄に等しいよ》
大《それで、これからの予定はどうなっているんだ？》
作《そうだね～、とりあえずローテーションをくんでやって行きたいと思っているよ。順番は鈴、揚羽、音葉、渚、優燈の順番かな》
大《ふ～ん、大変だな》
作《それと、さらにお前を虐めていこうと思っているからよろしく》
大《全然よろしくじゃ～ね》

No，17　鈴との特訓（前書き）

お待たせしました。
あとがきに重大発表？があります。

No，17　鈴との特訓

放課後。
俺は、鈴との約束どおりに、聖純院で鈴に稽古を付けていた。
「うりゃあああああ！」
鈴が俺の顔面に向けて蹴りを放ってくる。
「外れ」
俺は簡単にそれを避ける。
「こなくそ」
鈴は次に拳を放つ。
「またもや外れ」
俺はまたかわす。
「いい加減に当たれえええええええ！」
「数が多ければいいってもんじゃないぞ」
俺は次々に襲いかかってくる鈴の猛攻をいとも簡単に避けた。
「むきいいいい、なんで当たんないのよ」
鈴は技をすべて避けられていることに対して、いらつき始めていた。
「お前の攻撃は単調すぎんだよ。だから、簡単に読まれてしまう」
「じゃあ、どうすればいいの？」
普通、俺にそれを聞くか？
「知らないねーよ。それぐらい、自分で考えろ」
「でもでも、アドバイスぐらいは頂戴よ」
わがままだな。
「アドバイスねー」
そうだな。鈴はパワーよりはどっちかというと、スピードタイプだからな。
「スピードを使いながら相手を錯乱するとか、相手より先に攻撃しかけるとかはどうだ？」

ん～、アドバイスをするのは難しいな。
「ごめん。それはもう、大ちゃんに対してやっているんだけど」
「え？そうなの？」
全然、気付かなかった。
「う～、なんだか見下されている感じがするなー」
鈴は少し涙目になりながら俺を睨みつけてきた。
「気のせいだろ。そんなことより、ほら、体も解れてきたところだしそろそろ武器ありの組手をするぞ」
「待ってました！」
鈴は嬉しそうにどこからともなく自分の武器。トンファーを出して構えた。
・・・・・前から、思っていたけど。この小説の武器使う奴らっていつもどこからだしているんだろ？
「ルールはどちらかが降参するか、気絶するまで続ける。また、俺が危険と判断した場合は即刻止めるからな」
「わかった。それじゃあ、いくよ」
俺もそれと同時に構えた。
「おし、こい」
「おりゃあああああ。先手必勝」
鈴は俺が構えた瞬間、猛攻を仕掛けてきた。
「さっきと変らないじゃん」
学習しないやつだな。
俺は呆れながらもトンファーをすべて避けていく。
「ほれ、隙あり」
そして、そのまま鈴に足払いをかけた。
「さっきと一緒にするな！」
鈴は転ばされる瞬間、トンファーの先端を地面につけ。そしてそれをそのまま軸にし、体を捻り回転して、俺に足技を浴びせてきた。
「聖純流奥義、大車輪」
「お、いいね」

俺は思わず避けることを忘れ、感心しながらそれを腕で受け止めてしまった。
「でも、まだまだかな。全然、威力が足りないよっと」
そして、受け止めた足を手で掴み、思いっきり地面に叩きつけた。
「くっ」
鈴は受け身で叩きつけられた威力を受け流す。
「どうした？もう、終わりか？」
「まだまだ」
鈴は勢いよく起き上がり、俺に挑んでくる。
「聖純流奥義、陽華（ひばな）！」
トンファーに熱を纏わせ八方向から襲ってくる。
「これは避けるのに一苦労だな」
俺は風砂でも使うか一瞬考えたけど、面倒なので受けることにした。
さっきの大車輪は威力が弱かったけど今度はどうだ？
「喰らえ！」
鈴はそのままトンファーを浴びせてくる。
しかし俺はそれをすべて受けきった。
やはり、威力が足りないな。これが今後の課題だな。
「隙あり。聖純流奥義　活火山（かっかざん）」
鈴は俺の一瞬の隙をついて、トンファーに気を纏わせ、両方とも俺の腹に打ち付けてきた。
「ぐっ」
俺はそれをまともに食らい、後ろに飛ばされて壁に激突した。
「どうよ、大ちゃん。私だって強くなったんだよ」
鈴は勝ち誇っていた。
「ああ、そうだな。強くなったな」
俺は痛みを耐えながらゆっくりと立ち上がった。
いてて、背中を思いっきりぶつけたな。
「それじゃあ、俺に一撃を入れたことだし、俺もちゃんとやるとし

よう」
「あ、やっぱり真剣にやってなかったんだ」
「当たり前だ。俺が真剣にやったらお前の一撃なんて当たんねーよ」
俺はそう言って、両手両足首のリストバンドを外した。
「言ったな。じゃあ当ててあげるよ」
鈴は俺がやる気になったことにより、トンファーを構えなおした。
「いや、それは無理だな」
俺もそれに合わせて拳を構える。
「やってみないとわかんないじゃん！」
鈴は一気に距離を詰め、俺にトンファーを振り下ろしてきた。
しかし、トンファーは俺に当たることはなかった。
「なっ」
「言ったろ、俺が真剣にやればお前の攻撃なんて当たらないんだよ」
鈴は驚いていた。確かに鈴は俺に向かってトンファーを振り下ろしてきた。しかし、そこには俺の姿がもうなかった。
「琥牙流奥義　残影（ざんえい）」
「いつのまに！」
俺はいつの間にか鈴の横に立っていて、拳を鈴の脇腹に押さえつけていた。
「お前が気付かなかっただけさ。琥牙流奥義　零距離弾（ぜろきょりショット）」
「ぐげ」
俺が技を出した瞬間、鈴は横に吹っ飛びそのまま壁に激突し、地面に倒れた。
「げっ、やべ。本気を出しすぎた」
う～ん、どうも手足首のリストバンドを外したら力加減が難しくなるな。
俺はすぐに鈴の元へ駆けつけた。
「ふにゃ～」
鈴はあまりのダメージの為、気絶していた。
「あちゃ～、これじゃあ今日は無理だな」

しょうがない、今日の稽古は終わりにするか。そうと決まれば、早く鈴を運ばないとな。

俺はすぐに気絶した鈴を担ぎ、鈴の部屋に向かって行った。

そして、後は聖純院の門下生に後は任せて、家に帰った。

No，17　鈴との特訓（後書き）

次回予告

作《さて、ここで皆様にお知らせしたいことがあります》

大《どうせ、くだらないことだろ》

作《うん、まあそうなんだけどさ。実は誰ルートにするか迷っているんだよね》

大《誰だっていいんじゃないのか？》

作《俺もそう思うけどさ。とりあえず誰かにしないと話の方向が決められないのさ》

大《感想では全員という意見もあるけど》

作《それはできれば最後に持っていきたいんだよね》

大《じゃあ、どうするんだ？》

作《それを読者に決めてもらいたいと思っているんだ。そこで、皆さんに聞きたいです。ご勝手なのはわかっていますが、皆さんは誰と大河を付き合わせたいですか？もし、意見がある人はメールか感想などでお申しつけてください。お待ちしております。》

大《ちなみに次回は？》

作《次回は前回の次回予告で言ったとおりに揚羽の話だよ。しかも、前篇、後編でてお送りいたします》

大《それは、また面倒なことをやってくれたな》

作《まあ、いいじゃん。もう、書き終わっているんだから》

大《うわ～、この人。爆弾発言している》

No，18　揚羽とパーティー　前編

土曜日
俺は約束通り揚羽姉さんと出かけてはみたものの、何故かパーティ会場見みたいな場所にいた。
周りでは金持ちそうな人たちが高級そうなスーツを身にまとい、話や食事を楽しんでいた。
どうしてこんなところにいるんだろう？
俺はというと黒いスーツを着て、飯を食いながらそんなことを思っていた。
「お、大河こんなところにいたか。捜したぞ」
後ろから揚羽に話しかけられた。
「姉さん。俺を置いていったいどこに行っていたんだよ？」
「ああ、ちょっとな。挨拶周りに行ってきた」
俺は後ろを振り向くとそこには着物を着た揚羽が立っていた。
「どうだ？綺麗だろ」
揚羽はわざとらしく俺に着物を見せびらかす。
「ああ、綺麗だよ」
「ありがとう」
揚羽は満足そうに微笑んだ。
「で、この集まりはなんなの？」
「ああ、これか。これはどこかの会社の社長の馬鹿息子の誕生日会なんだとさ」
あ～、だから、こんなにも金持ちそうな奴らばっかりなんだ。
「そのパーティーと姉さんの関係性は？」
「本当ならじじいがここに来る予定だったんだが。急に別の集まりが入ってそっちにいってしまったんだ」
「つまり、姉さんは代行役ということだね」
「まあ、それもあるな」

「俺が来た意味は？」
「一応あるにはある」
「一応かよ」
それって下手すれば俺の出番はないかもしれないと言う意味じゃないのか？
「まあ、なければないでこんなうまい飯をただで喰えたと思えばいいじゃないか」
「まあ、それもそうか」
俺はあっさりと納得した。
「これはこれは揚羽さんじゃないですか？」
俺と揚羽が話をしていると、ＳＰらしき人物を二人連れた青年が現れた。
「げっ」
揚羽はとても嫌そうな顔をした。
「この度は私の誕生日会にわざわざお越しいただき、誠にありがとうございます」
青年は揚羽を見つめながら挨拶をしてきた。
「いえいえ、こちらこそ招いていただき、とても感謝しております」
揚羽も無理やり笑顔になり、挨拶を返した。
姉さん。笑顔が引きつっているよ。
「ねえ、姉さん」
「ん、なんだ？」
「誰こいつ？」
俺のこの一言で周りの空気が一気に低くなった。
ん？俺、なんか変なことを言ったかな？
「大河。お前こいつを知らないのか？」
揚羽も驚きな隠せないようだ。
「知らない。こんな奴、見たことも無いし、見たとしても覚える気がない」
周りでどよめきが走った。

「揚羽さん。この方は？」
青年は少し笑みを引きつりながら聞いてきた。
「こいつは私の弟みたいなものだ。名を琥牙大河という」
揚羽は簡潔に俺の説明をしてくれた。
「そんで、大河。この方は今日の主役の稲葉直哉（いなばなおや）といって、稲葉製薬会社社長の一人息子だ」
へ～、社長の一人息子ね～。すごいね～。
「そうですか。初めまして琥牙大河さん。私は稲葉直哉と言います。以後お見知り置きを」
直哉はそう言って俺に手を差し伸べてきた。
「以後、お見知り置きをと言っても俺はお前に会う気はないし、会いたくもない」
しかし、俺はその手を払いのけた。
揚羽は笑いを堪えて顔を隠していた。
何がそんなに面白いのかな？
「ど、どうやら嫌われてみたいです。そ、それで揚羽さん。あの件は考えてくれましたか？」
「ん？あの件とは？」
揚羽は笑うのを止め、直哉の方を見た。
「え？わ、私と婚約する話ですよ」
「え？あれって本気だったのか？冗談と思っていた」
揚羽は驚いていた。
「冗談も何も本気ですよ」
「すまん。冗談とばかり思っていた」
「そ、そうですか。そ、それで僕と婚約してくれますか？」
「ん～、そうだな」
揚羽はそこで俺を見てきた。
なんか、すげ～、嫌な予感がするんですけど。
「こいつに勝てたら考えてもいいぞ」
揚羽は俺の腕を引き、俺の腕に抱きついてきた。

やっぱりね。
「ちょっと待ってよ。俺を巻き込まないでくれないかな」
「ということは、大河君に私が勝てたら婚約してくれるんですね」
「婚約をするんじゃない。婚約を考えると言ったんだ」
しかし、揚羽と直哉は俺の話を聞いてくれなかった。
いや、聞いてくれよ。
「解りました。まあ、そういうことなので。大河君、私と一つ手合わせをしてくれませんか？」
直哉は俺に視線を送ってきた。
「嫌です」
俺はすぐに断った。
「まあ、そうだろうな」
揚羽は俺の性格をよく知っているので納得していた。
「そこをなんとかしてくれませんか？」
直哉は喰い下がってきた。
「嫌なものは嫌です。もともと、俺に利益がありません」
「じゃあ、これなんかどうだ？」
揚羽はいつの間にか俺の携帯を握っていた。
「なんであんたがそれを持っているの？」
「まあ、気にすんな。それより、今からお前を十分やる気にさせてあげるから」
やる気にさせるどうやって？
「まず、始めにメールを開き、宛先に優燈をセットします。そして、文章に『今夜、一緒に寝てもいいよ。それから、優燈がしたいことをしてもいいよ』と打ち込みます。そして、後は送るだけ」
「ストップ！」
俺はすぐに揚羽を止めた。
「ん？なんだ？私は忙しんだぞ」
揚羽は俺に携帯を見せびらかしながら微笑んでくる。
悪魔だ。悪魔がここにいる。

「やるから。やるからそれだけは許して」
「そうか。私の為に手合わせをしてくれるか」
むしろ自分の為です。
「それじゃあ、会場を用意するのでこちらに来てください」
直哉は俺が手合わせしてくれることに対してすごく嬉しがっていた。
「へいへい」
俺はというと、もうどうでもよくなっていたので、ただ直哉に従うだけだった。

No，18　揚羽とパーティー　前編（後書き）

次回予告

作《次回は後編をお送りいたします》

大……

作……

大……

作……

大《・・・・・・あれ？今回はこれだけ？》

作（そうだよ）

大《なんで？いつも、俺をバカにすることばっかり言ってるじゃん》

作《だって、時間がないんだから仕方がないじゃん》

大《なぜ？》

作《日曜が試験で、勉強しないといけないからだよ》

大《じゃあ、投降するなよ！！》

作《だって、続きが気になる読者がいるかもしれないじゃん》

大《でも、お前って文の才能がないから読みにくいぞ。それに、この小説を待っている奴なんかいないって》

作《大河、俺が気にしていることをそれ以上言うと大変だぞ？》

大《何が？》

作《優燈と揚羽に襲わせてやる》

大（すいませんでした）

Ｎｏ，１９　揚羽とパーティー　後編（前書き）

前回の続きです。

No，19　揚羽とパーティー　後編

「え～、それではこれより。今回のパーティの主役の稲葉直哉対どこにでもいる高校生琥牙大河の手合わせをしたいと思います」
俺の説明だけ適当だけじゃないか？
パーティー会場の中心にいつの間にかリングができていて、俺と直哉はそこにいて、それを囲むように招待客が立ち並んでいた。
つか、やっぱり金持ちは違うな。あっという間にリングとか用意するんだから。
俺は自分の私服に着替え、体をほぐしながらそんなことを思っていた。
「大河―、頑張れよー」
揚羽は人ごとみたいに観戦していた。
いや、これあんたの問題だから、何勝手に他人事みたいにしているの？
「両者、前」
いつの間にか現れたレフリーが俺と直哉に指示をした。
「たく、面倒だな」
俺はレフリーの指示に従って前に出た。直哉もそれにつられて前に出てくる。
「無理を言ってすまないね」
直哉が俺と向かい合いながら話しかけてきた。
「いえ、あまり気にしないでください。姉さんの我が儘はいつものことなので」
「それじゃあ、我が儘ついでに、僕の願いも聞いてくれないかな？」
直哉は声を小さめにしながら言ってきた。
「・・・・・内容によりますね」
なんかこういう金持ちに奴に限ってくだらないことを言ってくるんだよな。

「大丈夫。簡単なことだよ。この手合わせ揚羽さんいい所、見せたいから、僕にわざと負けてほしい」
ほらね。くだらない。
「ほら、だって今日のパーティーは僕が主役なんだから、みんなして主役が勝つところを見たいじゃない。それに、これは揚羽さんが君に勝てたら僕との婚約も考えてくれるって言っているんだし、頼むよ」
「一応、聞きますけど。なんでそんなに姉さんと婚約したいんですか？」
「ほら、だってあの聖純と婚約すれば、世界的に影響力を持つということになるんだよ。それに、揚羽さんのルックスも最高だし。婚約できたあかつきには、あの体を好きにできるなんて最高だよ。な、だから、僕に負けてくれないか？」
あ、わかった。
「頼むよ。もし、引き受けてくれたなら後で、たんまりと褒美を出すからさ。まあ、でも、断るってことはないよね。もし、断ったら、君を含め君に関係する人達を災いをもたらせてあげるから」
こいつ屑だ。
「まあ、そうゆうことだから。よろしくね」
直哉はそう言って離れていった。俺もそれに合わせて離れる。
さて、あいつが屑ってわかったから、俺がやることは一つだけだな。それをやるには姉さんの許可が必要だな。
「姉さん」
「ん、なんだ？」
揚羽はセコンドーの場所にやって来た。
「飽きてこない？」
「そうだな。飽きてきたし、そろそろどこかに遊びに行きたいな」
「なら、俺にいうことはわかるよね？」
「だな。相手は可哀想だが、私達にとってそんなことどうでもいいしな。遠慮はいらん・・・・・潰せ」

「OK」
俺は両手両足首のリストバンドを外した。
「眼帯は外さないのか？」
「これを外したら、ここにいる人達の大半は気絶しちゃうでしょ」
「まあ、それもそうか」
揚羽は俺の意見に同意した。
「さて、そろそろ始めますけど。両者よろしいですか？」
レフリーが俺と直哉に聞いてくる。
「いつでも構わないよ」
直哉は構え。
「こっちもいいっすよ」
俺は構えもしないでただ仁王立ちをしているだけ。
「それじゃあ、始め」
レフリーが試合の合図を出した。
「それじゃあ、打ち合わせ通りに頼むよっ！」
直哉が俺の仁王立ちが約束を守ると受け取ったのか、いきなり俺に拳を突き出してきた。。
「ぐはっ」
しかしその瞬間、俺は拳をいなし、とりあえず顎に一発入れ、足が少し空中に上がった瞬間。
「琥牙流奥義、隕石（メテオ）」
腹を思いっきり拳で殴りつけた。
「ごほっ！」
直哉はそのまま後ろに吹っ飛び、倒れた。
周りでは揚羽意外、呆気にとられていた。レフリーでさえも何が起こったのかわかっていない。ゆういつ揚羽だけ腹を抱えながら笑っていた。
「はい、終わり。審判、早くジャッジをしろ」
「え、ああ」
レフリーはようやく俺が勝ったことに気が付き、ここで宣言した。

「しょ、勝者、琥牙大河！」
しかし、誰も歓声を上げることはしなかった。それもその筈だ。なんせ、今回の主役を簡単に倒してしまったんだから。
「さて、姉さん。行こうか」
「ああ、そうだな」
俺はリングから降りて、姉さんと共に会場を後にしようとした。
「おい、待てよ！」
そしたら、後ろから声をかけられた。
「ん？どうしましたか？」
俺と姉さんは振り返り、直哉を見た。
直哉はＳＰに支えられながら立ち上がっていて、俺達を睨みつけてくる。
お～、思いっきりやったのに、もう、起きたのか。
「約束と違うじゃないか」
直哉は怒りを表しながら俺を睨んできた。
「約束？一体何のことだ」
「とぼけんじゃねー！俺を勝たせる予定だったじゃないか！」
あー、あれのことか。
「何か勘違いしてない？俺がいつお前とそんな約束をした？お前が勝手に話していただけで俺は一度も了承なんかしてないぞ」
「なっ！」
「それにな。俺はお前みたいな権力でどうこうしようとしている奴が一番大っ嫌いなんだよ！権力ないと何にもできない坊ちゃんやろうが！」
俺がそういうと揚羽が俺の肩に手を置いてきた。
「良く言った大河」
いや、そこ褒める場面じゃないと思うんだけど。
「まあ、そういうことだから私との婚約は諦めてください。御坊ちゃん」
揚羽は直哉をさらに挑発した。

姉さん、それじゃあ、火に油だよ。
「こ、このくそガキ共っ！」
直哉は顔を赤くした。
「もういい。お前らこの二人を逃がすな」
直哉が指示を出した瞬間、ＳＰ達が俺達を囲んだ。
「どういうつもりだ？」
俺は直哉を睨むと直哉は俺達を見下すように見てきた。
「そのままの意味だよ。悪いが、揚羽さんとは無理にでも婚約してもらうよ。そして、そこのクソガキには地獄のような人生を味わさせてやる。それと、お前に関係する人物全員にもだ。あ、でも、揚羽さんが婚約した後、一生俺に尽くしてくれるなら話は別かな？」
「屑だな」
俺の怒りは頂点に達していた。
「ああ、そうだな。屑だな。こっちが下手に出れば大きく出やがって」
姉さんに至っては怒りどころか、それを通り過ぎて呆れていた。
「姉さんがやる？」
俺はＳＰを見回しながら聞いた。
「いや、この格好だと。動きにくいからお前がやれ」
あ、そっか。姉さんは着物なんだっけ？
「わかった」
「それと、眼帯を外してもいいぞ」
「いいの？」
「ああ、いいぞ。私の分までこいつらに地獄を見せてやってくれ」
「わかった」
俺は左の眼帯を外し、ゆっくりと左目を開けた。
そして、その瞬間、このパーティー会場は地獄と化した。

三十分後。
「あ～、久々にやったから疲れた」

「やはり、一ヶ月に一回はガス抜きをしないといけないな」
俺と姉さんはパーティー会場があったビルの近くを歩いていた。
「そうだね。この頃、さぼり気味だったから力の調整が難しかったよ」
「いいじゃないか。暴走だけはしなかったんだから」
「まあ、それもそうだね。それよりこれからどこに行こっか？」
「そうだな。とりあえず聖純院に戻って着替えるか。それから、どこかに遊びに行くことにしよう」
「うん。そうだね」
こうして、俺と姉さんはまず聖純院に戻った。そして、その後、着替え終わった揚羽と一緒にゲーセンとかに遊びに行った。

一方、パーティー会場ではいろんな場所にＳＰ達が倒れており、リングでは直哉がカタカタと「ば、化け物」と呟きながら下半身から液体の物を流し、震えていた。

Ｎｏ，１９　揚羽とパーティー　後編（後書き）

次回予告
作《次回は音葉の出番です》
大《お、やっと後輩の話か》
作《ちなみに、存在自体忘れかけてました》
大《それってちょっと可哀想じゃない？》
作《まあ、いいんだ》
大（いいのかい）
作《ちなみに、大河にも異変があるからよろしく》
大《え、俺どうなっちゃうの？》
作《それは次回のお楽しみ。ちなみに次回は今日中にアップします》

Ｎｏ，２０　幼児化と映画と薬（前書き）

宣言通りにアップしました。

No，20　幼児化と映画と薬

日曜日の朝。
「ん～、どうしよう？」
俺は起きてからずっと鏡を覗きながら悩んでいた。
「そういえば、この三日間。気を使いまくったからな」
そんで、昨日の奴が決め手になったな。どうりで暴走しないわけだよ。
「まあいいや、とりあえず眼帯しよう」
俺は左目に眼帯を取り付けた。
コンコン。
「大河さん。入ってもよろしいですか」
ちょうど、その時、音葉がノックしてきた。
「ああ、いいよ」
「失礼しま」
音葉は扉を開けながら固まってしまった。
やはり、固まってしまうか。
「え～と、君。どこから入ったの？ここは大河さんという人のお部屋だよ」
「いや、本人だから」
「え、でも、子供になっていますよ」
そう、俺は朝起きると子供になっていたのだ。
鏡を見るからに小学一年生くらいだろう。
「おう、なっているよ」
「えええええええええ！」
音葉は驚きを隠せていない様子だった。
あ～、やっぱり驚くか。さて、どこから説明しようかな？
俺はそんな音葉をみながらそんなことを思っていた。

「え～と、要するに気を全部使ってしまって、その体になってしまったということですか？」
「まあ、簡単に言ってしまえばそうゆうことだな」
俺と音葉はリビングでテーブルに向かい合いながら席に付き、お茶を飲んでいた。
ちなみに、俺は上に半袖、下に短パンを履いていた。こうでもしないと着る服がない。それどころか、今、着ている物でさえ大きいくらいだ。
「元に戻るんですか？」
音葉は心配そうな表情をしながら聞いてくる。
「ああ、気が溜まればすぐにでも戻る。まあ、それには二、三日必要だけどな」
「そう、それはよかった」
音葉は一安心したみたいだ。
「それじゃあ、この話は終わりだ。それで、俺になんの用事だ？」
「え？」
「え？ってお前。俺に用事があるから俺の部屋に来たんじゃないのか？」
「あ、そういえばそうでした」
俺のこの格好を見て忘れていたな。
「実はこれなんですけど」
音葉は二枚の紙をテーブルの上に出してきた。
「チケット？」
「はい。映画のチケットです。今日、本当は友達と行く予定だったんですけど、その友達に急用ができて行けなくなっちゃたんですよね。それで、もしよければ一緒に行きませんか？」
「俺と一緒に映画？」
「はい。駄目でしょうか？」
音葉は寂しそうな顔になった。

「いや、それはいいんだが。一緒に行くなら俺より優燈達の方がいいんじゃないのか？」
「優燈さんは銃の弾を買いに親の所に戻るそうです」
あ～、だから、珍しく朝起きても何も無かったんだ。
「渚は？」
「渚さんは鈴さんの相手をすると言って朝早くから出掛けました」
ん～、だったら姉さんも無理だろうな。
「龍はバイトだし、直斗は？」
「直斗さんは、今日は大事な打ち合わせがあるといってパソコンの前から離れません」
情報収集に手間取っているのかな？
「そんで、最後に俺のところに来たと」
「はい。そうですか。あの迷惑でしたか？」
「いや、全然。どうせ暇だったし」
でも、少しでも早く元に戻りたかったから寝て気を溜めようと思っていたんだけどな。まあいいか。
「それじゃあ、時間も無いことだし早く着替えて映画を見に行こうぜ」
「そうですね」
俺と音葉はさっさと準備をして、映画に行った。

「面白かったですね」
「そうだな。とくにあの最後のシーンは迫力があった」
俺と音葉は映画を見終え二人で街中を歩いていた。
「今日は付き合って頂いてありがとうございました」
「いや、お礼を言われるほどじゃないよ。俺も楽しかったし」
「それは良かったです」
俺と音葉はお互い笑いあった。
「ねえねえ、彼女、今暇？」

そしたら、典型的なセリフで声を掛けてきた長髪の男がいた。
「もし、暇だったら俺と今からお茶しないか？」
長髪は音葉の体を見定めながら聞いてくる。
よくいるよね、こういう奴。自分のことをかっこいいと思うナルシストが。
「付添（つきそい）もいるのでお断りします」
音葉はためらいも無く断った。
「付添？」
長髪は周りを見回し、俺と眼があった。
こいつ、俺の事が見えてなかったな。
「何？君、弟？」
長髪は俺に向けて愛想よく声を掛けてくる。
「音葉、こいつ潰していいか？」
まあ、身長が身長だから、そう見られても仕方がないけどさ。目の前で言われるとムカつくな。
「だめですよ。大河さん。私がなんとかするので落ち着いてください」
音葉は慌てながら、俺を止める。
「何、君、弟じゃないの？」
「弟じゃありません。この人は私の先輩です」
「先輩？」
長髪は疑いながら見てくる。
「じゃあ、先輩。邪魔だから消えてくれない？」
そして、邪魔そうに手を振りながら言ってくる。
「潰す」
俺はにっこりと笑いながら、最初に長髪の股間を殴った。
「ぐおっ！」
長髪は激しい激痛により、股間を押さえながら前屈みになった。
う～ん、やはり男に対してこれは禁じ手だな。やっておいてなんだか可哀想に思えてきたが、まあ、いっか。

俺は悪そびれもなくそのまま相手の顔面に向けて飛び膝蹴りをする。
こうしないと、顔面まで届かないし、結果オーライということで。
「ぐほ」
男はそのまま仰向けに倒れた。
「た、大河さん。なんてことをするんですか」
音葉はやはり慌てていた。
「だって、こうでもしないと身長的に顔面に届かないんだもん」
「それでも、丁寧に断るやり方だってあるかもしれませんよ」
「あー、無理無理。こうゆう相手は　何を言っても自分の事しか考えないから。それだったら早く片付けた方がいいだろ」
「でも、あれは反則すぎます」
音葉は顔を赤くしながら言ってくる。
「ん、俺もそう思う。あれは男に対して一番やってはいけない技だ」
「だったら、やらないでっ、きゃっ！」
「へへへ、なんだか知らないけど上玉ゲット」
突然、坊主頭でラインが入ってる青年が音葉を後ろから取り押さえた。
「え、ちょっと、何ですか？」
音葉は慌てて後ろを向こうとしたが
「おっと、こちらを向かない方がいいぞ」
坊主はいきなりナイフを出して、音葉に見せながら脅した。
こうゆう光景どこかで見たことあるな。
「あー、お前。そこで気を失っている金髪の関係者」
俺はいたって冷静に坊主に話しかける。
「ああ、そうだ」
「その関係者が何か御用で？」
「友達がやられたんだから、その敵(かたき)を取らないといけないだろ？」
おー、なんという友達思いなんだろ。でも、俺に対してはすごく迷惑なんだけどね。

「音葉、今日は夕飯を買わないといけないから、さっさと行くぞ」
坊主を相手にするのが面倒な俺は音葉に指示を出し、坊主を無視して先に歩き出した。
「おい、何を言っている？女は俺が取り押さえているだろ？」
坊主が意味もわからず、取り押さえている音葉を見る。しかし、そこには取り押さえていたはずの音葉はいなくて、代わりにさっき俺が倒した金髪がいた。
「大河さん、ちょっと待ってくださいよ」
音葉はというと、急ぎながら俺の後を追いかけて来ていた。
「おいっ！ちょっと待て！」
坊主は俺達を呼び止めようと大きな声で叫んでくる。
「大河さん。なんか叫んでいますよ」
「気にするな。相手にするだけで面倒だ。ところで今日の夕飯は何にしようか？音葉、何かリクエストあるか？」
「えっと、じゃあ、カレーライスがいいです」
「カレーかー」
簡単で美味いし、たまにはいいかもな。
俺達は坊主を無視しながら歩いていく。
「無視するんじゃねー！」
坊主はその態度にムカついて俺達に襲いかかってくる。
「音葉」
「はい」
俺が音葉の名前を呼んだら、音葉は俺の意図を理解し坊主の攻撃を避けた瞬間、相手の首筋にめがけて、どこからか出した針を刺した。
「がっ」
坊主は針を刺された瞬間、体を痙攣させながら倒れ、そのまま動かなくなった。
「音葉、何の薬を針に塗った？」
俺は冷静になりながら、坊主を見下ろした。

「即効性の痺れ薬なんですけど。この薬、新しく作ったのでまだ効力は人には試していなかったんですよね」
「今、新薬使うなよ」
「すみません。今ある薬っていったらこれだけだったので」
「まあいいや、さっさと買い物に行くぞ」
「そうですね」
俺と渚はその場に尊い犠牲者をその場に残し、その場を去った。
「念の為、こちらにも刺しておきましょ」
と思いきや、渚はその場に戻って来て、金髪の方にも針を刺した。
「おい、置いてくぞ」
「あ、待ってくださいよ」
渚はそう言ってその場を後にした。

Ｎｏ，２０　幼児化と映画と薬（後書き）

次回予告

作《次回は渚がでます。今日はここまで》

大《短いな》

Ｎｏ，２１　特訓と夕ご飯（前書き）

お待たせしました。
感想などをお待ちしております。

No，21　特訓と夕ご飯

火曜日。
俺はいつの間にか暗闇の中にいた。
「お・・・・が・・・・ろ・・・・」
そしたら暗闇の中で誰かの声が聞こえてきた。
誰だ？
俺は不信に思ったが暗闇から出る気はさらさらなかった。
「いい加減に起きろおおおおお！」
「痛っ！」
次に大きな声と共に頭に衝撃が襲ってきた。
「誰だよ。俺の安眠を妨害する奴は？」
俺は叩かれた部分を押さえながら、顔をあげた。
そして、眼の前にいたのは何故か、ハリセンを肩に背負った渚だった。
「おはよう、大河。いや、今は放課後だからこんにちはが正しいのか？」
渚は俺を見下ろしながら聞いてくる。
「・・・・・・・おやすみ」
俺はまた腕を枕にして、寝ようと試みた。
「起きろって！」
また、ハリセンで叩かれた。
「・・・・・・なんか用か？」
俺は頭を押さえながら聞く。
「ああ、私に稽古をつけてくれないか？」
何を言っているんだこの人は？
「それって俺の状態を見て言っているのか？」
俺はまだ気が溜まっておらず、小学生体系だった。
「大丈夫だ。稽古を付けてくれと言っても、ただ単に気を練る練習

だけだから」
「なら一人でもできるじゃん」
そんなことの為に俺を起こしたのか？
「いや実の所を言うと、私は気を扱うのが下手なんで。私が気を扱う時に、それを見てアドバイスがほしいんだ」
「それなら、姉さんや鈴に頼めば？あの二人の方が俺より気を使うのが長けてるぞ」
俺はせいぜい、気を体に纏わせ体の強化することや爆発することしかできないからな。
「私もそう思い、先週の日曜日に鈴の手合わせをしに、行った時に聞いてみたんだ。そしたら、揚羽さんが『そうゆうことは大河に聞くのが一番手っとりばやいぞ』って言っていた」
あー、姉さんならいいそうだな。
「ちなみに、鈴は『あたしはただガムシャラにやっているだけだから、わからないや』とほざいていたぞ」
鈴、お前はいい加減ガムシャラにやらなくても使えるようになろうね。
「だから、頼む。私の稽古に付き合ってくれ」
渚は手を合わせながらお願いしてきた。
「わかったよ。アドバイスだけならしてやるよ」
「本当か？」
「ああ、ただし、後一五分だけ寝かせてくれ」
俺はそう言って寝ようとした。
「何を言う？今すぐに決まっているだろう」
渚は俺の荷物を持ち、制服の襟を掴み、俺を服ごと持ち上げた。
「ほら行くぞ」
そんなことをいいながら渚は俺を引きずって教室を後にした。
俺は移動が楽な為、移動の間は寝ていることにした。

俺と渚は一番初めに出会った公園で稽古を始めようとしていた。
「それじゃあ、そこで見ていてくれ」
渚は木刀を構えながら、俺に言ってくる。
「へいへい」
俺は適当に返事を返しながら、ベンチに横になっていた。
「ふぅぅぅぅぅぅぅ、はぁぁぁぁぁぁぁ、では、いざ」
渚は深呼吸をし、集中力を高めると気を扱う練習を開始した。
俺はそれを静かに見守りながら、時計を見ていた。
「一の太刀、風花」
渚は気を木刀に纏わせ技の練習を始めた。
「二の太刀、陽炎」
今の所、順調だな。
「参の太刀」
渚が次の技を出そうとした瞬間、木刀に纏っていた気が消えてしまった。
気を纏える時間は約一分か。これは鈴より早いな。
「くそ、また消えてしまったか。大河、お前から見てどう思う」
「とりあえず、気を纏う時間が短いというのがわかったよ」
鈴より早いのは驚きだな。
「仕方がないだろ、これだけはいくら練習しても長くはならないんだから」
「いや、練習の前よりお前はきちんと使いこなしていないから」
俺が答えると渚は驚いていた。
「そ、それってどういうことだ？」
はー、初歩から説明しないといけないのか面倒だな。
「ん～と、実際に見せた方がいいのかな？」
俺は起き上がり鞄から適当な紙を二、三枚出し、その一枚を棒状にした。
「聞くけど、もし、今お前がその木刀で俺を殴りかかり俺がこれでガードしたらどうなる」

「そりゃあ、紙が折れて木刀が大河に当たるだろ」
「それじゃあ、これだとどうだ？」
俺はそう言って、紙に気を纏った。
う～ん、この姿でやるのは少しきついな。
「そりゃあ、さっきと同じで紙は折れるだろう」
「じゃあ、試してみ？」
俺は気を纏った紙の棒で頭を持ってきた。
「いいのか？」
「モチロン。あ、でも、木刀に気は纏わないでね」
「わかった。おりゃあああ」
渚は躊躇いも無く、俺の頭に木刀を振りおろした。
「なっ」
その瞬間、渚は驚いた。
「すごいだろ？気をきちんと使えればこんなこともできるんだぞ」
俺は渚の木刀をいとも簡単に紙の棒で防いでいた。
「ほら、今度はお前がやってみろ」
俺は新しい紙を渚に渡した。
「わ、わかった」
渚は紙を受け取り筒状にし、それに気を使ってみた。
「なっ、全然纏えない」
しかし、紙の棒には何も起きなかった。
「これでわかっただろ。お前は気をきちんと扱えていないんだ」
「なんでだ？木刀は纏えたというのに？」
「その木刀って聖純院のか？」
「ああ、そうだ。こっちに持ってきたのはお前に折れられてしまったからな」
あ～、そんなこともあったね。
「だから、事務員の人にどこで木刀が買えるかって聞いたら、聖純院の物を分けてやるって言ってくれたんだ」
じいさん。勝手に聖純院の物を分けるなよ。

「一言言うけど、聖純院の武器は気を纏いやすくできているんだぞ」
「何、それは本当なのか？」
「ああ、だから少しでも気を流せば簡単に気を纏うことができる」
「そ、そうなのか」
渚は落ち込んだ。
「まあ、とりあえず。気を使いたいならその紙に気を纏えるようにしないとな。さて、俺はそろそろ夕飯の準備があるから行くけど、お前はどうする？」
「・・・・・・」
渚はそうとうショックの為か何も喋らなかった。
無視か。まあ、いいや。
「それじゃあ、俺は行くからな。夕飯はいつも通りの時間だから遅れるなよ」
俺は渚をほっといて荷物を持って帰ろうとして歩き出した。
「待ってくれ」
しかし、いきなり渚に襟を掴まれてしまった。
「何？」
「私に、そのなんだ」
「言いたいことがあるなら早くしろ」
こっちは晩御飯の買い物をしないといけないんだから。
「気の使い方を教えてくれないか？」
「嫌だ」
俺は渚の願いをすぐに断った。
「な、何故だ？」
本音は面倒なんだよね。でも、それを言えば絶対怒るからな。なんていよう？
「俺は人に教えるのが下手だから」
べたな嘘をついたもんだな。
「それでもいいから教えてくれ」
「あー、俺よりも優燈や姉さんに方が教えるのは美味いぞ」

「優燈はお前にしか懐いてないし、揚羽さんは頼んだところで、どうせ大河に頼めというだろ」
うん。いいそうですね。
「だからな。頼む私に教えてくれ」
渚は俺の肩を掴み揺らし始めた。どうみても、これは小学生を虐めている高校生にしか見えない。
「よ、酔うから止めろ」
俺は首を揺さぶられて眼が回ってきた。
「お前が教えてくれるというまで、止めぬ」
うわ～、ガキだこいつ。
「わ、わかったから、教えるから。教えるから止めてくれ」
「おし、やっと言ったか」
渚は肩を揺らすのを止めてくれた。
うわ～、気持ちわり～。やっぱり、子供のままだといろいろと減るからだめだな。
「おし、それで何からやればいいんだ？腹筋かそれとも腕立てか？」
なんで、筋トレばかりなんだよ？
「いや、気を扱うのにそんなのはいらないんだよ」
「じゃあ、何からやればいいんだ？」
「そうだな。とりあえず」
グ～。
どこからともなく音が聞こえた。
俺が音の根源を調べようと当たりを見回すと、渚が顔を赤くしながらお腹を押さえていた。
「急いで晩飯の準備をしないといけないみたいだから、スーパーに材料を買いに行こうか」
俺がそうやって提案すると、渚はコクコクと頷く。
「それじゃあ、行くぞ」
俺は歩き出すと、渚はまだ顔を赤くしながら静かに俺の後ろに歩いてくるだけだった。

「すまない」
渚からそんな呟きが聞こえてきた。
「何のこと？」
俺はとりあえず聞かなかったことにしといた。

Ｎｏ，２１　特訓と夕ご飯（後書き）

次回予告
作《次回は優燈の番だな》
大《そんなことより、俺はいつになったら戻るんだ？》
作《それは次回になったらわかるよ》
大《お前。戻す気ないだろ？》
作《ナンノコト？》
大《その言い方がムカつくな》
作《まあ、そんなことより。そろそろ、誰ルート行くか決めないとな》
大《作者的には誰ルートにしたいんだ？》
作《俺か？俺は今んところ頭の中にあるのが、鈴か揚羽か優燈かな？》
大《幼馴染三人集で来たか》
作《うん。たぶん三十話あたりから入っていくと思うよ？区切りもいいし》
大《そうか。それは楽しみだな》
作《まあ、でも、どの娘になってもお前は確実にボロボロにするから楽しみにな》
大《全然たのしみじゃねえええええ！！！》

Ｎｏ，２２　あの方法と添い寝（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年も楽しく読んでくれたら嬉しいです。

No，22　あの方法と添い寝

キーンコーンカーンコーン。
授業終了のチャイムが鳴りだし、みんなの緊張が一気に解けた。
「あ～、よく寝た」
「龍、お前は寝すぎだ」
一時間目からずっと寝ていたよな。こいつ。
「まあ、気にすんな」
いや、気にしろよ。
「しかし、お前まだ戻らないのか？」
龍が体をほぐしながら、俺を見下ろしてきた。
「そうみたい。今回は長引くよ」
そうなのだ。小さくなってからもう三日以上は立っているのに、俺の体系はまだ戻ってはいなかった。
「もう、いっそうの事、優燈にあれを頼んでみたらどうだ？」
「中学校までならいいとして、今の年で優燈にあれを頼むとしたら、自分の貞操の危機になるからやりたくないんだよね」
マジ、今にあれをやると逆に喰われてしまう。
「呼んだ？」
俺の後ろから優燈が現れた。
「いや、呼んでないから」
あ、つか、何かと抱きついてくるな。くそ、本当なら簡単に逃げれるのにこの姿だから逃げられない。
「実は、大河の姿がまだ戻らないって話をしていたんだよ。だから、優燈にそろそろあれをやってもらえばって言う話をしていたんだ」
「ちょ、バカ龍」
何を教えているんだよ！
「いいじゃね～か、その格好は何かと不便だし、それにお前もそろそろ戻りたくなってきただろ？」

「まあ、そうだけどさ」
「でも、私は一生この姿でもいいと思うんだけどね」
優燈は人の頭の上によだれを垂らしながら微笑んでいた。
やばい、背中に寒気を感じる。
「おい、人の頭によだれを垂らすな」
あ～、帰ってすぐにシャワーを浴びないと。
「これは失礼」
優燈は袖でよだれを拭きとった。
「でも、そろそろ大会も近くなってきたし、戻らないとまずいぞ」
それもそうだよな。しょうがない、腹をくくるか。
「優燈」
「何？」
「今日の夜にあれをやるから付き合ってくれないか」
「もちろん、いいよ！」
すごい元気な返事だな。しかも、その嬉しそうな笑顔が妙にムカつくな。
「龍。説得ありがとう」
「どういたしまして。そんなことよりも後で例の物を頼むよ」
「解っているよ」
優燈と龍は隅っこで何やら密談をしていたのは見なかったことにしとこう。

その夜。
俺と優燈は今、俺の部屋にいた。
さて、あれをやることになったものの気が進まないな。
「ねえ、大河～早く～」
優燈は今か今かと待ち切れていない様子だし。
「はいはい」
俺は眼帯を外し優燈に手を差し出した。

優燈はそれを優しく握り、眼をつぶった。
「それじゃあ、いくぞ」
「いつでもいいよ」
俺は握られている方の手に気を集中させ、その気を優燈に送り込んだ。
「・・・あん・・・・・ん・・・き、きたよ・・・・・ん、た、大河のが、んふ、私のな、ああっ、かに入ってきた」
優燈は息を荒くしながら言ってくる。
「頼むから変な声出さないでくれる？」
気が散って集中ができない。
「で、でも、大河のって・・・・ん・・・感じちゃう・・・・んだもん」
「あ～、もう、いいから早く俺にも気を送ってくれ」
そうしないと、俺もやばくなってくる。
「わ、わかっているよ」
優燈は俺の手に気を送り込んできた。
おし、気が溜まってきた。
今、俺達がやっているのは、自分の気を優燈に送り、その気を優燈の中で増加させ、その増加した奴を自分に送らせるということをやっている。
これをやるとすぐに気が溜まり、体が元に戻るのが早くなる。
なら、最初からやれよと思うだろうが、俺はあまりこれをやりたくない。何故かと言うと。
「ああ、大河の気持ちが伝わってくるよ」
「俺にも優燈の気持ちが伝わってくるよ」
私は大河が好き。好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き好き。大好き。
と、まあ、こんな感じで相手の気持ちが自分に流れてきたり、自分の気持ちが相手に流れてしまうからあまりやりたくない。
「私はやれて嬉しいよ」

優燈は嬉しそうに微笑んでくる。
「人の心をあまり読まないでくれる？」
「しょうがないでしょ。流れてくるんだから」
まあ、そりゃあそうか。
「うん。そうだよ。それで、後何分このままの状態なの？」
「う～ん、約十分かな？」
「後十分もこのままの状態なんだ。嬉しいな」
俺はもはや何も言う気はなかった。
それから、十分後。
「よし、そろそろいいかな？」
俺は気を収め、優燈から手を離し眼帯をした。
「ふぅー、疲れた」
「お疲れ様」
俺は優燈の頭を優しく撫でてあげる。
「んー」
優燈は眼をつぶり嬉しそうにしてくる。
「さてと、気も溜まった事だしそろそろ寝るかな」
「ねえ、大河」
「ん？」
「一緒に寝てもいい？」
やはり聞いてきたか。
「変なことをしなければいいぞ」
「えっ、いいの？」
優燈はまた断られるだろうと思っていたらしく、驚きを隠せなかったようだ。
「一応、今日のお礼だ」
「うん。わかっているよ」
「なら、さっさと準備して来い」
「わかった」
優燈はすぐに自分の部屋に戻って行った。

「さて、俺も準備するかな」
俺もすぐに布団と用意をし、睡眠用の服に着替えた。
「大河、お待たせ」
優燈はいつも着ているパジャマに着替えてきて、すぐに俺の布団の中に入った。
行動早いな。
「早く寝よ」
「へいへい」
俺は優燈に促されて、さっさと電気を消して布団の中に入る。
「大河、暖かいよ」
優燈は俺に抱きついてきた。
「俺は暑苦しい」
俺はそう言っておきながらも、抵抗だけはしなかった。しても、良いんだがこの体系だと逆に返り討ち合うのでやらないでおく。
「自分から誘ってきてそうゆうことは言うもんじゃない」
「誘ったのはお前だろ、俺は了承しただけだ」
しかも、変なことをしないという条件付きで。
「うん。でも、珍しいこともあるんだね」
「何が？」
「いつもは、イヤイヤと了承するのに今回はすんなりと許可してくれた」
「たまにはいいだろ」
「私的に毎日でもいいよ」
「それはそれで疲れるから嫌だ」
本音を言うと絶対、襲われるから嫌だ。
「さて、そろそろ眠くなってきたし寝ようぜ」
「うん。おやすみ」
「ああ、おやすみ」
優燈はそのまま眼をつぶり、俺も続けて眼をつぶり夢の中に落ちて言った。

Ｎｏ，２２　あの方法と添い寝（後書き）

次回予告
作《あけましておめでとうございます。２０１０年始めの投降です》
大《始めは優燈でいいのか？》
作《だって順番なんだから仕方がないじゃん》
大《そりゃあ、そうか》
作《次回は鈴の話をします》
大《みなさん楽しみにしていてください》
作《感想、お便りお待ちしております》
大《これからもよろしくお願いします》

No，．２３　安らかな眠りをこの子に　前編

辺り一面、闇に包まれていた。
痛いよ。
熱いよ。
苦しいよ。
あたしは幼い姿になっていて、その中で傷だらけで丸くなっていた。
お父さん。
お母さん。
どこに行ったの？
あたしはここにいるよ。
だから、早く迎えに来てよ。
あたしはその闇に脅えながらも両親が来ることを信じていた。
「・・・・・どこだー」
遠くから声が聞こえてくる。
お父さん？お母さん？
ここだよ。あたしはここにいるよ。
あたしは声にならないが思いっきり叫んだ。
そしたら、誰かがあたしに近づいてくるのがわかった。
「おお、・・・・・ここにいたか。捜したぞ」
「もう、・・・・・だめよ。勝手にいっちゃあ」
声は私の真上から聞こえてきた。
お父さん。お母さん。やっぱり来てくれたんだ。
あたしは嬉しくなり顔をあげた。
しかし、それはすぐに絶望と変った。
そこにいた筈の、お父さんとお母さんは血だらけで至るとこに穴が開いており、そこから血などが出ていた。
「い、いやあああああああああ！！！！」
私はそこで目をさました。

「はあ、はあ、はあ」
目を覚ますといつも見慣れている天井があった。
「夢？」
起き上がり周りを見回す。
いつも使われていない机。学校の制服。古びた筋トレ道具。
ここは確かにあたしの部屋だ。
「そうか。もう、そんな時期なんだ」
あたしは寝汗を腕で拭きながらそう思った。
また、あの夢か。最近は見ていなかったのにな。
時刻を確認するとまだ夜中の三時過ぎ。
もう一度、寝ようと思ったがまたあの夢を見ると思うと怖くて眠れない。
「しょうがない」
私は最終手段として、複数の写真立てがあるところから一番古い写真を挿んでいる写真立てをとり、その古い写真を取った。
この写真は私に、物心がついた時に幼馴染の少年と一緒に撮った写真である。
あたしはその写真を枕の下に隠し、また眠りについた。
これで、少しはいい夢が見られるかもしれない。
「おやすみ。大ちゃん」
あたしは幼馴染で少年の名前を呼んで夢の中に落ちていった。

「やっぱり、朝の散歩は気持ちいな」
俺は朝から外を歩き回っていた。
元の姿に戻って、三日が経過している。
俺はこの三日間、体の感覚を戻す為に朝から運動していた。
う～ん、だいぶ感覚が戻ってきたみたいだな。この調子だと来週

の月曜辺りからほとんど動けるようになるな。
そう、思いながら散歩コースになっている公園を訪れた。
チリーン。
すると、遠くから聞き覚えがある鈴(すず)の音が聞こえてきた。
「朝早くから、あいつがここにいるのは珍しいな」
俺は音が聞こえる方に行くと案の定、そこには鈴(りん)がいた。
「おはよう、鈴」
「ひぃ」
鈴は何かに脅えるように突然振り向いた。
「て、あ、大ちゃんかおはよう」
しかし、俺だとわかるとすぐに冷静になった。
・・・・・おかしいな。
俺はすぐに疑問に思った。だって普通なら、鈴は俺が声をかけなくてもすぐに匂いで相手が解るし、何より何かに怯えるということはまずありえない。
「もう、いきなり声をかけたから驚いたよ」
「ああ、それは悪かったな」
俺から見れば驚いたより怯えたって風に見えたけどな。・・・・・ん？怯えた？まさか。
「それよりさ、一つ聞きたい事あるんだがいいか？」
俺は鈴の様子からある考えに至って質問することにした。
「うん。いいよ。何？」
「お前、またあの夢見たんだろう？」
「あ、あの夢？一体何の事を言ってんの？大ちゃん？」
こいつはまたとぼける気だな。
「とぼけるな。お前と何年一緒にいると思っている。お前の嘘ぐらいすぐにわかるよ」
「う、嘘なんてついてないよ」
鈴は俺から顔を逸らし、髪をいじり始めた。
「お前は知らないだろうけど、お前が嘘を言っている時は大抵、髪

を弄っているんだぞ」
「マジ？」
鈴はすぐに髪をいじるのを止めた。
「マジ。たくっ、他人を巻き込ませたくないのはわかるが、俺ぐらいには相談してほしかった。ガキだった頃からの付き合いなんだしな」
俺は鈴に近づき、鈴を撫でてあげた。
「うん。ごめん」
鈴は落ち込んで下を見ていた。
「それで、またあの夢を見始めたと考えていいんだな？」
「うん」
「いつから？」
「三日前」
三日前か俺がちょうど戻った頃だな。
「つ～ことは、三日前からあまり寝ていないと考えていいんだな？」
「うん。三日前にあれを見始めてからは寝ても二、三時間で起きちゃう」
「そうか、わかった」
なら、先にこいつに十分な睡眠時間を与えないとな。
俺は考えて、すぐに実行に移す。
「おい、鈴。今から俺の所に来い」
「え、なんで？」
鈴は不思議そうにしていた。
「お前にきちんと睡眠を取らせるためだよ」
「え、でも」
鈴はまたあの夢をみるのではないかと恐れているようだ。こうゆうところは昔から変わってないな。
「大丈夫。俺が近くにいてやるから」
「本当？」
「ああ、本当だ」

「わかった。大ちゃんを信じる」
鈴は頷き。そうして俺は鈴を寮に連れて帰った。
寮に連れて帰ってすぐに、俺は鈴を自分の部屋に連れて行き、布団をしいて鈴を寝かせた。
「ねえ、大ちゃん。やっぱ寝ないとだめ？」
「ああ、だめだ」
「でも、全然眠くないんだけど？」
「眠くなくても、目をつぶれは勝手に寝るから」
「で、でも」
鈴は何かと理由を付けては寝ようとはしなかった。
「でもじゃない。ほら、手を握っていてもいいから早く目をつぶれ」
「ありがとう」
俺は鈴に手を差し出すと、鈴はお礼を言いながら、それを強く握るとすぐに目をつぶった。
「す～、す～」
そうすること一分。鈴はすぐに寝息を立てていた。
眠れないって言って置きながら、寝るの早いな。
「まあ、いいや。早速、俺も作業に取り掛かろう」
俺は目をつぶり集中を始めた。そうしていると、鈴が握っている方の手から鈴に向かって、気が注ぎ込まれていく。
「今、良い夢を見せてやるからな。鈴」
俺は、いつもは強がっているけど本当は寂しがり屋で泣き虫の幼馴染に向かって言い、気を集中することに専念した。

Ｎｏ，．２３　安らかな眠りをこの子に　前編（後書き）

次回予告
作《次回は後編に入ります》
大《ところでさ、誰ルートでいくか決めたの？》
作《大まかなところは考えが出来て来ているよ》
大《へ～、それじゃあ、誰ルートなの？》
作《それは次回のお楽しみ》

Ｎｏ，２４　安らかな眠りをこの子に　後編

「ここどこ？」
私は幼い姿で闇の中をひたすら歩いていた。
「お父さ～ん。お母さ～ん」
どこに行ったの？早くあたしを迎えに来てよ。
周りでは闇が続くばかりで一向に誰とも会わないし、どこにいるのかもわからない。
「歩くの疲れちゃった」
あたしはその場に座り込んだ。
「なんで、誰もいないんだろう？私はずっとこんなところで独りぼっちなのかな？」
そんな事を考えていると、段々と涙が流れてきた。
「早く誰か来てよ。寂しいよ」
涙がどんどん流れてくる。もう、自分でも押さえられない。
「おーい、りーん、どこだー」
そうしていると、あたしの後ろの方から声が聞こえてきた。
あたしはこの展開を覚えている。きっと、また、あれが私を迎えに来たのだろう。
至る所に穴が開いていて、その穴からは内臓やら血が流れ出ている両親が。
あたしはそう思うだけで恐怖を感じた。
「お、こんなところにいたか」
声が真上から聞こえてくる。
あたしはただ怯えながら下を見ていた。
「おい、コラッ。無視するな」
そうしていると頭を何かで小突かれた。
「な、何？」
あたしは頭を押さえながら、顔をあげるとそこには幼い頃の大ち

ゃんが、何故か肩にハリセンを担ぎながら立っていた。
なぜ、ハリセン？
「人がせっかく迷子になったお前を迎えに来てやったのに、無視をするなんてひどくないか？」
「え、迷子？だって、周りは暗闇しかないはずだよ」
「暗闇？何言っているんだ？どこに暗闇があるんだ？」
「え、だって。周りには暗闇しか」
その時、あたしは驚いた。だって、あたしが居た場所はいつの間にか、暗闇は無くて、その代わりにどこかの河原になっていたんだから。
「なっ、暗闇なんてないだろ？ほら、そんなことより帰るぞ。みんながお前のことを心配している」
大ちゃんはそう言って、あたしに手を差し伸べてきた。
「う、うん」
私はその手に捕まり、立ち上がった。そして、手を繋いだまま大ちゃんが歩きだしたので、あたしはそのまま腕を引っ張られながら大ちゃんの後ろについて行った。
「・・・・・ねえ、大ちゃん。怒ってる？」
私は大ちゃんの背中に話しかけた。
「ああ、怒ってるよ」
大ちゃんの表情は見えないが、声からして本当に怒っているようだ」
「ご、ごめんなさい」
「なんで俺に謝るんだよ」
「だって、みんなに黙って勝手にいなくなったし、大ちゃんに心配かけちゃったし」
「なら、それはみんなに謝れ。それに、俺はお前が迷惑をかけることには慣れている」
「じゃあ、なんで怒っているの？」
あたしがそう聞くと、大ちゃん立ち止まり、私から手を離した。

「お前と俺は家族なんだから、寂しいなら俺に相談してほしかった」
この時の大ちゃんの顔は見なくても照れていることすぐにわかった。
「前にも言ったが、お前が寂しい時は俺がいつでも側にいてやるから」
「うん。ごめん」
あたしは嬉しくて。泣きそうになった。でも、泣かない。大ちゃんがまた心配しちゃうから。
「ほら行くぞ」
大ちゃんはそう言って、歩き出した。
「あ、ちょっと待ってよ。あっ」
あたしは急いで追い掛けようとしたら、石につまずき転んでしまった。
「おい、大丈夫か？」
大ちゃんは心配そうにしてくる。
「うん。大丈夫。いっつ」
膝に痛みが走り、見てみると皮が剥け血が流れてきていた。
「あ～あ、早く消毒しないとな」
大ちゃんはポケットから消毒薬と傷バンをだし、すぐに治療してくれた。
それは大ちゃんが愛用していて、いつ、私が怪我をしてもいいように持ち運んでいる物だ。
大ちゃんはいつもそうやって私に気を使ってくれる。
「ほれ、これでもう大丈夫だ」
「あ、ありがとう」
「歩けるか？」
「ん～、ちょっと無理っぽい」
「なら、こうするか」
大ちゃんはしゃがんで、あたしに背中を向けた。
「ほら、早く乗れ」

どうやら、おんぶをしてくれるようだ。
「え、でも、あたし重いし、悪いよ」
「親父曰く、同年代の女の子ぐらい背負えなきゃ男じゃないらしい」
それじゃあ、仕方がない。意味がわからないがあたしは大ちゃんの背中に乗せてもらった。
「よいしょっと」
大ちゃんは掛け声を出しながら、私を背負った。
「大丈夫？重くない？」
「大丈夫。見た目より軽いから」
大ちゃんはそう言って、歩き出した。
あたしはそのまま、大ちゃんに体重を預けた。あ、そういえばまだ見つけてくれたお礼いってない。
「大ちゃん」
「ん？」
「あたしを見つけてくれてありがとう」
「ん。どういたしまして」
大ちゃんが照れているのがすぐにわかった。
「鈴。疲れたろ？着いたら起こしてやるから少し寝ていろ」
「うん。そうする」
あたしは大ちゃんの言葉通りにすぐに目を瞑った。
そしたら、すぐに眠ることができた。

次に、目を覚ますとそこは見覚えがない天井だった。
あれ、あたしどうしたんだろ？
「起きたか？」
大ちゃんがあたしを覗きこんできた。
「あれ、あたしどうしたの？」
「俺の部屋で無理やり寝かせた」
ああ、思いだした。あたし、大ちゃんにあの事を話したら、無理やり大ちゃんに眠らされたんだっけ。

「気分はどうだ？」
大ちゃんが心配そうに聞いてくる。
「うん。とてもいい」
「そうか、それは良かった。なら、これはもういいな」
大ちゃんはそう言って、今まで握っていた手を離そうとした。
「あっ」
あたしは思わず、またその手を握ってしまった。
「・・・・・鈴？」
大ちゃんは呆気にとられていた。
「あ、ごめん。え～と、その、も、もう少し寝ていたいから握っていていいかな？」
あたしは、適当な言い訳をした。自分の顔が赤くなっていることがわかる。
「ああ、いいよ」
大ちゃんもそう言って、また、あたしの手を握ってくれた。
「なあ、鈴」
「何？」
「俺はお前が寂しい時、いつでも側にいてやる。一人で抱え込むな」
大ちゃんは夢の時と同じことを言ってくれた。
「・・・・・うん」
私はそれが嬉しくて、思いっきり大ちゃんの手を握ってしまった。
それから、今まで忘れていた感情を思いだした。
どうやったらいつまでも大ちゃんと一緒にいられるかな？
そして、私はあることを思いついた。
帰ったらお姉様とじぃちゃんに相談してみよ。
あたしはそんなことを思いつつ、また眠りについた。

鈴のことがあってから、数日が経った。
「え～と、みんな。忙しい中、集まってくれてありがとう」

俺は寮のメンバーを全員集めてリビングにいた。
「ん、それは構わないが。これは何の集まりなんだ？」
龍が寮生みんなの代表として聞いてきた。
「えっと、急なんだけどこの寮にまた新しい人が入ってくることになった」
俺が説明するとみんなして驚きが隠せないようだ。
「え？また転校生が来たんですか？」
音葉が不思議そうに聞いてくると。
「いや、そんなはずはない。俺の情報にそんなのはなかったぞ」
直斗が俺の代わりに答えてくれる。
「誰でもいいが強い奴だといいな」
そこ、今はそんなの関係ないだろう。
「それで、大河。一体誰が来たの？」
最後に優燈が俺に聞いてくる。
「誰と言われてもな。なんというか。俺も何故こうなったのか不思議なくらいだ。まあ、説明するよりは見た方が早い。おい、入ってきていいぞ」
「は～い」
俺の合図と共に、いつもの鈴（すず）の髪飾りを揺らしながらそいつは入ってきた。
「今日からこの琥牙寮でお世話になる聖純鈴（きよずみりん）です。よろしくお願いします」
「えええええええええっ！」
寮生は鈴を見た瞬間、全員、叫びながら驚愕していた。
なんで、こうなったかな？
俺はというと、その声を聞きながらそんなことを思っていた。

Ｎｏ，２４　安らかな眠りをこの子に　後編（後書き）

次回予告
作《えー、前回の言ったとおりにここでルート分岐が行われます》
大《ということは、鈴ルートでいくことになるのか？》
作《う～ん、このまま鈴ルートでいってもいいんだけど。今、書いているのは揚羽ルートの方なんだよね》
大《あ、だから、分岐点なのか》
作《そゆこと。私的に鈴ルートでもいいんだけど揚羽ルートもいいんだよね》
大《ちなみに揚羽ルートはどのくらいできてんの？》
作《まだ序盤だね》
大《鈴ルートは？》
作《頭の中にある。あ、言っとくけど揚羽の場合はバトルが多めに入ってっきて、鈴は優燈並みに甘えてくるから。大河はどっちがいい？》
大《どっちも嫌だ！！》

感想や質問など随時受け付けております。気軽に書いてください。
作者の執筆が早くなるかもしれません。

Ｎｏ，２５　迷子と子供嫌い（前書き）

感想などお待ちしております。

No，25　迷子と子供嫌い

「困った。非常に困った」
私は勝手に玄関から中に入り、家主を捜していた。
しかし、どこにも目的の人物がいない。
「くそ、こんな時にどこに行った！」
こんな時の為の弟だろうが。
私は見つからない為か段々と苛ついてきた。
「ここかっ！」
私は最後に思い当たる部屋を開けた。
「くか～」
「にゃ～」
「す～」
三人仲良く昼寝をしている大河と鈴、優燈を見つけた。
大河は壁に体重を預けて寝ていて、優燈は頭を弟の肩に寄りかかりながら目をつぶり、そうして、鈴は大河に膝枕をしてもらって体を丸くしていた。
「くか～、・・・・・ん、誰か来た？」
気配を感じたのか大河が目を覚ました。
「私だ」
私は大河達の前に仁王立ちをしている。
「あれ？姉さんどうしたの？珍しいね。自分から来るなんて」
「そうだな。まあ、とりあえず。一発殴らせろ」
「え？」
私はその状態にムカついたので寝起きの大河をとりあえず殴っておいた。
「それで一体どうしたの？」

俺は右側の頬を氷嚢(ひょうのう)で冷やしながら聞いた。
「ああ、実は厄介な者を拾ってしまってな」
揚羽は緊張した面持ちで俺に言ってきた。
「厄介な者？」
「説明するより見た方が早いと思う。おい、入って来い」
揚羽が呼ぶと、部屋のドアが開き、一人の女の子が顔を出してきた。
女の子の見た目からして六歳ぐらいかな？
「姉さん」
「ん？」
「子供を誘拐してきちゃダメだろ」
「誰が誘拐するかっ！」
今度は左頬を殴られました。
「いててて、じゃあ、隠し子？」
「私はまだ処女だ！」
そんなことを大きな声で言わないでよ。
「冗談はこれぐらいにしておいて」
「私には冗談に聞こえなかったな」
そんな怖い顔で睨まないで。
「それで、その子はどうしたの？」
「だから拾った」
そんな堂々と言わないでよ。
「俺的には何故拾ったのか説明してほしいんだけど」
「あ、そうゆうことか。実はここに来る途中で、鳴き声を聞いたもんで、周りをみたらそいつが泣いていた。それで、話しかけたら道が解らないと言ってきたので。お前の所に連れてきた」
「おい、俺の所じゃなくて警察に連れてけよ」
どうやったら、道が解らないからって俺の所に連れて行く考えに至るんだ？
「まあ、気にすんな」

「気にするよ！それで、その子の名前とか聞いたの？」
「いや、まだだ」
「聞いておいてよ」
「大河、一つだけ言っておく」
「ん、何？」
とてもくだらないことだと思うんだけど。
「私は子供が苦手なんだ！」
「威張っていうことか！たく、子供の家を捜したいから手伝えって言いたいんでしょ」
「うん。まさにその通りだ。それで手伝ってくれるか？」
前からそうだけど姉さんは苦手なことがあった場合、いつも俺を巻き込むよな。
「はぁー、わかったよ。手伝えばいいんでしょ」
でも、断れない俺がいる。どうせ、断ろうとしても強制的に手伝わされるので意味がない。なんか悲しいな。
「それじゃあ、そこの君、ちょっとこっちに来て」
俺はずっとドア越しからこっちの様子を眺めている女の子を呼び寄せた。
「お兄ちゃん。怖い人？」
女の子は揚羽の背中に隠れながらこちらを見てくる。
「怖い人じゃない。俺はそのお姉さんの舎弟。つまり弟みたいなもんだよ。それで、君の名前を教えてくれないかな？」
「・・・壱草（ちづる）千鶴。六歳です」
千鶴は小さい声で言ってきた。
壱草？あれ？どっかで聞いたことがあるな。
「お兄ちゃんのお名前何？」
「お兄ちゃんは琥牙大河っていうんだよ」
「大河お兄ちゃん。お姉ちゃんは？」
姉さん、まだ、挨拶してなかったのかよ。
「ん、私か？私は揚羽だ」

「揚羽お姉ちゃん。うん、覚えた」
千鶴は何度も交互に名前を言って覚えてくれた。
「それで、千鶴ちゃん。千鶴ちゃんはなんで迷子になったの？」
とりあえずいろいろと情報を手に入れないとな。
「虹を見つけて、それを追っていたら解らなくなっちゃった」
あ～、典型的なパターンだな。
「虹を見つけた時って誰かと一緒にいた？」
「ううん。一人でお散歩中だった」
それじゃあ、好奇心で虹を追っかけて道が解らなくなったんだな。
まあ、虹を追っかけていたんだからずっと上を見ていたことだし、道が解らなくなったの頷けるな。
「どうだ？この子の家を見つけられそうか？」
「今の情報で見つけられたらすごいよ」
「そりゃあ、そうか。まあ、わかったら教えてくれ」
揚羽はもう他人事みたいに人の部屋を勝手に漁り始めた。
「それで、千鶴ちゃん。千鶴ちゃんは家の電話番号とか知らない？それか、迷子になったらこれを渡しなさいって言われていた物とかはある？」
「ごめんなさい」
千鶴は悲しそうに言ってくる。
「ないか。こりゃあ、困ったな」
これからどうしよっかな。とりあえず、姉さんが千鶴ちゃんを見つけた所に行ってから、決めるか。
「ちょっと、姉さん」
俺はこれからの計画を考えて、揚羽の方を見た。
「ん？なんだ？わかったのか？」
そうしていたら、揚羽は何故か人のアルバムを勝手に取り出し、それを見ていた。
「なんで、そんなものを見ているの？」
「いや、つい懐かしくて。特にこの写真が」

揚羽はアルバムから一枚の写真を取り出し、俺に見せてきた。
「うわ、嫌な記憶の奴だ」
その写真は、去年の文化祭の時に揚羽たちのクラスに行った時に、揚羽に無理やり女子用の制服着さられ、揚羽たちと一緒に撮った奴だ。
「なんで、これがここにあんの？」
「大方、優燈がやったんじゃないのか？」
うわー、容易に想像がつくな。
「あ、奈絵お姉ちゃんだ？」
千鶴は写真を覗きこみながら言ってきた。
「え？千鶴ちゃんって奈絵さんと知り合いなの？」
「知り合いじゃないよ。奈絵お姉ちゃんは千鶴の家の一番上のお姉ちゃんだよ」
つまりそれって、奈絵と姉妹ってことじゃないか。
「あ、そう言えば奈絵のやつ、名字が壱草だったな」
揚羽は今頃になってその事を思い出したらしい。
「今頃思いださないでよ」
一応、それでも親友なんでしょ？
「それじゃあ、千鶴を奈絵の家に連れて行けばいいんだな」
「ん、まあ、そうだね。それじゃあ、後はがんばってくれ」
「何を言ってんだ？お前も一緒に行くんだぞ」
揚羽は当然の事ばかりに言ってくる。
「はい？」
「さっきも言っただろ。私は子供が苦手なんだ」
そう言って揚羽は千鶴を肩車し、無理やり俺に上着を着させて外に連れ出した。
子供嫌いなのになんでわざわざ肩車するかな？
俺は連れだされながらそんなことを思ったが。
「きゃはは。高い高い」
まぁ、いっか。

千鶴が喜んでいたので、よしとした。

「あー、疲れた」
「お疲れ様。しかし、奈絵さんすごく心配していたね」
俺と揚羽は千鶴を奈絵の所に届け終わり、帰宅途中だった。
俺達が千鶴を連れて奈絵さんの家に行った時、奈絵さんが勢い付けて千鶴に飛びついてきたのは驚いたな。
「それほど、妹が大事だったんだろう。奈絵はあー見えて、子供好きの所もあるし、一緒に遊んでいたのにいつの間にかいなくなっていたから、余計に心配したんだろう。まあ、私には子供のどこがいいかなんてわからないけどな」
「姉さんって、本当に子供嫌いなんだね。なんで、そこまで嫌うの？」
「だって、子供はすぐに泣くし、人の事情はお構いなしに行動に出るからな。子供は好かん」
「あっそ」
そうゆうわりには千鶴ちゃんを届けるまで肩車してあげたり、しりとりしてあげたりしてたよな？本当は子供好きじゃないのか？後で、爺さんにでも聞いてみよう。
「それに、私は・・・・・」
揚羽は深刻な顔をした。
「それに、何？」
「・・・・・いや、なんでもない。それより、これから何か予定でもあるか」
揚羽は話題を切り替えてきた。
「どっかの誰かさんが無理やり連れ出したから予定はなくなったよ」
つっても、今日はずっと部屋でごろごろ過ごすつもりだったからいいんだけど。
「それじゃあ、これから遊びに行かないか？」

「え、まあ、いいけど。姉さん、お金あるの？」
「あるだろ、ここに」
そう言って揚羽は俺を指差してきた。
「オレヨウジオモイダシタカラカエルネ」
俺はすぐにその場から逃げようとしたが。
「まあ、そう言わずに行くぞ。我が財布よ」
「嫌だあああああ！」
しかし、揚羽に逃げる前に肩を掴まれ、強制に的に連行されてしまった。

Ｎｏ，２５　迷子と子供嫌い（後書き）

次回予告
作《はい、ということなので。次回から揚羽ルートをやらせてもらいます》
大《大丈夫なのか？》
作《何が？》
大《いや、揚羽ルートでという意味で》
作《大丈夫だ。たぶん》
大《たぶんかよ！》
作《だって、文章さえどうにかできればできるもん》
大《そうか、がんばれよ》
作《ということになったのでこれからは揚羽ルートでいうくので応援よろしくお願いします》

揚羽ルート１　疑問と老人の戯言（前書き）

お待たせしました。

揚羽ルート1　疑問と老人の戯言

「か、勘弁してくれ。お、俺はまだ死にたくないんだ。い、嫌だあああああ」
暗闇の誰もが寄り付かない路地裏で、一人の男性の叫び声が聞こえて、すぐに無くなった。
「はあ、はあ、はあ」
息を荒くしながら、血だらけの気絶をしている男を見下ろしている自分がいた。
足りない。
これだけやったのにまだ治まらない。
もっとだ。
もっと、やらないと。
そうしないと、自分の大切な者を壊してしまう。
「それだけは絶対にさけなければ」
早く次の獲物を探しにいこう。
「ん？」
東がだんだんと明るくなってきたか。
ちっ、続きはまた今度だな。
自分はそう思いながら赤くなって手のまま、その場を後にした。

先日の揚羽の子供嫌いについて煉磨の爺さんに聞きにきていた。
「おい、爺さん。聞きたい事があるんだけど」
「なんじゃあ？馬鹿孫」
「・・・・・俺は爺さんの孫になったつもりはないぞ」
「あいつの息子ならワシの孫当然だ」
どういう理屈だよ？
「まあいい、お前も手伝え」

煉磨は草むしりを俺にやれと軍手を渡しながら指示してきた。俺はこの人には逆らえない為、しぶしぶ作業をやり始めた。
「それで、ワシに聞きたいことってなんじゃ？」
「実は姉さんのことについてなんだけど」
「揚羽か。言うてみ」
「実は」
俺はこの前の千鶴ちゃんの件について話した。
「ということなんだ。それで、なんで姉さんは子供が嫌いなのかと思ってさ」
「揚羽がそんなことを言ったのか？」
煉間は思い当たることがあるのか、真剣な顔をした。
「そうだよ。自分は子供嫌いだって」
「そうか。揚羽がの」
煉磨はその後、黙々と草むしりを続けた。俺もその間は何も喋らないで作業を続けた。
「・・・・・時に話が変わるが」
煉磨は話しかけてきた。
「んー？」
「お前は揚羽の事をどう思っている？」
「姉として好きかな？」
「異性としてどうだ？」
「は？」
何を言っているんだこの爺さんは？
俺は呆気にとられて作業の手を止めてしまった。ボケたかこのじじい？
「ボケとらんは」
「人の心読まないでくれる？」
大変困るんですけど？
「ああ、すまん。それで、どうなのだ？」
「そんなのいきなり言われてもわかんないな。今まで異性として見

てきたわけではないし、なによりあの人は俺の姉的存在だからな」
「そうか。ワシ的にはなお前と揚羽が付き合ってくれたら嬉しいと思っとるんじゃ」
「何言ってんだ？」
「いいから、話は最後まで聞け。老人の戯言でも思ってくれても構わん。揚羽はお前のことを一番信頼しておるし。異性の中だとお前だけを近くにいることを許している」
そう言われてもてもな。ただ、こき使われている感じがするんだけど。
「とにかく、そんな二人だからこそワシはお前と揚羽が付き合ってほしいとおもっとるんじゃ。まあ、お前が揚羽とは別に好きな奴がいるのなら無理強いはしないけどな」
「いや、そうゆう奴はいないけど」
迫ってくる奴はいるが。ここでは気にしないことにしよう。
「まあ、そうゆう老人の考えがあることを頭の隅っこでもいいから置いといてくれ」
「へいへい。わかりましたよ。それじゃあ、俺は草むしりも終わったしそろそろ行くよ」
話しこんでいるうち、辺り一面、殆どの草むしりを終えていた。
「すまぬの。手伝ってもらって」
「いいってことよいろいろ世話になっているし。それじゃあな」
俺はそういって校舎に戻ろうとした。
「あ、そうじゃあ、大河」
そしたら、呼び止められてしまった。
「何？」
俺は立ち止まり振り返った。
「揚羽の子供嫌いの事なんだが、たぶんあいつが抱え込んでいる心の闇に関係しているのかもしれん」
「心の闇？」
「そうじゃあ。だから無意識に自分が子供嫌いと言っているのかも

しれん」
「姉さんが抱えている心の闇って何？」
「ワシは知らん。それは本人から聞いてくれ」
んな、投げやりすぎるよ。
「ふーん。わかった。それだけ聞ければ後はこっちでなんとかするよ。それじゃあ」
「ああ、後は頼むぞ」
俺は煉磨に挨拶をし、その場を後にした。

揚羽ルート1　疑問と老人の戯言（後書き）

次回予告

作《はい、ということで揚羽ルートに入りました》

大《でも、揚羽出てないじゃん》

作《ごめんなさい。今回は出せませんでした。次回から段々と出していくのでよろしくお願いします》

大《それで、これからどうなる予定なの？》

作《それはこれからのお楽しみです》

大（だめじゃん）

作《駄目じゃない。とりあえずこれから頑張って投降していくの最後目でお付き合いください。よろしくお願いします》

揚羽ルート2　昼休みの屋上で

「お前なんか産まれて来なければよかったのよ！」
それが私の親の最後の一言だった。
私の力が強すぎるあまりに、誤って親を傷つけてしまい言われた言葉。
私はその頃の記憶があまり無いけれども、その言葉だけはよく覚えている。
本当は忘れたいのに、忘れられない一言。
この時の私はどれだけ傷つき、どれだけその親を憎んだんだろう？
今にして思えば、あの時から親は私に恐怖を抱いているのがわかる。
年齢とは等しくない自分の力に。
だから親は昔、お世話になった人に私を預けたのだろう。
自分たちの身を守る為に。
「ふうー、悲しい現実だな」
私は過去を振り返るのを止め、ゆっくりと眼を開けた。
暗闇を街灯が照らし、今宵も狩りの時間が始まる。
そう、思うと体が疼いてきた。
「ちっ、この頃ペースが速くなってきているぞ」
倒しても倒しても、飢えが満たされない。
それどころか着々と自分の意志とは反し、力が押さえられなくなってきている。
あいつのことを言えなくなってきてるな。
「まあいい。さっさとやって、さっさと終わらそう」
私は自分に言い聞かせ、暗闇の中に自ら進んで行った。

「えーと、今日はスポーツ大会の話をします」

教壇に立ちながらクラスの委員長が説明をしていた。
「競技はいろいろありますが一人一回必ず出てください。それでは、一つずつ競技を言っていくので手を上げてください」
委員長はそう言って一つずつ黒板に書かれた競技の名を読み上げていった。
「ねえ、大ちゃん」
前の席の鈴が俺に話しかけてきた。
「ん？」
「大ちゃんは何の競技に出るの？」
「武道大会」
「あ、やっぱり？」
「ん、つか出ろって隼先生に言われた」
俺は出る気が無かったのに。出なければ単位をやらないと言いやがった。職権乱用じゃないか？
「あはは、隼先生なら言いそうだね」
まったく迷惑な話だ。
「なあ、武道大会ってなんだ？」
渚が俺と鈴の話に入って来た。たぶん、武道大会に釣られたのだろう。
「そのままの意味だよ。翡翠学園は、この学園は先生生徒問わず誰が一番強いのか決める大会があるんだ」
「ほう、それは興味があるな」
「なら、出れば？クラスの奴必ず五人まで出なけ」
「出る」
渚は即答した。
決断早っ！
「大ちゃん。あたしも」
鈴も手を上げてきた。
「つか、俺に言わないでその競技の名が呼ばれたら手を上げろよ」
俺は武道娘二人から視線を外し、空を見上げた。

・・・・・姉さんもやっぱり出るんだろうな。

「当たり前だ。ジジイに出ろと言われたからな」
昼休み、屋上で昼寝していると姉さんがやってきたので、武道大会のことについて話していた。
「ああ、姉さんもか」
「姉さんもということはお前もか？」
「俺の場合は隼先生だけどね。ところでさ、来た所から言おうと思ったんだけど」
「なんだ？」
「スカートの中、見えてるんだけど」
俺は寝ころんで、姉さんが俺の頭の上で仁王立ちしているので見えちゃってわけだ。
「知っている。見せているんだからな」
揚羽はそう言ってスカートの裾を持ち上げた。
今日は黒に紫か。
「いや、つか、なんで？」
「日頃からのお礼だ」
「恥ずかしくないの？」
「すごい恥ずかしい」
揚羽が少しだけ顔を赤くしているのがわかる。
「じゃあ、止めようか」
「だな」
揚羽はそう言って俺のお腹を枕代わりにして寝ころんだ。
「ああ、気持ちいいな」
「いや、なんでそこに寝るの？」
「どこに寝ようと私の勝手だ」
すんげー、我が儘だな。まあいいか、姉さんの我が儘は今に始まった事ではないし。

「・・・・・なあ、大河」
「ん？」
「お前は最近、自分の力を制御しきれているか？」
「うん、まあ、一応、制御しきれているよ。それがどうしたの？」
「いや、何制御しきれていなかったら、お姉さんが手厚く相手をしてあげようと思ってな」
「心から遠慮させてもらいます」
「そうゆうなよ、この頃相手がいなくてつまらないんだよ」
「それってただ暴れたいだけじゃないの？」
「そうともいうな」
はあー、やれやれ姉さんには困った者だ。
「言っとくけど、俺はやらないよ」
「何故？」
「面倒だから」
「なら、私と遊べ」
「はあ？」
どういうこと？
「だから、選べ。私と稽古をするか、私と遊ぶか」
「え、それって絶対？」
できれば、ずっとこうしているを選びたいんだけど。
「うん、絶対」
揚羽は起き上がり俺に向けて微笑みかけてきた。
「じゃあ、そうだな。俺は」
俺は選択をした。

揚羽ルート2　昼休みの屋上で（後書き）

次回予告

作《次回、大河はどっちを選択するんでしょうか？》

大《どっちでもいいです。結局俺が損をするんだから》

作《損？なんのこと？俺はただ揚羽と一緒に楽しんでほしいだけだよ》

大《楽しむ？あれのどこが楽しんでいるんだ？》

作《揚羽が楽しんでいるじゃん》

大《主人公を楽しませようよ》

作《ごめん。無理》

大《なんで？》

作《俺的にヒロインを幸せにさせたいから》

大《なんじゃそりゃあああ！！　》

揚羽ルート３　私はお前と来たかったんだ（前書き）

もう一つの小説もよろしくお願いします。

揚羽ルート3　私はお前と来たかったんだ

まだだ。まだ物足りない」
足元には全身真っ赤に染まった重傷者が倒れていた。
最近では意識を保つのがやっとで力加減が出来なくなってきている。
このままだと、自分が自分でなくなる可能性がある。
それだけは絶対に避けなければいけない。
あいつの為にもそれだけは絶対に。
もし、自分が自分でなくなった場合、私はあいつに襲いかかるだろう。
私が知っている中であいつが一番強いから。
それだけは嫌だ。
なぜなら私は確実にあいつを壊してしまうし。
それに私はあいつの事が。
好きなんだから。
たとえ叶わぬ願いだとしても、あいつを絶対に壊させたりしない。
私は心に決め、その場を去っていた。

「え～と、姉さん」
「ん、なんだい？弟よ」
「なんで、こんなとこに来ているの？」
俺は休日に姉さんと遊園地に来ていました。
周りではカップル連れや家族連れで来ている人がいっぱいいる。
うわー、人がゴミのようにいる。
俺は結局、あの時、姉さんと遊ぶを選んだ。

そしたら、姉さんがじゃあ今度の休みにここに行こうとチケットを渡してきたので、姉さんと遊園地に遊びにきた。
「この前の奈絵の妹の件で、奈絵がお礼にここのペアチケットをくれたんだ」
「それは、後で奈絵さんにお礼を言わないとね。つか、なんで俺と一緒に来たの？」
「不満か？」
「いや、不満じゃないけど。姉さんとなら他に行きたい人がいたんじゃないの？」
姉さんのファンの男子や女友達がいるんじゃないのかな？
「私はお前と来たかったからいいんだよ」
なんか嬉しい一言だな。
「ほらそんなことより今日はタダなんだからさっさと乗り物に乗るぞ。目指せマシンコンプリート」
揚羽は俺の腕を取り、そのまま遊園地の中に入っていった。
さて、今日は楽しむか。

それからというもの、お馴染みのジェットコースターから始まりコーヒーカップ、メリーゴーランドなどいろいろな物に乗った。
「さて、あとは何乗ってない？」
揚羽は風船を持ちながら聞いてきた。
「乗り物は観覧車だけだよ、他にはお化け屋敷や、あっ、イベントが後一時間したら始まるみたいだよ」
俺は係り員から貰ったパンフレットを見ながら答えた。
「じゃあ、先にお化け屋敷に行ってから会場に行って、最後に観覧車だな」
揚羽は俺の話を聞き、スケジュールを決めお化け屋敷の方に歩き出した。
「わかった」

俺はパンフレットをしまい、揚羽の後に続いた。
お化け屋敷は結構楽しめた。
始めは、普通に妖怪が俺達を驚かしていたのに段々と終盤らへんに差し掛かってくると、バイオハザードに出てきそうなゾンビが現れ俺たちを追っかけてきたり、罠がいろいろと発動して避けるのに苦労した。しかも、ゾンビのくせに無茶苦茶に足が速く逃げるのに精一杯だった。途中のゾンビが追っかけてきた瞬間、姉さんが応戦しようとしたがそれだけは止めさせた。
だって、あのゾンビって結局は従業員なんだから怪我させちゃ駄目でしょ。
「はあー、楽しかった」
「疲れたけどね」
「まあ、いいじゃないか。遊びと思えば、それにしても、ゾンビと戦いたかったな」
「いや、駄目だから。ゾンビを逆に怪我させちゃうからね」
「いいじゃないか、ゾンビなんだから」
「それでも駄目なの」
「ちぇ、わかったよ」
これじゃあ、まるで子供に言い聞かす親のようだな。
「ところで、大河。いい席も取りたいしそろそろ会場に行かないか？」
「あ、うん。そうだね。あ、でもちょっと待って、飲み物を買ってくるよ」
「わかった。私はそこのベンチで待っているよ」
「わかった」
俺はそう言ってジュースを買いに揚羽と分かれ自動販売機に向かった。
俺はスポーツドリンクでいいな、姉さんにはココアだな。
俺はさっさと飲み物を買い、急いで揚羽のところに戻った。
「ねえねえ、君一人？」

「一人なら俺らとこれからどこかに行かない」
「すまないが、今は連れがジュースを買いに行っているから無理だ」
そしたら、案の定揚羽は2人の青年にナンパされていた。
やっぱり、姉さんを一人にするとこうゆう事が起きるよね。まあ、仕方がないな姉さんは美人なんだし。つか、あの二人組どっかで見たことがあるな。どこだっけ？
「そんなことを言わないでさ。友人には少しここで待ってもらってもいいでしょ？」
「そうそう、ここに君みたいな美人さんを、一人を置いてジュースを買いに行く奴なんか、少し待たせた方がいいんだって」
無茶苦茶なことを言うな。こいつらは。さて、そんなことよりそろそろ時間がないし早く声を掛けよう。
俺はそう思い、揚羽とその二人組に近づき二人組の片方の肩を軽く叩いた。
「ん、だよ、邪魔するなよ」
でも片方は俺の手を払いナンパに集中している。しかし、俺はまた何度も叩いた。
「あー、なんだよ。人の邪魔をするなよ！」
片方はもう我慢できずに後ろを振り返った。
「うるせえ、くたばれ」
俺は片方が振り向いた瞬間、顔面を殴り飛ばし、
「なっ」
もう片方の奴にそのままの勢いを利用し、腹に回し蹴りをした。
「ぐっ」
当然のごとく二人組は倒れ気絶してしまった。
「大河遅いぞ。姉さんを待たせるなんていい度胸だな。おかげで、変な二人組にナンパをされたではないか」
そんな俺の行動を気にせず揚羽は文句を言ってきた。
「ごめん。ごめん。はい、これ。姉さんはココアでよかったでしょ」
俺は謝りながら揚羽に買ってきたココアを渡した。

「ありがとう。さすが弟。私の好きな物を心得ているな」
「そりゃあ、小さい頃から何回もパシラされると嫌でも覚えるよ」
「ははは、そうか嫌だったか」
揚羽は笑っていたが目が笑っていなかった。
ヤバイ。口が滑った。
「まあ、いいさ。今は遊園地を楽しんでいるんだから、何も咎めないさ。そんなことより、さっさと会場に行くぞ」
揚羽はそう言って、先に歩き出した。
助かった。
「あ、待ってよ」
俺は揚羽を追いかけていった。

揚羽ルート3　私はお前と来たかったんだ（後書き）

次回予告
作《次も遊園地の話になります》
大《へ～、そうなんだ》
作《とういうことだから頑張って》
大《え、何を？》
作《それは次回になったらわかるよ》
大《てか、揚羽ルートになっているけど、題名とかは変えないのか？》
作《変えるのを忘れていましたから、揚羽ルートが終わるまでこのままでいきます》
大《その後、終わったらなんという題名にするんだ？》
作《ヒロインによって決めます》
大（そうですか）
作《でも、何回も言いますけど、結局、大河がボロボロになる予定です》
大《お前、俺のこと嫌いだろ》
作《嫌いです》
大《殺す》（ヤレルもんならやってみろ）
作
次回もよろしく

揚羽ルート４　冗談を言うのは命がけ

「えー、それでは第N回アームストロング大会の決勝を行います」
司会者が大きな声で宣言した。
「それでは対戦者の入場です。青コーナーより毎度お馴染み只今３連覇の佐々木拓！今回も優勝できるのか！」
「あたりめーだろうが！」
司会者がそういうと、佐々木拓と言われた筋肉ダルマみたいのが大声で叫びながら。
「おー、拓さん今回もやる気十分です。そして、この拓さんの相手をするのが。なんとこの大会初参加だ。それでは入場してもらいましょう。赤コーナーより謎の眼帯少年。琥牙大河だー！」
「どうもおー」
俺はやる気なさそうに現れながら、なんで俺がこんなことをやっているんだろうと考えていた。
「大河！優勝しなかったら説教だからな！」
説教というよりは体罰じゃないの？
観客席では揚羽が大声で叫びながら応援している。
さて、自分の身も危ないことだし、がんばらないとな。
あの後、俺と揚羽は会場に来て、ダンスやマジックなどを見て、楽しんでいた。
そしたら、次にこのアームストロング大会が行われると司会者が話していた。
「そして、今回の優勝賞品はこちら！」
司会者がステージに向かっていういと、そこから子供の大きさぐらいのクマのヌイグルミと米俵が十個くらい積まれてあった。
「今話題のクマのヌイグルミと家計に大助かりの米十キロです」
会場はざわめきだした。
「かわいいな」

揚羽の方から小さな声が聞こえてきた。
「姉さんなんか言った？」
まあ、つても聞こえていたけどね。しかし、珍しいな姉さんが人形を欲しがるなんて。
「な、なんでもない」
揚羽は顔を赤くしながら焦っていた。
なんか、この反応、初めてみるな。
「それでは、出場したい方は抽選を行いますのでステージ脇にきてください」
司会者が指示すると、彼氏やお父さんみたいな人達がぞろぞろとステージ脇に移動した。
俺は米がとても魅力的だったが、ここまで来てあまり目立ちたくなかったの止めといた。
「大河」
「ん？」
「参加して来い」
「え、なんで？」
「いいから早く行って来い！」
「は、はい！」
揚羽がすごい剣幕で睨んで来たので、俺は思わず返事をしてステージ脇に向かった。
それからというもの、俺は次々と対戦者を倒していき、その結果、決勝にコマを進めていた。
「え～、それでは準備がよろしいでしょうか？」
「いつでもいいぞ」
筋肉だるまは俺を睨みつけながら言ってきた。
「どうぞ」
俺はそんな態度を無視しながら普通に言った。
うわー、こいつの手すんげーベトベトして気持ち悪いな。
「お二人ともやる気十分です。それでは、レディーゴー！！」

バンっ！
司会者が合図を出した瞬間、大きい音がした。
「え？」
「はい？」
観客は当たり前、司会者と筋肉だるまも何が起こったか解らなかった。
「すみません。勝負がつきましたよ」
俺はそう言って、筋肉だるまの手の甲を机にぶつけていた。
「え、あ、はい。勝者、琥牙大河選手！」
「ふざけんなー！」
司会者が俺の手を上げながら言った瞬間、筋肉だるまが俺に向かって文句を言ってきた。
「どうせ、インチキでもしたんだろ。そうじゃ、なきゃ俺が負けるはずがない！」
どうやら筋肉だるまは今の試合結果が納得がいかないらしい。
「あ、やっぱり。今の納得できない？」
「あたり前だろ。もう一度、俺と勝負だ」
「嫌だよ。お前の手ベトベトして気持ち悪いんだもん」
俺は筋肉だるまの挑戦を拒否した。
「てめー！」
筋肉だるまは顔を赤くしながら俺に殴りかかってきた。
「あらよっと！」
俺はその拳をいなして、相手の懐に入り鳩尾に思いっきり肘を入れた。
「ぐほ」
筋肉だるまはそれで気絶をし、倒れてしまった。
「すいません。司会者さん。会場で暴れてしまって」
「い、いえ、大丈夫です。少しのアクシデントがありましたが大丈夫です。これで優勝はあなたに決定です！」
「「「「「パチパチパチ」」」」」

司会者がそういうと観客席から拍手が巻き起こった。
「それでは賞品の贈呈です」
俺はそう言って、クマのぬいぐるみを受け取った。
「米は後ほど、こちらで輸送しますから、あとで住所を教えてくださいね」
「はい。わかりました」
「それでは、これで第N回アームストロング大会を終了します。もう一度、チャンピオンに拍手をお願いします」
「「「「「「パチパチパチ」」」」」」
またもや、拍手が巻き起こった。
さて、目当ての物が手に入ったから姉さんに殺されずにすむな。
俺は身の安全を感じてホッとした。

「ふふふ」
揚羽は俺が賞品で貰った人形を抱きながらニヤけていた。
「姉さん。顔がニヤけているよ」
まあ、別にいいけどさ。
俺と揚羽は今、最後の締めくくりで観覧車に乗っていた」
「ああ、悪い悪い」
悪いと言っておきながらニヤけているのは変わらなかった。
「でも、珍しいね。姉さんが人形を欲しがるなんてね」
俺が人形をどうしようかと考えていたら、『いらないなら私にくれ』と言ってきたので渡した。
「お前、いつも私をどんな目でみているんだ？」
「そりゃあ、強くて、たくましいなあって、痛いっ」
揚羽に思いっきり殴られました。
「一言言っとくが、これでも私は女なんだぞ。人形の一つや二つ欲しがって当たり前だ」
「暴力的だけどね。いたっ」

また、殴られました。
「お前は私にケンカでも売っているのか？」
「売っていたら、まず、ここにはいないよ」
ケンカを売るなら逃げれる範囲にいるからね。
「たく、せっかくいい気分だったのに悪くなった。おい、どうしてくれるんだ？」
揚羽はそう言って、俺の脛（すね）を軽めに蹴って来た。
これ、微妙に痛いから止めてほしいんだよね。
「おし、私の機嫌を損ねた罰として、お前の好きな奴を言え」
それって、どんな罰ゲームだよ？しかも内容が修学旅行の夜に話しあうみたいな内容だし。
「どうした言えないのか？」
揚羽はまたニヤついて聞いてきた。
さて、どうしよ。これと言って好きな人って聞かれても思い当たるのがないぞ。そもそも考えたこともなかった。俺の近くにいる異性から考えると、優燈と鈴は妹みたいなもんだし、渚は友達だし、音葉は後輩なんだよな。じゃあ、姉さんは？・・・・・つか、なんで、俺がこんなことを考えないといけないんだ？おかしいよな。よし、たまには、姉さんをからかって困った顔でも見てみるかな？
俺は少しばかりS心に火がついた。
「姉さんかな」
「え？」
「だから、俺の好きな人は姉さん」
「じょ、冗談だろ」
揚羽は何かを焦っているようだ。
「冗談だったらこんなことをしないよ」
俺は揚羽の肩を掴んだ。
「俺は姉さんが好きなんだ」
「そ、そんな、急に言われても困るんだけどな」
揚羽は顔を赤くしてそわそわしていた。

おー、姉さんが赤くなっている。姉さんってもしかして押しに弱いのかな？
「姉さんはどうなの？姉さんは俺の事は好き？」
俺は真剣な顔をして言った。
「わ、私は」
揚羽はゆっくりと口を開こうとした。
「お客さん、一周しましたよ」
その時、観覧車のドアが開き、係員が顔を覗かせてきた。
「姉さん、冗談だよ」
俺は笑いながらそう言って、すぐに観覧車から飛び出し走り出した。
「・・・・・たあああああいいいいいがあああああ！！！！！！許さああああああん！」
後ろから俺の名を叫びながら、揚羽（おに）が追っかけてくる。
その手にはしっかりと人形が握られていた。
・・・・・ヤバイ、やり過ぎた。
俺はこれから自分の身の危険を感じながら遊園地を走り回るのであった。

その日の夜。
「たく、大河め。弟のくせに生意気だ」
私はタオルで髪を拭きながらベッドに座った。
「せっかく楽しい思い出になりそうだったのに、最後の最後で私をからかいやがって、あー、ムカつく」
私はそう言って、ベッドに横になり、枕に顔を埋めた。
「でも、冗談だったけど好きって言ってもらえて嬉しかったな」
って、私は何を考えているんだ？私は産まれてはいけなかった人間なんだから、嬉しいって思っちゃ駄目なのに。何故、心が満たされてしまうんだろう？

私は枕の近くに置いておいたクマのヌイグルミを手に取り抱きしめた。
大河ががんばって取ってくれた物。
私はそれがとても嬉しかった。・・・・・今日ぐらいは嬉しがってもいいことにしよう。
「・・・・・そういえば、大河にこれのお礼を言うの忘れていたな」
今度、会ったらお礼を言わないとな。
私はそう思いながらヌイグルミ抱いたまま眠りに付いた。
今日はきちんと眠れそうだな。

揚羽ルート４　冗談を言うのは命がけ（後書き）

次回予告
作《大河、遊園地に行った筈なのに、なんでそんなにボロボロなの？》
大《ある人に冗談を言ったら、こうなりました》
作《ああ、あの人か。お前も命知らずだな》
大《うるさい。それで次の話はどうなるんだ？》
作《次は、鈴達と組み手をやってもらいます》
大《姉さんとは？》
作《ん～、大河がボロボロだし次回は止めとくかな》
大《ありがとう。本当にありがとう》
作《普通そこまで感動するか？》
大《だって、姉さんときたら、我が儘だし、自分が満足するまでやり続けるし、自己中なんだよ》
作《大河、後ろ》
大《え？》
揚羽《ほほ、我が弟がそんなことを思っていたなんて、姉さん知らなかったな》
大《！》
揚羽《まあ、なんだ、これからのお前の使い方に付いて、ちょっと向こうでお姉さまと話そうか》
大《あ、いや、引っ張らないで》
揚羽《まあ、そう言わずに早く私に付いてこい》
作《・・・・・連れて行かれちゃった。まあ、いいや。それでは今回はここまで、次回もよろしくお願いします》
大《止めてえええええ！！！！！》
作《・・・・・口は災いのもとなんだな》

揚羽ルート5　老人の依頼

「駄目だな」
私は真っ赤に染まった手を見ていた。
「最近のは壊れやすくてつまらない」
私は転がっているそれを蹴り飛ばした。
「おご」
それは見事にゴミ箱に突っ込んだ。
「やっぱり、あいつではないと駄目だな。あいつじゃないと私を満足にさせてくれない。うっ！」
私はそう思うと突然、頭に痛みが走り頭を押さえた。
「だ、駄目だ。あいつはだけは駄目だ。あいつは私にとって、うっ！」
ちっ、もう出てきたか。まいい、それで、あいつは私にとっての何なんだ？
「あいつは私にとって大切なんだ」
でも、私はあいつに選ばれてはいけない。
「だ、黙れ！お、お前に私の何がわかる！」
わかるさ。私はお前なんだから。
「で、でも、私はこんなことを望んでいない」
いや、違うね。お前は心のどこかで望んでいるだろ。もっと壊したい。もっと暴れたいってね。
「うるさい！」
私はビルの壁を拳で殴った。ビルの壁はいとも簡単にその部分が壊れてしまった。
「私は絶対にそんなことを望まない。望んでたまるか」
・・・・まあいいさ。今日はもう時間だし、私は去るとしよう。でも、これだけは私はお前なんだから、いつでも、お前の側にいることをな。それじゃあ、私は消えるよ。

その言葉が聞こえてきた瞬間、私の心から何かがいなくなった気がした。
「消えたか」
私はそっと、真っ赤に染まった自分の手を見た。
自分には覚えがない拳の感触。でも、それは確かに私の中にある。
「この頃、頻繁になってきたし、体が疼くのも早い。気を付けなければ私はあいつを壊してしまう」
それだけは絶対に避けなければ。
私は心にそう思いながら、その場を去った。

「うりゃあああああ！」
「打ち抜けええええ！」
渚と鈴は一斉に俺に襲いかかって来た。
「遅い」
俺はそれを簡単に避ける。
今、俺たちは中庭で武道大会の為の特訓中です。
「優燈！」
「アイアイ」
鈴の合図と共に優燈が俺に向けて撃ってきた。
「鈴と渚が囮という作戦はいいと思うけど、囮に当たったら意味ないよね」
俺は鈴の腕を掴んで引っ張り、銃弾の壁にした。
「危なっ！」
そしたら、鈴はすぐに自分に向かってくる銃弾を撃ち落とした。
「そして、優燈。当たっても当たらなくてもさっさと移動しろ」
そしてその後、弾に意識が向いていた鈴を思いっきり優燈に向けて投げ飛ばした。
「きゃあ！」
「にゃあ！」

優燈と鈴はぶつかり気絶した。
「まず、二人」
後は。
「隙ありいいいい！」
渚が後ろから木刀を降り下げてきた。
「渚は気を使えるようになってきたが。まだまだだな」
俺は木刀が振り下ろされる前に渚の脇腹に回し蹴りをいれた。
「ごほっ！」
渚はそのまま横に飛んで、そのままうつ伏せに倒れてしまった。
「そこまで」
龍が試合終了の合図をだした。
「ふぅー、音葉、剛。みんなの手当てを頼む」
俺は呼吸を整えながら音葉と剛に言った。
「へいへい」
「はい。わかりました」
音葉と剛はすぐに動き出した。
「鈴さん、優燈さん、大丈夫ですか？」
「また、負けちゃった」
「う～、どうせなら。大河に殴られて気絶したかった」
なんか、やばいことを言っているけど気にしないことにしよう。
「くそ、なんで勝てないんだ」
「そりゃ、大河は姐さんとタメを張られるから、そう易々と負けるはずかねえよ」
渚は脇腹を押えながら、剛に肩を借りこちらに歩いてきた。
「はい。大河。リストバンド」
透はリストバンドを俺に手渡してきた。
「サンキュー」
俺は透からリストバンドを受け取り、手足に巻きつけた。
そういえば、透って久々に話に出てきたんじゃないのか？もしかして、作者に忘れられていた？

はい。忘れていました。
「龍。タイムは？」
「お前を相手に十分は持つようになってきたよ」
龍はストップウオッチを見ながら言ってきた。
そこまでいけば大会では上位の方にはいけるな。
「ほほほ、やっているの」
そんなことをやっていると、塀の上から声が聞こえてきた。
「何やっているの爺さん？」
塀の上を見てみると、煉磨が立っていた。
「散歩じゃ」
散歩なら普通に道を歩けよ。
「まあ、それはついでなんじゃけど。大河、今日はお主に用が合ってきた」
「俺に用？」
俺、何かしたっけ？
「そうじゃ、、ああ。こんな所でもなんだし、ちっとワシに付いてきておくれ」
煉磨はそう言って、塀の向こう側に降りた。
「と、いうことだから、後はみんな自由にやっていてくれ」
俺はそう言い残して、煉間の後を追うように壁の向こう側に跳んだ。
道路に着地すると、煉磨が待っていたので、煉磨と共に歩きだした。
「それで、話って何？」
「お主、最近街の方で起こっている事件を知っておるかの？」
「いや、知らない」
「そうか、実はな、この頃強者達が何者か襲われて病院送りになっているんじゃ」
俺はそれを聞いて、ある人物のことを考えた。
「まさか、姉さんが？」

「それはまだわからん」
わからないということは可能性があることだよな。
「ワシが揚羽に聞いた時には知らないと言っておった」
煉磨は髭を撫でながら言ってくる。
「できれば、ワシも揚羽ではないと願いたい」
「それは俺も一緒だよ。それで、俺に何をしてほしいんだ？」
そんな話をしてくるんだから、キチンとした訳があるんだろう。
「その犯人をお主が倒してくれ」
「姉さんや生徒達、爺さんじゃ駄目なのか？」
「生徒たちだと返り討ちにあうだろうし、揚羽だと不安がある。それにワシだと出てこない確率がある」
まあ、それもそうか。
「OK。わかった。引き受けるよ」
「すまぬな」
「あ、でも報酬は貰うから」
「ちゃっかりしておるな」
だってそうしないと、割が合わないんだもん。
「それで、相手の特徴とかどうなっているんだ？」
「全身黒尽くめに黒の帽子を被っており、周りからは死神と呼ばれている」
「わかった。今日から探してみるよ」
「ああ、頼むな」
「へいへい」
さて、今日の夜から忙しくなるな。

揚羽ルート5　老人の依頼（後書き）

次回予告

作《さあ、どんどん話が進んで来たな》

大（そうだな）

作《次回はいよいよ、謎の人物と勝負だな》

大《もちろん勝つよな》

作《さあ、今ネタばれしちゃあ。駄目だろ》

大（それもそうか）

揚羽ルート6　出会い頭に

「ヤバイな。とうとう、動き出したか」
一番恐れていた事が起こった。
「まあ、今の私ならあいつを倒すのはたやすいが。もう、一人の私が嫌がるからな」
困ったもんだな。
私はあいつを壊したい。でも、そうしたら悲しむ自分がいるからな。
「あー、面倒だ。いっそうの事、あいつも壊して、あいつを壊したショックから私も壊すか」
そうだ、そうすれば。私を止める奴なんていない。私は自由になれるんだ。それなら善は急げ。早速取りかかろう。
「見つけた！死神」
そうしていたら、目当ての少年から話しかけられた。
探す手間が省けたな。
「飛んで火にいる夏の虫ってのことはこのことだな」
私は拳を作り、
「恨みは無いが私の為に壊れてくれ」
その少年に襲いかかった。

煉磨に頼まれて、捜査を始めて一週間が経過した。
「はあ、今日も見つからないな」
しかし、この一週間目的の人物どころかケンカをしている所にも巡り合わない。
やっぱり、もう少し爺さんから情報を貰っとくんだったな。
「まあ、今頃になって言っても仕方がないから、とりあえず気配でも探ってみるかな」

俺は眼をつぶり、意識を集中させた。
この近辺では、大きい気配はないから、もう少し公園の方でも調べてみるか。
「・・・・・なっ！」
公園の方を調べた瞬間、邪悪な気配を感じた。
「いきなりヒットするとはな」
それとも、誘っているのか？
罠かもしれない、しかし爺さんに頼まれた以上行かなければいけない。
「俺もそんな役柄だよな」
俺は苦笑いをしながら、急いで公園に向かった。
思った通り、全身黒尽くめ人物がいた。
「見つけた！死神」
俺は話を聞く為、死神に近づいていく」
「恨みは無いが私の為に壊れてくれ」
そしたら、突然、死神が襲いかかってきた。
「いきなりか」
死神は俺の顔面を殴りかかってきた。
「こなくそっ！」
俺はギリギリでそれを避けた。
こいつはフェイク。狙いは。
「こっち！」
俺は手に気を溜め、狙いを定めて殴りつける。
「ほう、私の膝を受け止めたか」
思った通り、死神は俺の脇腹に向けてひざ蹴りをしていた。俺はそれを自分の拳で押さえこむ。
「おりゃ」
俺はそのまま相手の顔面に向けて裏拳をした。
死神は意図も簡単にそれを避け、距離をとり。
「くくく、はははははは」

そし、いきなり笑いだした。
「いやー、いい。実にいい、大抵の奴はさっきので終わってしまうんだけど。やはり、お前は私の期待を裏切らない」
こいつ、俺の事を知っている？
「今度は、少し本気でやるから」
死神は戦闘態勢に入り
「簡単に壊れるなよ」
「なっ！」
そして、気がついた時には、目の前にいて、正確に俺の右目を狙ってきた。
「くそ」
俺はギリギリでそれを避けたけど、頬にかすってしまった。
「おりゃ」
「遅いよ」
死神はそれを避け、また距離を空けた。
くそ、こいつ確実に狙いにきている。
俺は頬から垂れてきた血を袖で拭った。
「くくく、いいね。それでこそ私が認める人物だ」
死神は血が付いた指を舐めた。
「そりゃあ、どうも」
死神が俺を認める？ということは俺が知っている人物ってことになるのか？それに、一瞬で、俺の間合いに入ってきたし、一体何者なんだ？
俺はある人物が頭によぎったが、すぐにその考えは捨てた。
「それより、お前も早く本気を出した方がいいぞ。壊れてしまうからな」
俺が気がついた時には、相手が顔面に向けて蹴りを入れてきた。
「考えごともさせてくれないのかよ」
俺も蹴りで対抗した。
蹴りと蹴りはぶつかり合い、また、二人の間に距離を取った。

こりゃあ、本当に本気でやらないとやられるな。
俺はすぐに手足首のリストバンドを外した。
「どうやら、本気になったみたいだな。これなら、私ももう少し本気になって大丈夫だろう」
あれで、まだ本気を出していないのか？
「くそっ」
俺は相手と距離を詰めて、拳を放つ。
「こっちはフェイント。狙いはこっちだ！」
死神は拳を避け、左の脇腹部分をガードした。
そこには、俺が狙いを定めて放った膝が合った。
「なっ」
俺は驚いた、相手の死角をついて放った筈なのに、いとも簡単に塞がれてしまった。
「狙いはいい、力もある。でも、まだまだだ」
ヤバイ。
俺はすぐに死神から距離を取った。
「さて、そう簡単に壊れてくれなかった。お礼をしないとな」
死神がそういうと、死神から禍々しい気が溢れて来ていた」
「はあああああ」
そして、その禍々しい気は死神が集中することによって右手に集まり。
「鬼流奥義、死鬼煉獄弾」
俺が気がついた時には懐に入られ、思いっきりその右手で腹を殴られてしまった。
「がはっ」
俺はそのまま後ろに吹っ飛び木にぶつかり、そのまま崩れ落ちた。
く、こいつ。俺の木のガードごと関係なしにふっ飛ばしやがった。
「お、あれを喰らってまだ壊れていないか。さすがは私が認めた奴だ。でも、」
死神の腕にまた禍々しい気が溜めっていく。

おいおい、次は防げねーぞ。
「これで止めだ！死鬼煉獄弾！」
死神はそう言って、俺に技を放とうとした。
「ぐ、ぐあああああああああ」
そしたら、死神が突然頭を押さえ叫んだ。

お前、あいつに何をしている？
「何ってこいつを壊そうとしているんだよ」
私は頭を押さえながら答えた。
私はそんなことを望んでいない。
「いや、望んでいるよ。だから、私がこうやってこいつを壊そうとしている」
違う。
「違わないさ。私はお前で、お前は私なんだから。お前の心は本当は望んでいるんだよ。こいつを壊せとね」
うるさい。
「本当はわかっているんだろ。自分でもこいつを壊したいって。壊して満足したいって」
「うるさあああああああい。お前に私の何がわかるんだ！」
私は大河が目の前に関わらず、叫んだ。
「私は壊したくないんだ。こいつだけは絶対壊させはしない」
まあいいさ、ただし、忘れるな。お前は私で私がお前なんだから。私が望むことはお前が望むことなんだから、いずれ、お前もこいつを壊したくなる。
「私は絶対にそうならない」
どうだがな。それじゃあ、私はそろそろ行くよ。
その瞬間、私の心の中すごく軽くなった気がした。
「お、おい、お前は一体誰なんだ？」
そしたら、大河が私に話しかけてきた。
「大河、すまない」

でも、私は自分の正体をばらさず、それだけを言い残しその場を去った。

揚羽ルート6　出会い頭に（後書き）

次回予告

作《次回は報告してもらいます》

大《なあ、これって本当に姉さんルートなんだよ。俺、何回かしか姉さんと一緒に出かけてないんだけど》

作《大丈夫。次の話の中にイベントを用意してあげたから》

大（ならいっか）

揚羽ルート7　2人で登校と不安な気持ち

「まさか、お主が負けるとはの」
煉磨は驚きを隠せないようだ。
「ごめん。役に立たなくて」
俺は腕に包帯を巻かれながら謝った。
俺は朝早くから聖純院に来て、夜に起こったことを報告していた。
「大河。終わったぞ」
揚羽はそう言って、俺の頭を叩いた。
俺、一応怪我人なんだけど。
「ありがとう。姉さん」
俺はそう思いながらもお礼を言っといた。
「何、弟が怪我をしたんだ。それぐらい姉が治療してやらないとな」
揚羽はそう言い残し、煉磨の部屋から出て行った。
「しかし、お主が負けるとなるとワシ自ら出ないといけないの」
煉磨は真剣に考えていた。
「あれ、次に出るのは姉さんじゃないの？」
俺は不思議に思った。久々の強敵が現れたのだから揚羽が適任だと思う。
「いや、揚羽が行くと死神は出ないだろう」
「なんでさ？」
「ワシの予想だと、死神は揚羽だ」
煉磨は髭を撫でながら語った。
「実の所言うとなこの頃、揚羽は夜中になるとフラッとどこかに行くのじゃよ。しかも、全身黒ずくめでな」
「でも、姉さんなら俺に攻撃をしてこないし、第一にあいつは聖純流ではなく鬼流と言っていたんだぞ！」
俺は思わず叫んでしまった。
「わかっている。だから予想だと言っているだろう！」

俺と煉磨の間に沈黙が訪れる。
「・・・・・ごめん。熱くなった」
「・・・・・それはワシもだからお互いさまじゃ」
煉磨はお茶を一口飲んだ。
「実際のところワシも信じたくない。でも、今日の明け方に帰ってきた時に黒ずくめの服のあちこちが擦れていたし」
「そこまで、もう言わなくていい」
俺は煉磨の話が続きそうなので止めた。
「とにかく、この件は俺が引き受けた以上。俺がやる。爺さんは手を貸さないでくれ」
俺はそう言って立ち上がった。
「わかった。そこまで言うなら。ワシはもう何も言わない」
「ありがとう」
俺はそう言って、煉磨の部屋から出た。
「話は終わったのか？」
俺が玄関に向かうと揚羽が制服姿で待っていてくれたようだ。
『死神は揚羽だ』
頭の中で煉磨の声が響いてくる。
「大河？」
「・・・・・ああ、終わったよ」
俺は揚羽の声でボーっとしていたことに気が付き、すぐに返事をした。
「なら、さっさと学校に行くぞ」
「え、あ、ちょっと待ってよ」
揚羽が外に行くのを見て、俺もさっさと靴を履き揚羽の後を追った。
き、傷に響くな。
「なんだ、大河。だらしないな」
「仕方がないでしょ、一応これでも怪我人なんだから」
「そんなの怪我した内に入らない」

少しは怪我人に優しくしようよ。
「優しくしてほしいなら私に金を寄こせ」
揚羽はそう言って手を差し出してきた。
「心の中を読まないで頂戴。しかも、便乗してカツアゲなんて酷くない？」
「カツアゲではない、れっきとしたバイト料だ」
「人に優しくするだけでバイトなの？」
「もちろん。私が優しくしてあげる代わりに一分につき７４０円な」
「しかも分給。どんだけえげつないんだよ」
「あはは、まあ、それはさておき。お前がそんなに怪我をさせるなんて一体、どこの流派の奴だったんだ？」
「確か死神は鬼流と名乗っていたけど」
しかし、あの死鬼煉獄弾っていう技。名前が違うけどどっかで見た覚えがあるんだよな。どこだったけ？
「鬼流か。聞いたことが無い流派だな」
「姉さんも知らないんだ」
「ああ、私も今まで色々な奴を相手してきたが。鬼流というのは初めて聞いた」
姉さんでも初めて聞く、流派なんだ。てっきり、相手が強いから姉さんなら知っていると思ったのにな。
「まさか、姉さんが死神だったりして」
俺は今日、煉磨の考えを思わず呟いた。
「・・・・・」
揚羽はそれを聞いて立ち止まった。
「ど、どうしたの姉さん。いきなり立ち止まって」
俺はいきなり立ち止まった揚羽に驚きながら振り向いた。
「い、いや、なんでもない気にするな」
そう言い残し再び歩き出した。
まさか、本当に姉さんが？
俺はその様子を見て、思わず考えてしまった。

いや、絶対にそれだけはありえない。
「なあ、大河」
揚羽は突然俺を呼んできた。
「ん？」
「もし、私が死神だったらどうする？」
「姉さんが死神だったら？」
「そうだ。昨日お前が負け、そして、また戦う死神が私だったらどうする？」
揚羽は真剣な表情をしながら俺を見据えてくる。
「倒す」
俺は揚羽が真剣だったので自分も真剣に答えた。
「死神が姉さんだろうとなんだろうと関係ない。俺はただ自分の力をすべて使い倒す」
「負けたのにか」
「それは俺が弱かっただけのこと、俺が死なない限り何度でも倒しに行く。ましてや、それが姉さんならガキの頃みたいに何度でも立ちふさがって止めさせてやる」
「あははは、楽しみにしているよ」
揚羽は俺の言葉を聞いて笑った。
「うん、楽しみにしていたよ」
俺も釣られて笑った。
でも、俺はその笑顔とは裏腹に不安を感じていた。
姉さんが死神？それだけは絶対に嫌だな。

揚羽ルート7　2人で登校と不安な気持ち（後書き）

次回予告

作《次はまた戦闘になります。大河は治療の為、お休みです》

揚羽ルート8　再戦

「駄目だ。やはり壊れやすくて困るな」
私はそれを思いっきり地面に叩きつけた。
やはり、大河がいい。
「壊れにくく、壊しがいがある奴はあいつしかないからな」
でも、あれだけの怪我をしたんだ。今日は来ないだろう。
「ん？」
私はそう思っていたら、知っている気配がした。
「でも、まさか」
私は戸惑った、なんせ自分に向けて敵意をむき出しなんだから。
私に敵意を出すのは一人だけ知っている。
「お前がその気なら私もきちんと答えないとな！！」
私はその気配に向かって移動した。
そして、着いた場所は昨日の公園だった。
「くくく、やはり。お前か」
私は公園の中央にいる人物に向かって叫んだ。
「大河！！」
そして、私は襲いかかった。

「大河！」
死神はいきなり、俺に会った瞬間、襲いかかってきた。
俺はそれをかわし、追い打ちをかける。
「甘いっ！」
しかし、死神はそれを意図も簡単に避け、俺から距離を置いた。
「ほほう、今日は最初から本気のようだな」
死神は俺にリストバンドが無いことに気が付いたみたいだ。
「当たり前だ！」

俺は前回みたいに負けられないんだ。
「それこそ、壊しがいがある」
死神は一気に距離を詰め、蹴りを放ってくる。
「当たるか！」
俺も蹴りを放ち、死神の蹴りを受け止める。
「ほう、受け止めるか。それならこれはどうだ！」
死神はそのまま回し蹴りをしてきた。
「くっ！」
俺はそのまま蹴りをお腹で受けとめた。
「ただではやられるか！」
俺はそのまま足首を捻ろうとした。
「させるかっ！」
死神は捻る方向と一緒に体を回転させて、俺の顔面に蹴りを放つ。
「あぶなっ！」
俺は思わず手を離し、その手でガードをした。
「痛うう。次はこっちだぞ！爆流脚！」
俺は一気に距離を詰め、
「重技、紅龍覇！」
俺は両手で死神の胴に向け放つ。
「ごほっ」
死神はそのまま技を喰らい後ろに下がった。
「・・・・・」
俺はそれをただ見て手応えがないことを感じていた。
わざと後ろに下がり威力を殺したな。
「いいな。実にいい。それじゃあ、今度は私の番だっ！」
死神から禍々しいオーラーが噴き出てきて、それが右腕に集まって行く。
死鬼煉獄弾がくる！
「ボーっとしているな！」
気が付いた時には懐に入られていた。

「鬼流奥義、死鬼煉獄弾！」
「させるか、琥牙流奥義、神喰い！」
俺は左手で死神の右手を受け止めた。
「ほお、私の気を喰らって受け止めたか！だが、喰いきれるかな？」
「なっ！」
俺は驚いた。死神の言葉の通りに死神の右手に集まった気を吸収していたが、逆に左手が絶えれなくなってきている。
「やばい！」
俺は急いで左手を離した。
「鬼流奥義　鬼棘一閃」
「ごほっ！」
そして、今度は右の脇腹にオーラが集まった蹴りを喰らい、俺はそのまま横に吹っ飛んでしまった。そして、すぐに立ち上がる。
あ、危なかった。瞬間的に脇腹に気を集中させといてよかった。
でも、脇腹にモロに喰らってしまい。骨を折ることは無かったがダメージは深刻だ。
「あはは、まだ。壊れないとは。お前は私の期待を裏切らないな」
死神は俺の様子を見て高笑いをした。
「でも、後少しで壊れるな」
死神はゆっくりと俺に近づいてくる。
それが俺にとって死刑執行のカウントダウンに見える。
くそ、俺はこいつに勝てないのか？
目の前には化け物。そして、俺は怪我人。これはどう見ても差がありすぎる。
いや、勝つ手段はある。でも、あれは危険すぎる。
「それじゃあな！鬼流奥義　鬼人刃！」
死神は俺の首筋を狙い手刀を放って来る。
「躊躇う余地はないか」
俺は手刀が当たる瞬間、眼帯を外した。
その時、俺の首筋に手刀が当たった。しかし、俺の首はビクとも

しなかった。
「何！」
死神は驚いた。なんせ、普通この技が当たったら首の骨が折れても当たり前なのだから。
「悪いな。もう力加減できない」
俺は死神の腕を掴みそのまま投げ飛ばした。
「くっ！」
死神はすぐに体制を立て直し、地面に着陸した。
「まだ、私に壊されてくれないのか。いいだろ、私も全力でお前を壊してやる！」
死神から禍々しい気が噴き上がる。
「いくぞ！」
「それはこっちのセリフだ！」
その後、俺と死神は防御を捨て、ひたすら殴り合った。
何故なら、一瞬でも防御をすれば隙ができ、その隙で勝負が決まってしまうからだ。
俺と死神はそれを直感していた。
「おおおおおおお！」
「はあああああああ！」
両者とも一歩に引かずに殴り、殴られ、蹴り、蹴られ。
これは、もはや時間の問題だ。
「とっとと、壊れろ！鬼流奥義　蛇鬼！」
「てめええが潰れろ！琥牙流奥義　災鱗！」
俺と死神は同じタイミングで技を放った。そして、俺と死神の技は、お互いの顔をかすった。その時、死神の帽子が飛んだ。
帽子の中から、見覚えのある黒髪が流れ出てきた。
「なんでだよ？」
俺は死神の帽子に隠れていた目を睨みつけた。
「なんでなんだよ！」
「・・・・・・・」

死神は何も答えない。
死神は揚羽だ。
煉磨の声が頭に響く。
あまり考えたくなかった。思いたくなかった。でも、目の前にいる人物のおかげでそれが現実だと自分に言い聞かせてくる。
「答えろよ！聖純揚羽」
俺は目の前の人物、死神もとい聖純揚羽にむかって叫んだ。

揚羽ルート8　再戦（後書き）

次回予告
作《いよいよ、死神の正体がわかりましたね》
大《ああ、まさか、揚羽姉さんだとは思わなかったよ》
作《でも、読者の方はわかっていたのかも知れないね》
大《まあ、あんだけ犯人がわの視点でやればわかるでしょ。ところで次の話はどうなるの？》
作《え～とね。もう、忘れていると思うけど。大会に入っていきます》
大《じゃあ、次からもバトルが入ってくるの？》
作《まあ、そうなるね。それでは、みなさん。次回も楽しみにしていてください》
大

揚羽ルート9　告げられる言葉

死神が揚羽だと解り、一週間が経過した。
青空が広がる中、グランドでは今週の土曜にある体育祭の練習が行われていた。
でも、俺はそれに参加しないで、屋上で寝ころんで考えごとをしていた。
考えていることはもちろん揚羽のこと。
あの後、揚羽は俺の目の前から逃げるように立ち去った。
俺はその後、携帯で煉磨に連絡し、揚羽の事をふせて状況を説明した。
煉磨はお礼をすると言ってきたが、俺は揚羽のことを隠しているのでそれを断っておいた。
そして、それから俺は揚羽に今までのことを説明してもらいたくて、この一週間、何度も会いに行ったが、揚羽に会うことはできなかった。
確実に避けられているな。
「おい、不良少年。授業サボって何をやっているんだ？」
そんなことを考えていると、誰かに話しかけられた。
「ん？」
俺が寝転がったままそちらの方を見てみるとそこには、今まで避けられていた揚羽が立っていた。
「俺と同じで授業をさぼっている人にそれは言われたくないよ」
俺は起き上がりながら言い返す。
「あはは、確かにな」
揚羽は笑いながら俺の隣に座った。
「とりあえず、まず礼を言わせてくれ。私のことを爺に言わなくてありがとう」
「別にいいよ、それぐらい。そんなことよりも、なんで今まで俺の

事を避けていたの？」
俺は単刀直入で聞いた。
「・・・・・それは言わないと駄目か？」
「言いたくないなら言わなくてもいい。それはもちろん死神のことも含めてね」
本当は聞きたいけど、無理意地は良くないよな。
「いや、大河には迷惑をかけたから話すよ。まず、避けていたのはこの一週間、私なりに考え事をしていた」
「考え事？」
「ああ、今までのことをどうやって説明しようか？ってな。もし、考えが纏まらないうちに、お前に会うと私はどうゆう行動をするかわからなかったんだ。だから、お前を避けていた」
「じゃあ、今、俺に会っているってことは考えが纏まったってこと？」
「ああ、そうやって解釈してほしい。それで、何から聞きたい？」
「とりあえず、今までのことを全部聞きたい。姉さんに何が起きているのか？どうしてそうなったのか？全部」
「それを話すにかなり時間がかかるけどいいか？」
「ああ、かまわないよ」
「わかった」
そうして、揚羽は話し始めた。
自分が子供の頃、力の使い方がわからずに親を傷つけて、聖純家に預けられたこと。自分は本当は産まれてはいけない存在だという事。力の暴走により、夜になると性格が変わり、強い奴なら誰でもいいから破壊したくなること。自分は本当はそんなことはやりたくない事と。様々なことを聞かされた。
「最近では、夜の方の私が本当で昼の私が偽物と思えてきてしまっている始末だ」
俺はそれを黙って聞いている。
「なあ、大河。お前はどう思う？こんな私をお前は化け物と思うか

？」
揚羽は悲しそうな顔をして静かな口調で聞いてきた。
「・・・・・思うわけないだろ」
俺はそっけなく答える。
「姉さんが化け物なら、姉さんと渡りあえる俺もその化け物の仲間に入る。いいじゃないか、人がなんて呼んでこようが関係ない。要は自分がどのように思うかだ。周りが姉さんのことを化け物と呼んでも、俺や龍達は絶対に呼ばない。姉さんはどっからどう見ても、普通の女子高生だ」
「あ、ありがとう。大河」
揚羽を見てみれば今にも泣きそうで、瞳に涙を溜めている。
「私は良い弟を持ったよ」
「それはよかった」
俺は心からそんなことを思っていた。
さて、後は姉さんのもう一つの人格の方だな。ようは、姉さんの力が暴走している為にもう一つの性格が出て来ている訳だから、その暴走をどうにかすればいいんでしょ。なら、話は簡単だ。それには、姉さんの協力も必要だな。
「ねえ、姉さん。死神と話しできるの？」
「ん？ああ、私と性格が変わる時にできるぞ」
「じゃあ、伝えてほしいことがあるんだけど、いいかな？」
「ん？ああ、構わない」
「それじゃあ、大会の決勝に壊し合いをしようと伝えといて」
「え？」
揚羽は俺のセリフを聞いて固まってしまった。

揚羽ルート9　告げられる言葉（後書き）

次回予告
作《いよいよ、武道大会が始まります》
大《お、いよいよか》
作《長かった。やっとで、揚羽ルートも終盤に差し掛かってきた》
大《お疲れ様》
作《大河を苛める機会が少なくなってきている》
大《俺的に喜ばしいことだな》
作《私的には大河をもっと苛めたい》
大《あのさ、前から思ってたけどもう少し、主人公に優しくしようよ》
作《絶対に嫌だね》

揚羽ルート１０　試合前の会話（前書き）

更新が遅れてすみません

揚羽ルート１０　試合前の会話

「とりゃあああああ！」
「勝者、聖純鈴」
「はっ！」
「勝者、井上渚」
「撃ち抜け」
「勝者、朝瀬優燈。これを持ちまして２―Ｆの勝利が決まりました」
「「「「うおおおおおおお」」」」
周りで観客達が叫んだ。
俺達は今、体育祭の武道大会のまっさい中で今、準決勝が終わり俺達は無事に決勝に勝ち進んだ。
「いや～、俺達の出番が無いから楽だわ」
剛はのんびりとしていた。
「まあ、あんだけ稽古を付けてやったんだから。これぐらいはしてもらわないと困るよ」
俺も鈴、渚、優燈の三人を見ながら感想を述べた。三人は今、クラスの女子達とお話をしている。
「でも、次はいよいよ姉さんのクラスだ」
「ああ、俺達も確実に出るな」
そして、俺は姉さんと
「どうした、そんなつらそうな顔して？」
どうやら、顔に出ていたようだ。
「いや、なんでもない。ちょっと、試合前でぶらついてくるよ」
「あいよ」
俺はそう言って剛と別れた。

「こんなところで何している？」

俺達の試合が始まるまで屋上で昼寝をしていると、揚羽が現れ話しかけてきた。
「なんだ、姉さ、いや、今は死神の方か」
俺は起き上がり姉さんを見る。
「ほう、よくわかったな。なんでだ？」
「別にただ俺に向けての殺気が強かっただけだ。それに、姉さんはそんな禍々しい気を放っていない」
「あはは、確かに」
揚羽は俺の言葉を聞いて笑った。
「それで、何か用か？」
「別に、お前が私に恐れて逃げたのかと思って探っていただけだ」
「そっか、それで姉さんもこの会話を聞いてんの？」
二重人格みたいなもんだからな。
「いや、あっちは今、眠ってもらっている」
「そうか」
「それで、お前は本気なのか？」
「何が？」
「私と壊し合いをするのがだ」
何をいまさら。
「ああ、本気だ」
「まあ、私は別に良いんだがな」
「それに、俺は姉さんと約束したんだ。お前を全力で倒すと」
「あはは、全力でやるのを楽しみにしているよ」
揚羽はそう言い残し、その場を去った。
本当に何しに来たんだろう？

「それではこれより決勝を行います」
「「「「うわあああああ」」」」
司会者の声と共に周りのギャラリー達が騒ぎ出す。

「では、選手たちの入場です。赤コーナーより、我が校の人気者、聖純揚羽率いる3ーAの入場です」
会場に揚羽と共に四人の男子生徒が上がった。
「そして青コーナーより、先生生徒たちに頼られ者、琥牙大河率いる2ーFの入場です」
俺達も司会者の発表により会場に上がる。
「いよいよ、今年度の優勝チームが決まります！優勝はどのチームになるんでしょうか？ご期待です」

揚羽ルート１１　決勝戦、始め！！（前書き）

すみません、時間がないので短めです。

揚羽ルート１１　決勝戦、始め！！

試合は激戦でいよいよ次は大将戦。
　副将戦まで作者がめんどくさがって省略しました。
今までの成績は一勝一敗二引き分けでどちらも譲らない戦いをしていた。
「つか、剛。お前、弱すぎ」
　なんで試合開始、一発で吹っ飛ばされんだよ？
「仕方がねえじゃん。俺の相手、筋肉ゴリラだったんだぞ！しかも、ラグビー部のキャプテン」
「さて、剛に比べて、鈴、渚、優燈。お前らは良くやったよ」
　俺はそんな剛を無視して話を進める。
　鈴は最後まで諦めないで戦い一勝をし、渚、優燈もいい勝負をしていたが時間切れ。
「うん。がんばった」
「納得せぬ。なんで時間切れというルールがあるのだ？」
「褒めるなら布団の中で褒めて」
　三人それぞれ感想を言ってくる。
「あと五分で大将戦が始まりますので、選手は舞台に上がってください」
　その時、アナウンスが会場になり響く。
「さて、そろそろか」
「大ちゃん、がんばってね」
「無事を祈る」
「勝ったらご褒美を上げる」
「姐さんをぶっ倒しちまえ！」
　俺はみんなの声援を聞きながら、自分の力を制御するものを取り、舞台に向かおうとする。
「あ、そうだ。この試合、俺が勝っても負けてもみんなに伝えたい

ことがあるから」
「もしかして、いよいよ私と付き合うことにしたの？」
優燈そのネタもういいから。
「違うよ。それに、優燈。お前なら俺の気持ちをわかるだろ？」
「なんだそっちか。じゃあ、決心したの？」
「ああ、した」
「ん、なんの話し？」
鈴は状況が掴めていないようで話に割り込んでくる。
「私が振られちゃったて話し」
「それっていつものことじゃない」
「むか」
「ひゃ～、ごめんなさい」
優燈は鈴の一言にムカついて左右の頬を引っ張った。
「ごめんな。優燈」
「いいよ。どうせ薄々感じていたし。でも、幸せにさせてあげないと駄目だよ」
「わかっている」
それぐらい、だから俺は壊しあおうって言ったんだ。
「大河選手早く舞台に上がってください」
優燈と話していたらアナウンスに急かされた。
「んじゃあ、行ってくるよ」
俺はみんなに拳を突き出した。
「「「「おう」」」」
それに合わせてみんなが拳を俺の拳に合わせてくれる。

「ほう、よく逃げなかったな」
舞台に上がると揚羽が仁王立ちをしていた。
「自分から挑戦状を叩きつけたんだから逃げたら失礼だろう」
俺は構えた。

「そうだな。さて、そろそろ始めようか。私はもう我慢の限界だ」
揚羽も構える。
「それでは両選手準備が出来たみたいなので始めます。そして、ここで特別ルールが課せられます。皆さんが知っている通りに現在の成績は両チーム共に一勝一敗二引き分けなので、この試合は時間無制限。どちらかが負けを認めるか気絶するまでやりたいと思います。お二人ともそれでよろしいでしょうか？」
「ああ、いいぞ」
そっちの方が都合がいい。
「私もだ」
たぶん、揚羽も俺と同じ考えだろう。すぐに了承した。
「それでは始めたいと思います。レディー、ゴー！！」
「とりゃあっ！」
「はっ！」
レフリーの合図があった瞬間、俺と揚羽は一斉に飛びかかった。

揚羽ルート１２　戦闘

「はあああ！！」
「りゃあああ！！」
俺と揚羽はお互いに攻防を繰り広げていた。
揚羽が俺を拳で殴れば、俺は揚羽を蹴る。
俺が揚羽を殴れば、揚羽は蹴る。
お互い一歩も引かない力対力のぶつかり合い。いや、この二人にとってはもう殺し合いになっているだろう。
そして、俺と揚羽が蹴りをぶつけさせるとお互いに距離を取った。
「あはは、やはり、お前は最高だ。壊しがいがあって楽しいぞ」
揚羽は高笑いをする。
「そりゃあ、どうも」
後何分持つかな？
「さて、そろそろ、体も温まってきたし本番と行くか！！」
揚羽はいきなり突っ込んで来た。
「聖純流奥義、雷砲！」
そして、そのまま誰の目にも留まらない早さで俺に突進してくる。
「くっ、爆流脚」
俺はそれを避けようとし右に跳ねた。
「甘いっ！鬼流奥義　左翼閃」
そしたら、揚羽は俺が跳ねた方向に軌道を変え、俺に突進した。
「ごほっ」
俺はそのまま驚きながら吹っ飛ぶ。
「あはは、油断したろ。私が聖純流も鬼流もどちらも使うとはわからなかっただろう」
「ごほっ、ごほっ、つか、その鬼流ってなんなんだ？」
俺は呼吸を整えながら立ち上がる。
つか、さすがは雷砲。全身が痺れやがる。

「これか？これは私自信が作りだした我流だ」
通りで俺が見たこと無いはずだよ。
「私は力を扱えないで聖純院に引き取られたのは話したよな」
「ああ」
「そして、聖純院でこの力を制御できるように修行をしていった。そして、段々と力を制御できるようになってきて、この力を有利に使ってみようとしたのだ」
「それが鬼流？」
「ああ、そうだ。まあ、そのおかげで戦いに酔いしれる私が生まれてしまったんだがな。それじゃあ、長い話もしたことだし続きをしよう」
揚羽は距離を一気に詰めて、俺に蹴りをだしてきた。
「くっ」
俺はそれを防御する。
「そらそらそら！！」
揚羽は連続で蹴りを放ってくる。
一発、二発、三発、四発、
「おらあああああ！」
そして、止めとばかりに五発目を放とうとした。
「いまだ、琥牙流奥義　五後一拳！」
俺はその蹴りを避け、揚羽の腹に拳を入れ吹っ飛ばした。
「くうう、いいね」
揚羽体制を立て直し地面に着地した。
「四回目までのダメージを一気に拳に溜め、五回目の攻撃で出す。カウンター技。でも、まだまだ！」
揚羽の両拳に禍々しい気が集まって行く。
まずい、あれは。
俺は直感で悟ってしまった。
「鬼流奥義　蛇双竜」
そして、両手で俺を殴りかかってきた。

「くっ」
これは避けられない。なら
「琥牙流奥義、獅子天聖」
俺も両手を使い、技に対抗する。
そして、お互いの拳同士が合わさり体が止まる。
俺はその一瞬を逃さない。
「追技　回乱脚」
そして、揚羽の顎を狙い、蹴りを放つ。
「ごほっ」
揚羽はそれをモロに喰らい空中に飛んだ。
ん？変だな。普通なら避けた筈なのに。
俺は違和感を感じた。
「まあいい。このまま勝負を決めてやる」
俺は爆流脚をやり、揚羽と距離を詰め。
「はああ、琥牙流奥義　鳳凰天翔脚」
足、腹、胸、腕、首を蹴り、さらに空中に揚羽を上げていく。
「とどめだ！琥牙流奥義　琥空絶壁！」
そして、最後に鳩尾に向けて拳を放った。
「がはっ！」
揚羽はそれを避けようともせず、そのまま地面に落下した。揚羽が落下した部分に砂煙が巻き起こる。
「どうだ？」
俺は地面に着地し、砂煙の方を見た。
頼むから、立たないでくれよ。もう、俺も時間がないし。
「くくく」
そしたら、砂煙の方から笑い声が聞こえてくる。
「あはははははは。やはり、いいよ。お前は」
砂煙の方から揚羽が姿を現す。
俺はそれを見て驚いた。なんせ、揚羽には重症どころか、ダメージを与えた様子さえないんだから

「でも、そろそろ私は飽きてきた。だから」
揚羽は俺が気付いた頃には目の前にいた。
「壊れろ」
「ぐっ」
そして、揚羽は俺の鳩尾に拳を放った。
「鬼流奥義　死心帝」
俺はそれを喰らい吹っ飛び地面に倒れた。
くそ、まだ力を隠していたのかよ。
「悪いな。大河。お前では私を壊せぬ」
最後にそんな言葉が聞こえて、俺は意識を失った。

揚羽ルート13　覚醒

「あちゃ～、大河。負けたじゃん」
大河と揚羽の試合を見ていた剛はがっかりした。
「仕方がなかろう。相手はあの揚羽先輩なんだから。みしろ、ここまで戦った大河を褒めないと」
渚もがっかりしているみたいだ。
「ん？どうした、優燈に鈴？」
そこで違和感に気が付いた。さっきまで元気に応援していた2人がいきなり静かになってしまったから。
「大河が負けて悔しいのはわかるが、そんなに落ち込まなくてもな」
剛はその2人の様子に気が付き、宥めようとした。
「違うの」
そしたら、優燈が口を開いた。
「違う？何が違うのだ？」
「大河が負けたから落ち込んでいるんじゃないの、むしろ別」
「どういうことだ？」
「やっぱり、優燈も感じた？」
今まで黙っていた鈴も口をはさんで来た。
「うん。あれが目覚める」
「駄目だよ。早く止めないと」
鈴はいそいで舞台に上がろうとした。
「おい、待て。まだ試合は終わってないぞ」
渚はそう言って、鈴の腕を掴んだ。
「離して！早く、大ちゃんの所に行かないと」
「だから、さっきからなんなんだ？訳くらい聞かせてくれてもよかろう」
「だから、そんな暇がないんだって！」
「鈴。もう遅いみたい」

「え？」
「なっ！」
優燈の言葉でその場にいた全員が舞台を見た。
「オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」
そしたら、舞台から雄叫びを上げた大河がいた。
「な、なんなんだ。あれは？」
渚は大河を見ながら驚いている。そこにいるのは大河の筈なのに、大河じゃない。あれはまさしく首輪を解き放たれた獣だった。

私は大河に止めを刺した。
「これで私を止める者がいなくなったな」
私は大河に背を向けて、空を仰ぐ、後はレフリーが勝者を言うだけだ。
「どうだ？自分の手で大切な物を殺めたのは？」
私は自分の中に問いかけた。
・・・・・・・・・・。
もう一人は何も答えない。
そりゃあ、そうか。今頃、大河に止めを刺したことに絶望を感じているんだろう。これで、当分あいつは出てこないだろう。
「くくく、これでやりたい放題だ」
爺も私のことを感ずいていたが何も言ってこなかったな。まあいい、私を止めに来た時は叩き潰すだけだ。
・・・・・・何をそんなにおかしいんだ？
そうしていると、もう一人の私が声をかけてきた。
「なんだ？絶望に浸っていたんじゃないのか？」
絶望？何故、私が絶望を感じなければいけないんだ？
「そりゃあ、そうだろう。自分で大切な人を殺めたんだから」
殺めた？私が大河を？あはは、これは面白い。あいつは死んでないよ。

「死んでない？お前、大河を殺したショックにより気でもふれたか？」
私は正常だよ。いいか、もう一人の私。あいつを殺めたいんなら、確実に首を飛ばさないといけない。
「何を言っているんだ？」
本当に気でもふれたか？
ふれてないさ。なんせあいつは私と同じだからな。
「同じ？一体それは」
「オオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！」
どういう意味だと言おうとした瞬間、後ろから叫び声が聞こえてきた。
私は驚き振り返った。
そこには確実に止めを刺したはずの大河が叫び声を上げている。
どうやら、獣が起きたようだな。
あれは私と同じ。もう一人の私が言った言葉を今ここで理解した。
「くくく、あはははは。いいね、琥牙大河。ここまで私を楽しませてくれるとは、お前は最高だ。さあ、やろう。本当の壊し合いを。私をもっと楽しませてくれ」
私はそういい、大河に襲いかかった。

揚羽ルート１４　俺が止める

俺は気が付いたら闇の中を漂っていた。
なんで、俺がこんな所にいるんだ？
俺は今までの記憶を思い出そうとした。
「あー、そっか負けたんだっけ」
揚羽の一撃を喰らい俺は意識を失った。
「いや、まだ負けていません」
「誰だ」
俺はいきなり声が聞こえてきたので驚いた。
「お久しぶりです。宿主」
そしたら、目の前に白い毛並みを持つ虎が現れた。
「お前は確か、ハクだな」
「はい、ハクです」
ハクは微笑んだ。
「懐かしいな。お前と最後に話したのっていつだっけ？」
「あなた様が高校に入学された頃ですなあ」
「そうか、そんなに経つのか。それで、さっきまだ負けていないと言っていたがどうゆう意味だ？」
「誠に勝手ながら力を暴走させました」
「おいおい、そうすると周りにも被害が起きるぞ」
「それはわかっています。でも、まだ揚羽殿の相手をしていますので、まだ時間があります」
「そうか、ならいいんだが。ハク、お前はこんなことを言う為にわざわざ俺の目の前に現れたんじゃないんだろ？早く本題に入れ」
「さすがは宿主。わかっておりますね。では、いくつか質問させてもらいます。まだ、あなたは戦いますか？」
そんなの決まっている。
「戦う」

「負けるとしてもですか？」
「ああ、そうだ」
「なぜ、そこまであの子鬼と戦うんですか？」
「姉さんと約束したから」
倒すって、何度も立ちふさがって止めてやるって。
「あなたにとって聖純揚羽はどんな存在ですか？」
「姉さんは俺にとって姉であり、一人の女性として一緒に歩いて行きたい」
「それは、友達としてか恋人としてですか？」
「それはもちろん。恋人として」
「揚羽は好きですか？」
「好きだ！」
つか、今思ったけどなにこの質問？
「わかりました。ならば勝って聖純揚羽を助けて見せなさい！」
ハクがそう言った瞬間、俺は光に包まれた。
「あ、そうそう、最後に一言ですが、あなたが倒したいのは本当に死神なんですか？」
俺が倒したいのは。

「はあああああああ」
「危なっ！」
次に気が付いた時には、揚羽の拳が顔面に迫ってきていたのでギリギリの所で避け、距離を置いた。
「どうやら、暴走が治まったみたいだな」
揚羽は少し残念そうにしていた。揚羽の服装は所々破けて、肌が見えていた。
「これで、楽しみがなくなってしまったな」
「それは悪かったな。俺だってあのまま意識を意識を失っていたかったさ」

「なら、また意識を失えばいい。まあ、今度は永遠だけどな」
揚羽から禍々しい気が浮き始めた。
「悪いけど。それは無理だ。約束したから」
俺は手を振った。
「約束だと？」
「そう、約束。何回も倒れたって何度でも立ちふさがって止めてやるってね。だから、そろそろ止めようよ。姉さん、死神に頼らないでそろそろちゃんとやろうよ」
「何のことだ？もう一人の私はお前と戦いたくないといつも言っているんだぞ」
「それは知ってる。でもそれが嘘だとしたら？」
「・・・・・・」
揚羽は何も言わない。
「姉さんは言ったよね。力の制御ができず大切な人を傷つけてしまったって」
俺はお構いなしに話を続ける。
「だから、怖かったんでしょ。俺と戦うのが。また、大切な人が傷つくのが見たくなかったから」
「違う」
「違わない。だから、死神という人格を作り出し、戦いだした。その人格に戦いを任せて姉さんは自分の殻に籠っていた。もう一人の自分に任せて逃げ出したんだ」
「違うっ！！」
揚羽は思いっきり叫んだ。
「私は逃げ出していない」
ようやく、本物の姉さんが出てきたな。
「なら、なんで今まで、死神が俺と戦っていたんだ？」
「そ、それは」
「俺は姉さんに言ったはずだよ。姉さんがもし死神だったら何度でも立ちふさがって止めてやるって」

「・・・・・」
「大丈夫だって、俺はそう簡単には傷つかない。それを一番わかっているのは姉さんでしょ？」
つうか、姉さんのおかげでこうなったもんだしな。
「本当にいいのか？もう、手加減はできないぞ」
「構わない」
「本気で行くぞ？お前が負けを認めても止めないぞ？壊れるまでやるぞ？」
「ああ、こっちも遠慮なしで行かせてもらう。何回も倒れたって立ち上がって姉さんを止めてやる」
「・・・・・一つ、いいか？」
「何？」
「なぜ、お前はそんなに私にそこまで言うんだ」
「それは」
・・・・・つか、待て。ここでそれを言っていいのか？なんだか、ギャラリーもすんげー注目しているんだけど。
「それは？」
しかも、姉さん。なんで、顔を赤くしているんだ？ええい、もう、腹くくれ。
「姉さんが俺にとって大切な人だからだよっ！」
今、俺はすんげー顔が赤くなっているのがよくわかる。
「え、えっと、それは友人としてたか。そ、それとも」
「好きだからだよっ！！俺は姉さんが好きだからここまでやるんだ。好きだからこそ、大切な人だからこそ。もう、傷つく姿を見たくないから姉さんを止めるんだ！！」
俺はもう叫んでいた。自分の気持ちを正直に伝える為に叫んでいた。大切な人に伝える為に。
「そうか、大河が私の事を」
「姉さん。もういいだろ？そろそろやろうぜ」
俺は構えた。

「あ、ああ、そうだな。そろそろやるか」
揚羽も構える。
「私の事が好きだからって手加減はするなよ」
「それはこっちのセリフだ」
俺と揚羽は気を集中させる。
「行くぞっ！！鬼流奥義　六道輪廻（ろくどうりんね）！！」
「来いっ！！　琥牙流奥義　森羅万象（しんらばんしょう）！！」
俺と揚羽は技を出し合いぶつかり合った。

揚羽ルート15　後夜祭の

大会が終わり、グランドではみんなで集まって火を囲んでみんなで盛り上がっていた。
「あー、疲れた」
俺は屋上で横になっていた。しっかり、左目に眼帯をつけている。
当分、気は使えないないな。
「おい、不良青年。後夜祭に出なくてもいいのか？」
そしたら、声が聞こえてきた。相手は見なくてもわかっている。
「体痛いからパス。そうゆう、姉さんは？」
「お前と同じで私も体が痛いからパスだ」
「ぷっ、あはははは」
「くくく、ははは」
俺と揚羽はお互い笑いだした。
大会の結果は引き分け。俺と揚羽、最後まで戦いお互いに戦い。お互いにノックダウンした。これ以上、戦っても意味がないと煉磨が判断し、勝負を終わらせた。
「幼少の頃と一緒になったな」
揚羽は俺の隣に腰かけた。
「だね、あの時もお互い戦いまくって両者ノックアウトだったからね」
「あの後、私はお前が気に入り、私の舎弟にしたんだよな？」
「そうだよ。しかも、脅してね」
いや、あの時は本当に怖かった。なんせ、もう、暴れない代わりにお前が私の相手になれって腕を捻りながら言ってくるんだもん。
「い、いいじゃないか。そうしないと、爺がうるさかったんだから」
揚羽は恥ずかしさのあまりにか顔を赤くしていた。
さて、そろそろ本題に入ろう。
「姉さん」

俺は立ち上がり揚羽を見下ろした。
「なんだ？」
揚羽は俺を見上げてくる。
「俺は姉さんが好きだ。姉や友達とではなく。一人の女性として姉さんが好きだ。まだ、弟ではなくて男と頼りないと思うけど。良かったら俺と付き合ってください」
・・・・・よく、こんなキザなセリフがすらすら出てくるな。
「私でいいのか？」
「ああ、いいよ」
「また、いつ、暴走するかわからないんだぞ」
「そん時はまた戦えばいい。俺が暴走した時に姉さんが止めたみたいに、今度は俺が姉さんを止める」
「そ、それに私がＯＫだしたところで優燈はどうする？」
「優燈には昨日の内に言っておいて了承済み。あいつの部屋から出る時、姉さんを幸せにしてあげてって言われた」
「ぐ、あ、あと私は嫉妬深くて寂しがり屋なんだぞ。お前が他の女子と話している時、何をするかわからないし、夜は一人で布団の中で泣いているかも」
「そん時は姉さんも話に加われればいいし、なんだったら姉さんも俺の所に住めばいい。部屋はいくらでもある」
「えっ？いいのか？」
喰いついた。
「ああ、いいよ。さっきも言った通り部屋はいくらでもあるし。それになんだったら姉さんがここを卒業したら、そのまま寮の管理人なればいい。それだったら、いつでも俺と一緒にいられるよ」
「えっと、あと、」
揚羽は必死に言い訳を考えているようだ。
「姉さん、もういいでしょ？今の姉さんは何を言っても俺に言い任されるよ。それとも、俺のこと嫌い？」
「嫌いじゃないっ！むしろっ！」

そこで、ようやく揚羽は自分が何を口走ろうとしているのか気が付いた。
「むしろ？」
でも、俺は揚羽の口からその言葉を聞きたかった。
「・・・き・・・」
「え、何？」
揚羽の声が小さくてあまり聞こえない。
「大好きだ！！私は弟ではなく一人の男として琥牙大河の事が大好きだっ！！」
揚羽は立ち上がり俺に抱きついてくる。
「なら、返事は？」
俺は意地悪をした。
「ＯＫに決まっているだろうか。ばかもの」
揚羽はそのまま俺の唇にキスをした。

揚羽ルート　エピローグ（前書き）

最終回です。

揚羽ルート　エピローグ

それから、いくつかの年月が流れた。
俺達は高校を卒業し、それぞれの道を進んだ。
男性陣は、龍は大学に行き、卒業後、何故か俺の父親がやっている会社に就職。剛は何故かボクシングをやって、透はゲームクリエータ。直斗は情報屋としてみんなしてそれぞれ楽しんでいるようだ。
女性陣は、優燈は高校の頃に書いていた小説を応募し、みごと出版。今も小説を書きながらのんびり過ごしている。鈴は子供好きもあって保育士になり、毎日、子供たちと遊んでいる。渚はなぜか、高校卒業後、武者修行をしてくるといい世界を周りながら旅をしている。まあ、一ヶ月に一回は帰ってくるので大丈夫だろう。音葉は薬作りに興味が出てきたのか医療関係の大学に行き、大学院で薬の開発に勤めている。
このメンバーたちとは今でも一ヶ月に一回は集まって、みんなでわいわいと楽しんでいる。
それから俺と揚羽はというと、俺は大学を卒業後、何故か学園の事務員をやっていた。何故かと言うと煉磨が「ワシの手伝いをしろ」と直々に言ってきたので、そのまま事務員として就職する。
そして、揚羽はあれ以降は暴走せず、高校の頃に俺が言った通りに、寮の管理人になり、学生の朝と夜のごはんを準備したり、寮の掃除をしている。そして、昼は昼で聖純院で師範代理として門下生の相手をしている。
そして今現在。琥牙寮の中庭で、今日は日曜日。
「琥牙流奥義　赤蜻蛉」
まだ、5歳くらいの男の子が俺に向けてとび蹴りを放ってきた。
「う～ん、まだ遅いな」
俺はそれを簡単に避ける。
「じゃあ、これだ　鬼流奥義　爆滅龍」

今度は拳で殴ってこようとする。
「まだ、気が集中しきれてない」
また、俺は避ける。
「くそ、聖純流　霞隠れ」
少年は突進をしてきた。
「捕まえた」
俺はいとも簡単に少年を捕まえた。
「霞隠れは奇襲攻撃だから、正面から突っ込んできちゃ駄目なんだぞ」
俺は少年を抱き上げて頭を撫でてあげた。
「そういえば、そうだった」
「お、手稽古は終わったのか？」
そしたら、揚羽が家の中からお茶を持って出てきた。揚羽のお腹はすっかり膨れている。
「お母さんっ！！」
少年は揚羽を見ると嬉しそうに笑う。
「どうだ、光の稽古は？」
「父親から見ればだいぶ強くなってきたよ。同年代でこいつに勝てるのは少ないだろうな。それより、揚羽、あまり無理しないでくれよ。お前だけの体じゃないんだから」
「わかってる。ただ、そろそろ休憩したらどうだ？」
揚羽はそう言って、ぬれ縁に腰掛ける。
「わかった。ほら、光。休憩するぞ」
俺は光を下ろしながら揚羽の隣に座った。
「僕、まだ大丈夫だから。お爺ちゃんの所まで走り込みしてくる」
光はお茶を飲み干すとさっさと走りに行ってしまった。
もう、この会話からしてわかると思うが、俺と揚羽は俺が大学を卒業すると同時に結婚した。本当は働いて一段落が付いた頃がいいんだが、煉磨が「どうせ結婚するなら早い方がいいだろ。金銭面なら問題ない。ワシが全額持つ」とか言うのでさっさと結婚した。

子供にも恵まれ、息子の琥牙光は今年で7歳になる。そして、揚羽のお腹の中には来月産まれる生命がいる。本当に幸せな家庭を過ごしている。
「誰に似たんだが。光は元気だな。はい、お茶」
「ありがとう。言っとくけど、俺似ではないのは確かだな」
俺は揚羽からお茶を受け取り、一息ついた。
「私もそう思う。むしろ、あれは私似だな。元気のいいところといい。特訓が好きなのといい、確実に性格は私似だな」
自ら認めたよ。
「でも、優しさはお前似だよ。大河。仲間思いといい、気を使うといい。確実にお前のいいところを受け継いでいるよ」
「ありがとう」
俺は少し照れてしまった。
「あ、動いた」
揚羽は嬉しそうに笑いながらお腹を触った。
「どれどれ」
俺も揚羽のお腹に触る。
お腹から何回か振動が伝わってくる。
おー、元気に暴れているな。
「本当だ」
「大河。ありがとうな」
「何が？」
「私を必要にしてくれて。私に産まれてきた意味をくれて。本当にありがとう」
「何をいまさら」
それは結婚する時に何回も聞かされた。もちろん、布団の中で。
「いまさらだからこそ言わせてくれ。ありがとう。そして、これからもよろしく」
「こちらこそよろしく。絶対に揚羽を幸せにする」
「あはは、楽しみにしているよ」

揚羽と俺は見つめ合いながら幸せそうに微笑んだ。

揚羽ルート　エピローグ（後書き）

終わったあああああ！！！！！
ということで、揚羽ルートが終わりました。
ＰＶ３５万突破しました。読者のみなさんとてもありがとうございます。
初めての小説活動でしたから文章が変なところもありましたが、最後まで読んでくれて本当にありがたいです。
これからの予定ですが、このメンバーで新しい話を書いていきたいと思います。
次回作のタイトルは「琥牙寮の愉快な仲間たち」です。
どうぞ、これからもよろしくお願いします。
もう一つの小説、「ずっと僕の側にいて」もよろしくお願いします。
あと、人気投票をしたいんですけど、誰か教えてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8045h/

ようこそ翡翠学園へ

2010年10月8日10時46分発行